



東北大学大学院教育学研究科  
東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター

# 東アジアにおける高等教育の国際化

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2012年 10月



## は し が き

今日、世界中でグローバル化が進行し、東アジアにおいても同様にグローバル化が急速に進み、メガ・コンペティション、多文化共生、格差社会など共通する課題をかかえています。人口流動化の高まりは多文化共生を喫緊の課題としています。こうした国境を超える新たな課題に対して、いかなる人材を育成し、いかなる社会秩序を構想すべきかが問われています。東アジアでは初等中等教育が普及し、教育研究の主題は教育の質的改善へと移りつつあり、思考力、課題解決スキル、省察力、価値や態度などを総合的に育てる教育への転換が模索されています。これらは、東アジア共通の教育課題といえるでしょう。

そうしたなか、東北大学大学院教育学研究科は、2011年度～2015年度の5年間、文部科学省特別経費「東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究」を受け、「アジア共同学位開発プロジェクト」に鋭意、取り組んでいます。

この報告書は、2012年3月28日（水）・29日（木）の2日間、本研究科において開催した国際シンポジウム「東アジアにおける高等教育の国際化」の内容をまとめたものです。この国際シンポジウムでは、本研究科で学位を取得して本国へ戻られ、各大学で活躍されている修了生をシンポジストとして迎えました。中国の大連科技学院、大連理工大学、華東師範大学、河北師範大学、内モンゴル師範大学、韓国の大邱韓医大学校、慶熙大学校、台湾の国立台東大学、私立淡江大学から迎えましたシンポジスト9名より、各大学における国際化の現状と課題について報告いただきました。各国の教育政策、学位制度、各大学の教育課程、国際交流に関して理解を深めることができました。一方、「共同学位」創設への道のりが決して平坦ではないですが、各国・各大学が高等教育の国際化へ向けて力を注いでいる姿を目の当たりにし、日本において本研究科が「共同学位」について開発研究することの必要性・重要性を改めて認識する次第です。

本プロジェクトの初年度にあたる2011年度は、東日本大震災のため、スタートが大幅に遅れましたが、年度末に被災地にある本研究科の修了生を東アジアから迎え、国際シンポジウムを開催できたことは意義深いことと思われまます。修了生のこれからの活躍を祈念するとともに、本プロジェクトへの支援をお願い申し上げます。あわせて、このプロジェクトは未だ緒に就いたばかりで、試行錯誤しながら進めております。国内外の皆様には、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

2012年10月

東北大学大学院教育学研究科副研究科長  
アジア共同学位開発プロジェクト・リーダー  
上 堃 高志



# 目 次

はしがき

## 第一部

開会挨拶 東北大学大学院教育学研究科長 宮腰 英一…………… 1

基調講演 アジア共同学位開発プロジェクト：  
東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究  
東北大学 本郷 一夫…………… 5

講演 1 中国大連科技学院における学位取得の多様化  
大連科技学院 李 旭 光…………… 13

講演 2 中国大連理工大学の国際化について  
—中国の大学の国際化を踏まえて—  
大連理工大学 李 篠 平…………… 17

## 第二部

講演 3 韓国における私立大学の国際化の現状と対応  
—大邱韓医大学校を事例として—  
大邱韓医大学校 姜 永 培…………… 23

講演 4 華東師範大学における国際化の歩み  
—実質的な交流を目指して—  
華東師範大学 陳 曦…………… 31

講演 5 日中における共同学位開発の展望  
—中国河北師範大学の状況に基づいて—  
河北師範大学 董 存 梅…………… 37

講演 6 台湾高等教育の国際化に関する政策と現状について  
国立台東大学 梁 忠 銘…………… 43

講演 7	台湾における高等教育の国際化 —私立淡江大学の国際化戦略— 私立淡江大学 闕百華……………	51
------	---	----

講演 8	長所を生かす高等教育の国際化を目指して —日本の東北大学と中国の内蒙古師範大学の実態の手がかりに— 内蒙古師範大学 宝力朝魯……………	57
------	---	----

### 第三部

講演 9	慶熙大学の新たな挑戦と世界市民教育 慶熙大学校 鄭賢卿……………	66
------	-------------------------------------	----

総合討議	……………	75
------	-------	----

### 資料編

シンポジウム招へい者一覧……………	89
報告資料（パワーポイント）……………	91
写真集……………	131

あとがき……………	137
-----------	-----

# 第一部

## 開会の挨拶

### 基調講演

アジア共同学位開発プロジェクト  
東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究

### 講演 1

中国大連科技学院における学位取得の多様化

### 講演 2

中国大連理工大学の国際化について：  
華東師範大学大学院生の教育を実例として

## 開会の挨拶

東北大学大学院教育学研究科長  
宮腰 英一

おはようございます。教育学研究科長の宮腰英一です。本日は、中国、台湾、韓国の大学から東北大学によろこお越しいただきました。主催者として、皆様のご来学を歓迎申し上げます。

本日の国際シンポジウム「東アジアにおける高等教育の国際化」の開会に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

このたびおいでいただいた皆様は、それぞれこの東北大学に留学され、母国に戻られてから大学で教鞭を執って活躍しておられ、私どもは本当にうれしく思っております。本年度（2011年度）から開始した、東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究のプロジェクトについて、概略をまず紹介させていただきます。

本プロジェクトは、東北大学と東アジアの有力な大学と共同して、国際社会で活躍するリーダー的教育指導者を育成するための共同教育プログラムと、ダブルディグリーあるいはジョイントディグリーといった共同学位プログラムの開発を目的としています。今日、急成長しているアジアにおいて、国境を越えた東アジア地域に共通する課題が山積しています。例えば、多文化共生社会をいかにつくっていくか。そのために多文化教育をどう構築し、学校でどう教えていくか。今日、初等中等教育における教育の質の保証問題や教育における格差問題が広がっていますが、それをどう是正し、改善していくか。さらに、日本では特に少子高齢化という問題を抱えています。高齢化社会に対応する教育課題、あるいは社会問題にどう取り組んでいくか。そのような教育問題や社会問題が山積しています。そうした問題に取り組んでいく広い視野と、非常に高い専門的な知識、技能、能力、あるいは優れたコミュニケーション能力、国際性を備えた人材の育成がわが国のみならず、東アジア各地域で求められています。

グローバル化時代の教育は、もはやドメスティックなものにとどまることなく、東アジアの有力大学と連携・協力して、優れた教育プログラムを開発し、国際的に通用する魅力ある共同学位プログラムの創設は不可避にしています。そのため、本プロジェクトにおいては、国際的共同学位の開発に5ヶ年計画で取り組みます。

大まかな計画としては、最初の3年で修士学位レベルの共同学位プログラムの創設に向けて、その可能性を多面的に探ります。そして、最後の2年間で、パイロットプログラムを実施するといった計画です。そして創設された共同学位の成果と、その運用に関するノウハウを広く教育学系の他の大学への拡大・普及を図るとともに、教育学以外の他の専門領域・研究領域への応用可能性についても念頭に入れて取り組んでいく所存です。

このプログラムは修士（マスター）のディグリーの共同学位を構想していますが、マスター

の2年間で一つの国の大学にとどまらず、韓国、中国、台湾、あるいはシンガポールなどの大学に赴いて、異なる文化、異なる言語、異なる宗教、異なる生活空間で、他の国々の学生とともに学び、切磋琢磨し、心身を鍛える。その中で、当然、スムーズに行くことばかりではありません。いろいろ文化的な面や生活面での対立や葛藤があるかもしれません。その中で協調を探さなければいけません。そのような対立、葛藤、あるいは協調といったものを通して、互いに敬愛し、アジアの共同課題に立ち向かうといった、タフな国際的リーダーを育成することが、この真の狙いです。

こうしたリーダー的な人材育成が、教育学の基礎的・専門的知識・技能を修得した学位、学士課程（バachelorディグリー）の上のマスターディグリーにおいて築かれると考えています。博士課程にまでいくと、高度に細分化された、専門化された課程になるので、そのようなところでは育成できない。この2年間の課程の中で、先ほど言ったタフな人材を育てることが、この共同学位プログラムの狙いになります。

このプログラムは今年度からスタートしましたが、ご存じのように、ちょうど1年前に3.11東日本大震災がありました。その影響でややスタートが遅れましたが、プロジェクトを推進する体制もようやく整ってきました。今後、各国のそれぞれ異なる制度の中で、どう調整していくか、あるいは学位水準をどのように設定していくか。質保証に向けて、どのようなカリキュラムを構成していくか。さらには、学生の募集をどうするか。あるいは教授言語をどのような言語で教えたらいいかといったさまざまな課題がありますが、最終的な目標達成に向けて、われわれが一つ一つ乗り越えていかなければなりません。このような課題についても、皆様のそれぞれの考え、あるいはご経験をお聞かせ願いたいと考えています。

ご承知のように、ヨーロッパではエラスムス・ムンドゥスという計画がスタートしています。それに刺激を受けて、東アジア地域においても、国や地域を越えて、大学間の連携・協力による学生あるいは教員の交流を促進するキャンパス・アジア構想もスタートしています。ヨーロッパでは、エラスムス計画が進行しているところですが、これは1987年に開始されたといわれています。教育の分野だけでなく、行政、政治、あるいはビジネスといったさまざまな分野で高いレベルの人材を輩出し、大きな成果をおさめていると聞いています。

本日のシンポジウムの運営も、本学で学んでいる多くのアジアからの留学生によって支えられています。皆さん自身もご経験をお持ちですが、皆さんは、本学の留学生として、政治、経済、文化、言語、社会的な諸制度といった違いによる障害を乗り越えて、優れた協調性、あるいは競争力を備えた人材として各国、各大学でご活躍しています。これからもそれぞれの国の架け橋となっていただき、これらの問題に取り組んでいただきたいです。さらに、そうした後継者も育てていけたらと、大変期待しているところです。

われわれのプロジェクトは、東アジア地域の優れた大学と連携し、日本人あるいは外国人の垣根を越えた交流を通じた共同教育によって、語学力を含むコミュニケーション能力、異文化理解、多文化環境の下で新しい価値を生み出す能力を備えたグローバルな人材の育成を目標としています。このような私どものプログラムにぜひご協力をお願い申し上げる次第です。



本日と明日の2日にわたる今回のシンポジウムでは、これからの時代にふさわしい教育の指導者の育成、そして共同学位プログラムの創設に向けて、各大学におけるそれぞれの国際化への取り組みの現状、あるいは課題についてお話しいただきます。それから、私どものプログラムに対して、いろいろとご提言・ご提案をいただきたいと思っております。簡単ではありますが、この2日間どうぞよろしくお願い申し上げます。開会に当たってのご挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。



## 基調講演

### アジア共同学位開発プロジェクト 東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究

東北大学 本郷 一夫

最初に基調講演として、アジア共同学位開発プロジェクトの概要について説明をさせていただき、質問やご意見がありましたら伺おうと考えております。予定としては、11時少し前ぐらいまでの時間でお話と質問をお受けしたいと考えています。資料は「Asia Joint-degree Project」というファイルです。スライドと同じ資料ですので、これにもとづいてお話をさせていただきます。

まず、この度のプロジェクトは概算要求の特別経費で採択されたもので、下の方に括弧で書いてある「東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究」というものです。タイトルが長いため、こちらでは通称「アジア共同学位開発プロジェクト」として、頭文字を取って AJP と呼んでいます。「東アジアにおける国際的教育指導者」となっているにもかかわらず、「東アジア共同学位開発プロジェクト」ではなく、「アジア共同学位開発プロジェクト」となっています。これは、プログラムの最終目的として、東アジアにおける共同学位のプロジェクトを進めるわけですが、学生が学ぶ地域は当初から必ずしも東アジアだけに限らず、シンガポールなども含めたアジア全体の地域で学習するということを含めて「アジア」ということになっています。それから、最初は東アジアに限定して始めますが、ゆくゆくは東アジアだけでなく、アジア全体に広げていく、あるいはもう少しヨーロッパ等も含めたものに広げていくというような考えもあって、「アジア共同学位開発プロジェクト」となっています。(スライド1)

次に、共同学位開発の構想です。簡単にいうと、共同学位（ジョイントディグリー）をつかっていくことによって、国際水準のアウトカムの質保証、いわゆる大学院の質を高めていくことを考えています。ページの下(スライド1)にあるように、研究・教育交流の深化などを通して、大学院の質を高めていきます。

「研究・教育交流の深化」で三つ挙げていますが、研究者の交流として、これからはわれわれ教員や大学院生も含めたさまざまな研究の交流、あるいは研究者の交流が必要になってくるでしょう。それによって、最新の知識と技能を得て、それを教育あるいは研究に活かしていきます。

そして、学生の交流として、東アジアの中国、韓国、台湾等から日本にも来ていただきますが、日本の学生もそれぞれの国に出掛けて学ばせようとしています。とりわけ、プログラムを進めていく上で難しくなってくるのは、日本人学生が外に出掛けていくことが、少なくなっていることです。その辺の学生の意識改革と外に行って学ぶ姿勢をどのようにつくっていくかと

いうこと、そういったものを通して質を高めていき、それから、研究者の交流、学生の交流を通して人的ネットワークを形成していきます。このようなものを通して大学院の質を上げていきます。

では、なぜ東アジアなのでしょう。左下のグラフ(スライド2)は、日本における地域別留学需要の予測で、赤くなっているのがアジアです。今でも多いのですが、これからの伸びとしてはアジアからの留学生が随分増えるのではないかと見込まれています。

それから、右下(スライド2)は2009年の調査で、東北大学の留学生の割合です。下にあるように、82.6%がアジアからです。上に文章で書いてあるように、アジア、とりわけ東アジアからの留学生が多く、これからも増えてくるでしょう。

それから、2番目は、多文化共生社会の創成です。東アジアとしての共通性を持ちながら、やはり多様性もそれぞれ持っているので、そのような中での共生社会をどのようにつくっていくかを探ります。

それから3番目は、東アジアの次世代リーダーの育成です。今までは、アメリカやヨーロッパに随分向いていたかと思います。今後もそれらとの連携が必要だと思いますが、アジアに目を向け、東アジアの中でリーダーが育っていくことは大事でしょう。

ここでキー概念として一番難しく、これから検討していかなければいけないことの一つに、国際的教育指導者とは何なのかということがあります。しっかりとした概念が既に出来上がっているわけではなく、これからつくっていかなければなりません。具体的にはどのような人材かということ、一つは教育研究者として東アジアの教育の現状を的確に分析できる人材、それから教育行政の関係者など、東アジアを中心に世界の教育改革を視野に収め、政策立案に携わることのできる人材です。また、大体教員の場合は国内向けの教育がなされていて、国内の価値観を支えていくことが今までは中心になされてきましたが、リーダー教員は東アジアの教育課題を認識して、教育現場での教育実践を担うことができる人材が求められています。ここで大きく3種類の人材が考えられるのではないかと思います。

これらの人材に共通して求められるような能力・資質を簡単にKASPとまとめています。一つは、高度な専門的な知識「Knowledge」で、2番目が大事になってくると思いますが、アジアに対する理解と共感「Attitude」です。これは、アジア地域の文化の共通性、多様性の両方を含めて、アジアに向かうというような態度と理解です。それから3番目は、研究を進めていくには言葉の問題が大きいかと思いますが、研究技法の修得と言語の修得というような、いわゆる「Skill」に当たるようなものです。4番目は、このような知識、態度、スキルなどを踏まえた上で、世界に開かれた人的ネットワークの形成と情報発信のため、東アジアから、それぞれアジアの国あるいは世界に向けて情報発信をしていく「Practice」の部分です。このようにKASPという四つの資質と能力を養成していきます。

このような、東アジアを拠点として東アジアの教育をリードする教育・研究拠点の形成は喫緊の課題であり、これまではこのような人材の育成がなされていないため、このプロジェクトが始まっています。

スライド4をご覧くださいますと、英語でカリキュラム例をつくっています。英語の表現はこれから多少修正していく必要もあるかと思いますが、2年間で共同学位をつくっていくという、なかなか大変な作業です。1年目のモデルケースとして、それぞれの国で基礎的な段階、あるいは基礎的な教育の理論について学習してきていただき、2年目以降、1年間ないし半年という形で、違う国に移動して、そこで研究技法、あるいはフィールドワークなどを通して研究を深めていきます。とりわけ、フィールドワークあるいは調査などは、自分の育った国とは違う国に行き行くことのメリットが大きいのではないかと考えています。そういうものを通して修士の学位を取っていくのが共同学位の構想です。

今年度から始まった共同学位のプロジェクトですが、東北大学における研究拠点の構成です。研究科の教授会、それから皆さまが卒業したときとは名前が変わっているかと思いますが、現在は六つの講座があります。人間形成論から教育設計評価まで、このような講座の名前になっています。その六つの講座に支えられながら、この事業は出発しています。

事業実施代表者、プロジェクト全体会議、プロジェクト推進会議といった会議に専任教員が2名、外国人客員教員が2~4名となっていますが、来年度については、月数にすると24カ月分の外国人客員教員をお招きできます。それから、教育研究支援者、事務補佐員といった体制で拠点を形成し、プロジェクトを運営しています。

スライド6をご覧くださいますと、人的体制と予算です。グラフは当初の予算計画です。現在は、来年度、それから2013年度の予算をつくっている段階で、そこでは多少変動があります。今年度(2011年度)がスタートで、12年、13年と来て、2014年、2015年に予算規模が大きくなっているのは、ここで実際の共同学位に向けた事業を実施し、学生の交流も本格的に進めるということからです。予算総額としては、5年間で予定しているのが5億6300万円です。昨今の日本の経済情勢もあるので、多少、これから減ってくることもあるかと思いますが、なるべくこの予算に近い形で運営していきたいということです。

右側に、専任教員が2名、客員教員は、2014年、2015年は4名となっています。これは人数というよりも、1年間客員教員を雇用したときの人数ということで、月数に直すと、2014年、2015年とも48カ月分となっています。教育研究支援者も、最後の2年間は増やしていくような形になっています。

スライド7をご覧くださいますと、本事業の年次計画です。第1期が今年度(2011年度)になります。ここではいろいろな事業を始めて、整備をしていきます。整備の状況について、今年度何を行ってきたのかについては、3冊の報告書ができていますので、後でご覧いただくと概要が分かるかと思いますが。

来年度、再来年度が第2期で、この4月から入ります。2014年、2015年の2年間で第3期で、ここで共同学位のパイロットプログラムをつくっていきます。来年度に関しては、プログラム創設のところにあるように、サマープログラムの開設をすることになっています。8月23~29日が現在の予定です。22日にはレセプションを実施します。アジアの子ども、アジアの学校の2科目について、授業を全部英語で行います。これが2014年、2015年の共同学位のパ

イロットプログラムの開始につながるプログラムです。

ここを実施すると同時に、ここには書いていませんが、東アジアは時差がほとんどないので、共同の授業をネットワーク回線を通じて行っていきます。例えば、日本の東北大学と中国、韓国、台湾のそれぞれの大学とネットワークで結んで、共同の授業を来年度実施する予定です。今年度、共同の授業を行うためのセットを二つ、こちらに整備しました。

それから、それぞれの大学で現在お持ちの機械に、そのようなものに接続できるものがあれば、そこと同時に結びます。また、今後の計画の進め方によりますが、この計画の年度内にといいことで、東北大学から予算を支出して、必要があればそのような機械をそれぞれの大学に贈ることも可能だということも確認しています。そのような機械を設置して授業を展開していくというような構想を持っています。

ここで予想される研究成果の波及効果ですが、共同学位プログラム開発研究拠点の形成による人的交流の促進・深化・ネットワーク形成が一番になります。ご存じのように、ジョイントディグリーといっても、さまざまな水準のものがあります。少なくとも、ここではダブルディグリーとは分けて考えていますが、それぞれの大学が出す学位ではなくて、共同で一つの学位を出すことを目指すプログラムであり、それを達成するためのプロジェクトです。単純に考えれば、二つ学位を持った方が得ではないかということもあるかもしれませんが、むしろ数ではなく、一つの学位をそれぞれの大学がすり合わせて授業のカリキュラムをつくって出していくところに、大学院の質の保証、質の向上が促進されるというような考えから共同学位を目指しています。実際にはダブルディグリーに比べて、ジョイントディグリーはなかなか難しいところがあるかと思いますが、今年度も含めてこれから5年間の中でそれをつくっていくことが、日本の、あるいは東アジアの高等教育、大学教育にとって必要になってくるというような考えから、共同学位を前面に据えてプロジェクトを動かしています。

それから、各大学との連携の水準ですが、今日、幾つかの大学から来ていただいて、これから先生方の大学ともいろいろな形での連携をしていければと思っています。共同学位を目指すプロジェクトではありますが、必ずしも共同学位というようなものにお互いが合意できなくても、さまざまな形での連携関係があるだろうと考えています。一つは研究交流で、これはすぐにでも始められる事柄ではないかと思っています。これから、先ほど言ったアジアの共通課題、あるいはアジアの共通性と多様性の両方を踏まえた課題解決を志向していくためには、ますます研究交流は盛んになってくると思いますので、このような水準が **Level1** です(スライド9)。

**Level2** としては、より発展的な研究の交流、学生の交流をしていくためには、部局間で協定を締結することが必要になってくると思います。今年度は、韓国の高麗大学と部局間協定を締結しました。それから、まだ締結のサインはしていませんが、台湾の国立政治大学との部局間協定の締結が教授会で承認されています。来年度も幾つかの大学とこのような部局間協定を締結して、さまざまな交流ができるようになってくるのではないかと思います。

**Level3** としては、単位の互換、あるいはダブルディグリーを否定しているわけではないので、可能であれば、ダブルディグリーというような水準での協定に基づく単位を出すことができ

ばということです。

Level4 は、一番上のレベルとして、共同学位（ジョイントディグリー）が作り上げられてくるといいのではないかと考えています。

以上、アジア共同学位開発プロジェクトという、今年度から始まったプロジェクトの概要について説明させていただきました。皆さま方から何か質問、あるいはこれを進めていく上で、このようなことがむしろ大事ではないかというようなご意見をいただけたらと思います。よろしくをお願いします。

清水： ありがとうございます。何か突拍子もないことを考えついたと思われたのではないのでしょうか。私はずっと本郷先生と話し合ってきたので、よく分かりますが、今日初めて聞かれた人は、一体何のことだと疑問に思われる方も少なくないと思います。ご意見、質問等があれば、予定の時間はあと 15 分ぐらいありますので、ご発言いただければと思います。

李旭光： 大連科技学院の李です。本郷先生がおっしゃった内容には、普段触れることがなかったのですが、今お話を聞いて気が付いたのは、単位の互換、あるいは共同学位の場合、どの大学と連携すればいいかということです。まず、相手の大学の水準をどのように判断すればいいか、その判断基準についてということをお聞きしたいです。

本郷： ありがとうございます。昨年 12 月に、共同学位の可能性を探るために国内外の研究者を招いてシンポジウムを開催しました、シンポジウムでのゲストとして中国からは、北京師範大学、華東師範大学、それから部局間協定を結んでいる南京師範大学など三つの大学から来ていただいています。台湾は、国立政治大学と国立台湾師範大学の二つの大学から来ていただいています。配布資料に今申し上げましたシンポジウムの報告書が入っているかと思います。また、韓国については、ソウル大学と高麗大学の二つの大学に来ていただいています。そこだけに限っているわけではありませんが、当初、予定していたジョイントディグリーの可能性を探っているところは今挙げた大学です。それぞれ、各国において十分有力な大学ではないかと認識しています。

清水： 若干補足いたしますと、パートナーとなる大学というのは、かなり幅広く考えています。今、本郷先生からご紹介いただきましたが、全部で七つの大学がコアとなるパートナーの候補である。そのほかにも、幅広くいろいろな形で、いろいろな大学と研究交流や学生交流を進めてみたいと考えています。

本郷： Level4 の大学(スライド 9)として、今の七つの大学を考えました。七つの大学が同時に共同学位を出すわけではなくて、例えば東北大学とどこかの大学というように、二つで共同学位をつくるかあるいは三つの大学でつくるなど、幾つかの形態があると思います。それから、

今、補足をしていただいたように、単位の互換やダブルディグリーから始めるような大学は、幾つかあってもいいでしょう。さらには部局間交流協定や研究交流などというのは、もっと広い大学との交流を進めて、最終的に共同学位というところにつなげていきます。あるいは、共同学位までいかななくても、途中でダブルディグリーや単位互換で、大学の事情によってとどまっても、あるいは国の事情によってとどまってもいいようにします。ただ、将来的にはこのような共同学位というものも頭に入れながら交流していくというような段階です。

宝力朝魯： 先生のお話を聞いて、もう少し教えていただきたいことがあります。中国の場合、今、学歴社会がどんどん進んでいて、20年前だったら、学部を出た段階ですでに高く評価されていましたが、今は、修士課程も普通になっています。それで、修士課程を修了しても就職するのが難しくなってきました。そうすると、博士号を取らなければ就職がますます厳しくなるのではないかと思います。ここで教育のリーダーを育てることを目指す場合は、修士課程のみでは少し足りないと思ひまして、博士課程まで考えたらよいのではないかと思います。このプロジェクトは、修士課程と博士課程のどちらに重みが置かれているのでしょうか。

本郷： ありがとうございます。このプログラムは修士課程のもので、修士課程に限定してつくろうというプログラムです。おっしゃるとおり修士課程を終えて共同学位を取った後にどのような道があるかということの一つとして、博士課程、博士後期課程のことも想定されます。ただ、今、このプロジェクトで想定して進めているのは修士課程です。しかし、同時にこのプロジェクトとは別に、進めようとしているものに、博士課程まで含んだ国際交流を主眼としたプログラムがあります。これが進んでいくと、もう一つの博士課程を主眼とした、あるいは博士課程まで含み込んだプログラムと接続させていくことは可能ではないかと考えています。それは修士から博士というような継続性もあるし、また、もう少し具体的なことになるかと思ひますが、これは5年間のプログラムでその間はお金が付きませんが、5年後にこれが終わったら、このプログラムではお金が付きません。そうすると、これを継続していくためには、違うものも同時に探っていかなければいけません。今、そちらも探っていて、それについてはおっしゃるような、博士課程の方も持つようなものを考えています。

国の制度が、とりわけ中国などで博士課程の方の共同学位、あるいはダブルディグリーのようなものが可能になっているかということ、まだ少し難しいところがあるかと思ひますが、将来的には博士課程の方も可能になるのではないかということです。それから、もし動かすとすると、博士課程の方が単位数は修士課程よりも少なくても済む可能性があります。論文の執筆が中心になると思ひますので、もしかしたら、博士課程の方が共同学位に取り組みやすいということも念頭に置きながら進めようと思ひています。ただ、繰り返しになりますが、このプログラムは修士だけです。

姜永培： 大邱韓医大学の姜です。一つ気になるのは、大学の立場から見れば、共同学位とい



うのは確かに意義のある、価値のあるものだと思いますが、社会からの評価はどうかということですが、教える立場として、確かに日本だけではなく、中国や韓国のことも学べて、両国の学問や文化が理解できるという面では確かにメリットはあるかと思いますが、但し、共同学位というのは限られた期間内で二つの大学から学位を取ることですが、それは、限られた期間の中で二つの教育コースを受けなければいけないということになるので、その辺が一つ気になると思います。

二つ目は、日本の学生が韓国に行って、韓国の先生から韓国語で授業を受けて、どのくらい理解ができるかということです。逆に韓国の学生も、例えば高麗大学・師範大学の学生が東北大学にきて、日本語で授業を受けてどれほど理解できるかが気になると思います。それから、英語で授業を行うとしたときに、専門的なところまでなかなか入ることができず、講義の質が下がってしまう。今、韓国でも、多くの大学が英語で授業を行っています。それが義務化されている大学もあります。そのときには、いくらアメリカなどに留学したとしても、自分の母語の韓国語で授業を行うより、授業の質が下がっているというのが現状です。ソウル大学もそうです。その辺で、もっと実務的なレベルで考えると、それをどのように克服するのかという問題があります。

本郷： ありがとうございます。姜先生からは二つ質問をいただきました。一つ目のジョイントディグリーを取った学生の評価は、まず、ジョイントディグリーができていないのでこれからだと思いますが、この評価を上げるためには、とりわけ優秀な学生をここで出すということが求められてくるのではないかと思います。どのように優秀なのかということも含めて、いろいろなことをアピールしていくことがこれから必要だと思っています。

2番目の問題は、当初からなかなか悩ましい問題で、日本、中国、韓国、台湾を考えたとき、台湾と中国は言葉が通じるかと思いますが、あとはそれぞれ違うので、どのような言葉でやっていくか。最終的に決めていないところもありますし、二つを併用するようなことも考えられると思いますが、先ほどお話ししたように、今年8月に行うサマープログラムは英語です。実質的には英語で行うのが現実的ではないかと思っています。

ただ、それぞれの国に行って学ぶわけですから、それぞれの国の文化を学ぶと同時に、それぞれの国の言葉も学んでもらうというようなプログラムも同時につくりながら、英語で授業をします。英語で授業を行う際に、昨年12月に行ったシンポジウムでもそのような意見が出てきましたが、どうしても母国語でそれぞれが行うよりは教育の質が落ちるのではないかということが考えられます。ただ、12月のシンポジウムで議論になったのは、教育の質といったときの質は、何に焦点を当てるかということです。例えば、基本的なスキルや知識に当たるような部分については、1年目にそれぞれの国で母国語でしっかりと専門を学びますと、その質は落としません。それぞれ、後のより応用的な側面や専門的な側面になったときには、おっしゃるように英語でやることによって、理解が進まない部分もあるかもしれません。ただ、他の文化に触れて、さまざまな価値観や技法を英語で学ぶことによって、違う質の側面を獲得すること

ができるのではないかと思います。むしろそちらを大事にしていくような教育のやり方が考えられるのではないかと。ということで、なるべく専門の質を落とさないようにしながら、今までにはない教育の質を確保していく方法を考えるという点で、英語を基幹に据えた教育を行います。

そうすると、英語で得られるような本や資料などをインターネット経由、あるいは手に取って見られるように本の整備も同時にしていくことがこれからの課題ではないかと思います。そういうものを整備することによって、なるべく質を落とさない努力をしなければいけないと考えています。ありがとうございます。

清水： ありがとうございます。大体予定している時間になりました。まだまだご質問やご意見等があるかと思いますが、明日、全体討論の時間を設けておりますので、そのときにあらためてご意見をいただければと思います。本郷先生、ありがとうございました。

## 中国大連科技学院の学位取得の多様化

大連科技学院 李 旭 光

大連科技学院の李旭光と申します。2年前来たとき大連科技学院は、まだ大連交通大学の下にある学院でしたが、今は完全に独立した私立大学です。中国では私立の大学をすぐつくることができません。まず、国立大学の名の下で何年か運営して、中国の教育部の評価を受けて合格したら、独立できます。

私が今所属している外国語系では、英語と日本語を中心とする外国語の教育を行っています。特に日本語の教育の方法、特に最近では CDIO という工学のやり方を、いかに日本語の教育の中に取り込んでいくかということを中心に研究しています。

次に大連科技学院の国際化についてご紹介したいと思います。先ほどお話ししたように、大連科技学院は、どちらかという研究タイプよりもまず応用人材を育てる方です。そのため、研究よりも学生が卒業し、すぐに就職できることを目指して教育運営をしています。

本学は大学の中にライト国際学院を設立しています。その経緯については、2009年にアメリカのライト大学と国際交流がスタートし、翌年に本学でライト国際学院を設立しました。交流内容としては今のところ二つあります。一つは、本学で勉強しますが、卒業する時ライト大学の学位が取れるという形です。少し詳しく説明しますと、中国政府は今、このような方法をとっても厳しく制限しています。今、大連にある二つの大学がこのような形で運営されています。本学は中国の教育部の認可を受けて、このようなプログラムを進めています。

二つ目は直通式の修士課程に進学するという形です。まず、本学で本科(学部)教育を行い、卒業後に直接、ライト大学で院生教育を受けます。方法としては、入学した時まず願書を出してもらい、特別カリキュラムを編成し、特別クラスに入れて勉強させます。もちろんアメリカのライト大学から本学に教員を派遣して、直接教育活動を行います。最後の試験に合格した者が、ライト大学の大学院に入ることができるという形になっています。

スライド4は、本学のダブルディグリーについてです。私は大連科技学院のことに詳しいので、まずは大連科技学院が今進めているのをご紹介します。

情報化時代の到来と産業構造の変化によって、本学を卒業した学生が、いかにすぐ就職に結びつくかを考え、さまざまな改革を行ってきました。そのパターンとして、最初は4年制で学生を募集して、学生が大学に入ってから学生と学生の親と相談し、4年制ではなく5年制を実施するという改革がありました。この改革は少し難しいところがあり、学生よりも親の抵抗が大きかったです。授業料のことももちろんありますが、主に、ほかの学生と比べて1年遅れることがとても気になったようです。今までも2008年から毎年2クラスほど、60人前後がこの

ようなパターンをとっています。在学期間が5年間に伸びた分、同じものを勉強するかというと、やり方は若干違います。5年間のうちに、その専攻内容をできれば二つにしてやっけていこうとしております。

その時、どのような専攻にすればいいかというと、例えば我々大連科技学院は遼寧省にあるので、まず遼寧省や大連市内の人材の需要を考えて専攻を考えます。ここには主専攻と副専攻と書いてありますが、例えばソフト開発の専攻で入った学生には、あと一つの副専攻を追加します。副専攻を追加する時、まず学生の意見を聞き、学校側が理由について照会し、学校側と学生側の両方が合意したら、その学生は違う専攻にクラス分けして授業を受けます。卒業時点の卒業証書には、もちろん大学に入った時点の専攻を記すと同時に、副専攻も入れます。

本学は遼寧省教育庁の管轄の大学なので、遼寧省の教育庁の認可を受けて、昨年から5年制の学生を募集し始めました。先ほど申し上げましたように、元は4年制で募集した学生に対して意見を求め、学生が同意すれば5年制に変更できるようにしていましたが、今度は学生を募集する時点で、5年制として応募できるようホームページやパンフレットで情報を流して学生を集めています。

今、このような5年コースは三つの専攻があります。「ソフト開発専攻+日本語専攻」「会計専攻+日本語専攻」「機械設計専攻+英語専攻」です。既に昨年から学生が入りましたので、教育を行っています。

二つの専攻になる場合、どちらをメインにしてどちらを補足的なものにするかという問題が発生します。カリキュラムからいえば単位数はほぼ半々です。それは、例えばソフト開発の場合、特に大連市内にはソフト開発に関係する日系企業がたくさん進出しているのです。そのような会社に対して調査を行ったところ、そこではソフト開発の技術や学生の能力よりも、外国語の力がもっと求められていると返答されたからです。そこでカリキュラムをつくる時、できるだけ外国語の授業を増やすようにしました。そのため、今は大体半々という感じで行っています。

卒業するとき、前は主専攻と副専攻を並べて書きましたが、今は専攻が二つであると記載しています。要するに学生が就職するときに、できるだけメリットになるように、例えば外国語が非常に重要視されている場合は外国語の専攻も持っている、ソフトウェア開発の場合はその専攻を持っているということが卒業証書に記されていて、できるだけ自分の長所を生かすことができるということです。

卒業する時点で一番問題となるのは、就職先が確保できるかどうかです。学生を募集する時点で、よく親から電話が来て、1年増やすことで子どもが卒業するときに必ず就職できるのかというような質問が寄せられました。就職というのは、私が大学生だった頃は大学を卒業すると同時に大体大学側が就職先を指定する形だったのですが、今の学生はそうではなく、自分で就職活動をしなればいけないので、大学側としては就職先の保証ができないので、学生募集する時、進路が一つの問題となっています。

二つ目は、二つを専攻する場合は、社会のニーズをよく把握しないと、学生募集する時点で

失敗することが予想されます。

次は、本校のサマープログラムとインターンシップについて、簡単にご紹介したいと思います。本校は専攻によってやり方が若干違いますが、私は語学の担当なので、語学についてご説明します。語学の場合は夏休みなどを利用して、特に日本のさまざまな教育機関と連携し、学生をその機関に派遣して語学の研修をしています。夏休みもちろんですが、そのほかにも3月と5月にまた本校から学生を日本の各機関に派遣し、教育実習を行います。ここで学生が日本に行っている間の単位をどのように認定するかという問題を処理しなければいけません。

その他に、企業での教育実習がほぼ義務化されています。今、本校は専攻によって実習場所が違うなど、みんなそれぞれの会社と契約して実習基地を設置していますが、目的は学生たちの実践力を高めることです。もちろん学内の実習基地もありますが、学外にも今、15の実習基地を持っています。

校内にトレーニングセンターも設立し、企業での教育実習を補足しています。専攻によって企業での実習が難しい場合、校内で特別な形でトレーニングを行います。

私の発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

清水： ありがとうございました。それでは、ご質問、ご意見はいかがでしょうか。では、本郷先生。

本郷： ありがとうございました。スライド2の「本学の国際化等について」というところで、後の方のダブルディグリーというのは、自分の大学でのものだと思いますが、その前のライト国際学院の成立とその経緯が出ていますが、アメリカのどの大学でしょうか。それから、大連科技学院からこのライト大学へ学生が実際どれほど行っているのか。また、これはそこに一方的に送るプログラムなのか、アメリカから大連科技学院に学生を受け入れるようなプログラムもこの中に入っているのかどうかという点について教えてください。

李旭光： アメリカのことはよく分かりませんが、ライト大学というのは、飛行機を発明したライト兄弟のことだそうです。派遣人数ですが35～36名ぐらいです。詳しく話をすれば長くなりますが、今もちろん本学でスタッフが英語教育や、大学院に入る前の準備教育を行っています。アメリカからも教員が来ていますが、学生は短期で1ヶ月などのパターンでよく来ます。それはサマースクールのような形で来ています。主に中国語を専攻しているアメリカの学生が来ています。

清水： では、私から質問です。スライド4のダブルディグリーのお話ですが、「(1) その背景」として、「情報化時代と産業構造の変化によって時代のニーズに応えられない」という表現がありました。時代の変化に対応するために副専攻、つまり専門の知識の幅を広げるといことですね。それから、日系企業に対する調査も踏まえ、語学力が必要だとして、幅広い専門知識

と日本語の教育を行っているということでした。

専門知識はもちろん大切で、これがないと仕事できません。ただ、専門知識があれば仕事ができるかという、そうではありません。会社に入った場合、例えば同僚とのコミュニケーション能力や、問題解決する能力など、場合によってはお客さんときちんと交渉する能力といったものが必要になってくると思います。今、李さんが勤めていらっしゃる大連の科技学院では、学生に対してどのような資質能力を身に付けさせようとしているのでしょうか。はっきりしない質問で恐縮です。

李旭光： よく分かりました。一つの専攻では社会のニーズになかなか応えられないので、どうすれば、育てた学生が卒業してすぐ就職できるかと考えています。今の発表にあったように、例えば他の専攻をプラスすれば、会社側からこのような人材が非常に欲しいということになります。ただ、今、清水先生がおっしゃったように、もちろん会社側が求めるものには、例えばコミュニケーション力や交渉する力などもあります。今日はその話には全然触れませんでした。まず、専攻レベル話でどのような専攻をすれば、社会のニーズに合わせられるかなどです。もう少し具体的に申し上げますと学生に専攻以外にどのような能力が求められるかです。もちろん大いにあると思います。特に日系企業の場合は例えば協力関係やコミュニケーションの力などです。本学には日本でいう就職課のようなところがあり、そこには専門の先生がいて、今、清水先生がおっしゃったようなことを授業で教えます。

宮腰： 確認ですが、スライド 6 に、「卒業証書に二つの学位と専攻を記載」と書いてあります。これは学位が一つで、専攻がメジャーとマイナーというか、主専攻、副専攻というのは書かれていないのですか。学位もやはり二つ出すのですか。

李旭光： 学位は、今、5年制で募集した学生に対して、二つの学位を出します。これも教育の管轄庁から認可されました。申請すれば、すぐ許可が下りるということではなく、結構厳しかったと思います。申請にあたっては、かなり厳しい審査を経ておりますが、そのプロセスもややこしいです。

宮腰： ありがとうございました。

清水： どうもありがとうございました。それでは、李旭光先生の報告を終わりにしたいと思います。

## 講演 2

### 中国大連理工大学の国際化について —中国の大学の国際化を踏まえて—

大連理工大学 李 篠 平

皆さん、こんにちは。私は 1996～2001 年までの 5 年間、東北大学の大学院教育学研究科に大変お世話になりました。指導教官は成人継続教育論の高橋満先生です。このたびは国際シンポジウムにお招きいただき、久しぶりに先生方、および同級生、先輩、後輩の皆さまに再会することができて、とても幸せに感じています。あらためて感謝の意を表します。

早速、私の発表を始めさせていただきます。発表するテーマは、「中国大連理工大学の国際化について」です。

初めに、中国の大学の国際化についてです。1977 年 10 月に、中国は 10 年間にわたる文化大革命が終わり、改革開放政策を始めました。国の扉を開くと、待ちに待った数多くの若者が外国へ留学する道を選びました。20 代はもちろん、30 代、40 代、50 代の方も多くいました。統計によると、1978～2007 年の 20 年間に、世界各国へ留学した中国人留学生は合わせて 106.7 万人で、そのうちの 27.5 万人は既に帰国して、国の経済発展に重要な役割を果たしています。

例えば 2005 年度の国家自然科学賞の第一取得者の 73.7%が留学経験のある人々です。また、中国科学院の 81%を占めるアカデミー会員が留学帰国者です。国家教育部所属の大学のリーダー的人物は、実に 80%が留学経験者です。全国の大学における博士指導教官の 3 分の 2 は留学帰国者です。

一方、1980 年代から大学の管理者や専門家たちも外国の大学を訪問し、教育交流や学術交流を行うようになってきました。現在、各大学は世界 184 ヶ国や地域および国連と協力関係を結び、外国の経験を学びながら、自国の教育改革を推進しています。同時に、外国の大学からも管理者や研究者を招き、授業や技術開発、共同研究などを続けています。

経済成長と外国との交流の深まりにつれて、中国の教育事情や中国文化などを外国へ紹介する機構も生まれました。代表的な教育機構は孔子学院です。孔子学院は、中国が海外の大学などの教育機関と提携し、中国語と中国文学を教育・宣伝し、世界各国と友好関係醸成を目的に設立した公的機関です。現在、世界各国に 200 以上の孔子学院が設けられています。その内、日本には 2005 年に立命館大学と北京大学の提携により設置された立命館孔子学院をはじめ、現在、12 の大学に孔子学院が設立されています。

次に、中国の大学の国際化への挑戦についてです。30 年前、長年にわたって国を閉ざしていた中国が門を開けた際、外国の外部の世界からの挑戦は言うまでもなく厳しいものでした。大学の人材と資源の競争は日増しに厳しくなり、外国の大学と中国の大学は、優秀な学生の争奪戦を展開してきました。2009 年にイギリス、アメリカ、香港などの国・地域の大学が、北京、

上海、広州などの地域で行った学生募集は非常に人気がありました。既に中国の有名な大学から合格通知書を受けていた一部の学生も海外有名大学を選びました。その中には、大学入試の主席合格者も少なくありませんでした。中国の高等教育は既に厳しい国際化の挑戦に直面しているといった声が、しばしば新聞紙上ににぎわせていました。世界最大の発展途上国として、国際化は巨大な挑戦であるとともに、発展のチャンスでもありました。

多くの大学が積極的に、先進国の一流大学と提携し、シラバスを改革し、カリキュラムをつくり直しました。教員同士の相互派遣も推進し、より進んだ教育理念にあらため、国際意識を磨き、教育の質の向上を図ることができるようになってきたのです。また、外国の一流の研究機関と共同研究を行い、飛躍的に学術水準を高めることができるようになりました。さらに、大学生を外国に派遣し、外国語で学び、生活するという機会を増やして、多文化への視野を広げていくように努力してきました。同時に、外国人教員、留学生の制度も改革し、徐々に整えて、より多くの外国人が来られるような環境づくりにも努力してきました。

次は、大連理工大学の国際化についてです。まず、大連市の紹介です。地図をご覧ください。まずと分かるように、大連理工大学は、中国東北地方の遼寧省大連市にあります。

大連市は大陸から渤海と黄海の境目に突き出した遼東半島の先端に位置しています。市内に約 680 万人の人口を抱えている都市で、北の香港といわれ、日々すさまじい発展を遂げています。国連によって、カナダのバンクーバーとともに、世界で最も安全な都市に選ばれました。環境は、三面を海に囲まれ、季節がはっきりしており、快適な気候です。また、産業としては、石油化学工業、造船、現代設備製造、電子産業基地、物流が挙げられます。

1984 年に経済技術開発区の建設が始まるとともに、外資の進出が本格化してきました。現在、1 万 3000 社あまりの外資企業が進出していますが、その中で日系企業は 4000 社を超えています。日本からも近く、飛行機で仙台から約 2 時間 20 分、東京からも約 2 時間半です。また、大阪、名古屋、富山、福岡など、地方への便も多い上に、空港から市内までせいぜい 20~30 分ぐらいです。まさに国内感覚といってもいい手軽さです。

次に、大連理工大学はどういう大学かについて、少し紹介させていただきます。これは大連市の様子です(スライド 7、8)。

大連市には 24 の大学があります(スライド 9 ページ)。大連理工大学は、中国が成立した 1949 年に国の指示によって設立された国立大学です。理学と工学を中心に経済、管理、文学、法学などの文系も設立された総合的な重点大学です。22 の学部で 60 の専攻と四つのダブル学位があり、学生は社会人を含めて 8 万人います。大連理工大学は「211 工程」と「985 工程」の両方に指定された大学です。21 世紀に求められる複合的なエリート人材を育てることが教育目標で、それを実現するためには、大学の国際化の推進は欠かせません。

「211 工程」と「985 工程」とは何か、十分ご存じでない方もいらっしゃるかと思いますので、ご紹介します。

「211 工程」とは、1993 年 7 月に、21 世紀へ向けて 100 校前後の高等教育機関と重点学科を集中的に整備するプロジェクトです。社会発展の中で生じるさまざまな問題を科学技術力によ



って解決できる専門人材の基盤を構築することを目標にしています。2010年2月までに、112の大学が「211工程」対象校に指定されています。

「985工程」は、1999年に世界先進レベルのイノベーション研究型大学の構築を目指すものとしてスタートしたものです。世界一流のハイレベルな大学の構築を目指す国家プロジェクトであり、北京大学、清華大学など一部の優秀な大学に国家予算を集中的に投入してきました。2010年2月まで、39校がこのプロジェクトの対象校に指定されました。

次は、大連理工大学の教育の国際化です(スライド14)。大連理工大学もほかの大学と同じく大学の国際化を大学発展の重要な戦略的目標として、交流センターをはじめ各部門が力を合わせて推進しています。教育の質を高め、国際的に認められるレベルの高い大学教育にし、国際的に知名度の高い大学に匹敵する質の高い大学教育システムをつくるために、教育拠点を開設し、共同運営を行い、それによって、外国の先進的な教育理念と管理制度、プログラム設置、教育内容・方法を直接導入するように努めてきました。

1998年から、世界各国の有名大学やその学部と友好関係を結びました。それをきっかけに人的な交流が始まりました。まず、外国の優秀な学者や大学の教授を招待し、大学教育、また管理の仕事に直接参加していただいたり、長期間にわたって外国語の授業や専門科目を担当し、大学院生の指導もしていただいたりしました。その期間中、本校の教員と共同研究や教育交流を展開し、教員の教育の質や研究能力の向上を促しました。これまでの30年間、18の国家や地域の118の外国の大学、研究機構および大型企業グループと協力関係を結びました。また、300人ほどの学者や専門家、ノーベル賞受賞者を名誉教授や客員教授として招待し、大学のほぼ全学科の領域にわたって共同研究や講演、公開講座、院生の指導などを行ってきました。いままでも短期間の講義担当や公開講座、講演などにお招きした外国の大学の教授や先生は1000人を超え、短期訪問者も7000人余りいました。

次に、外国の大学に教員や学生の派遣を開始しました。外国での生活や勉強を通して、異文化の体験をさせ、国際感覚を磨き、国際意識を身に付けさせることが目的でした。例えば、外国の大学と共同の学位教育プロジェクトの中で、1年間、外国へ行って学ばせたり、短期間外国へ行って研究や教育活動、実験室業務や実習、設計などを含めた活動に参加させたり、国際的な大学生科学技術コンクールや学生フォーラム、国際会議などに参加させたりしています。

2008～2010年の3年間に、学者訪問、共同研究、学術会議、講義担当などのために、50の国家と地域に長期教師研修、長短期留学生を合わせて3500人ほど派遣しました。現在、学生だけの国際交流活動も5種類・50項目があり、2008年からの3年間に1400名の学生を外国の大学へ派遣しています。

それに伴って、大学は留学生センターもつくり、外国からの留学生の受け入れ体制を整えるようにしています。1993～2001年まで、70ヶ国から5000名の外国人留学生を受け入れ、中国やほかの地域について勉強しています。現在、外国人留学生は650人が在籍しており、そのうち日本人留学生は70人ぐらいです。この数は徐々に増えてきています。日本人留学生は、3カ月～1年間、留学に来られる学生が多いですが、1年間で中国語の検定試験(HSK)に合格し

て、中国言語学、文学部に進学する学生が多いです。また、管理学院の大学に進学する人もいます。昨年9月に、キャンパス内に留学生会館ができました。部屋の数が多いので、誰でも申請すれば入居できます。

2006年に大連理工大学は国際的に知名度の高い研究型大学を目指し、国際交流をさらに促進する目的で、大連理工大学国際化基金を設立しました。主に、海外学者の短期来訪、大学教員の海外研修、学会への参加、国際シンポジウムの主催および協定大学の学生訪問、主に提携関係の大学の学生来訪の経費の負担に専用経費を提供しています。

その後、より多くの外国人留学生を支援するために、外国人留学生奨学金制度も設立しました。大学は積極的に教員の国際化、教育の国際化、学生の国際化、大学雰囲気の国際化を推進し、教授を中心に各学院、学部を舞台に大学を窓口にするといった国際共同交流のモデルを構築しています。教員の国際学術での活躍を仕込み、学生の国際意識を育て、外国での知名度の高い大学や研究機構と長期的な協力関係を発展させ、国際交流の基盤をつくり、国内外における教育・研究の資源を分かち合い、優位性を互惠互利することのできる協働枠組みを構築しています。日がたつにつれて、大学の国際化が進められ、外国の大学との相互理解も深まってきました。大学の学術と科学研究の水準を全体的に高めることを目的にして、共同研究ネットワークがつけられ、大学の内部に連合研究センター、プロジェクトセンター、また実験室を設立し、世界各国の学者に開放して、共同研究を展開しています。

2008～2011年の4年間、大学主催の国際会議やシンポジウムは55回、国内外の参加者は1.3万人ありました。同じ時期、大学から50の国・地域に、長期間留学の教師、国際会議、共同研究、講義、講演など、派遣した教員は3500人いました。国費留学生として1400名の学生も派遣しました。

今後の課題についてです。2006年に大連理工大学は国際化基金を設立し、教師同士の共同研究の展開を期待していましたが、今のところは不十分であり、それを長期的に進めていきたいと思っています。もう一つは、協定校の退官教授同士の交流です。基本的には70歳未満で健康状態が良ければ、退官されても提携大学との共同研究や交流を続けていきたいという考えです。また、留学生の相互派遣制度のアンバランスについては、これまで中国に来ていただいた日本人留学生は少なく、逆に中国から日本に来た留学生の数は多いです。中国語のできる日本人が少ないことは日系の企業からいろいろ聞いていました。

これに関連して、中国の将来性についてお話しします。2010年、中国はアメリカに次いで第2位のGDP（国民総生産）を実現しました。中国のGDP成長率は1979～2008年の30年間、年平均9.8に達しました。この間の中国の成長率は、同時期の日本の2.4%を大幅に上回っているだけでなく、奇跡と呼ばれる高度成長期当時の日本よりも高く、期間も長くなっています。

2008年秋の世界的金融危機においては、震源地のアメリカにとどまらず、先進地域も大きな打撃を受けている中で、中国経済は大きな影響を受けず、成長し続けています。2009年10月に発表されたIMFの世界経済見通しによると、2009年の中国の成長率はG20という主要国地域の中で、最も高い8.5%に達しました。中国は世界的金融危機を乗り越え、高成長の持続に

成功したことにより、世界からの注目を受けています。

現在、中国語を学ぶ人口は、世界で約 4000 万人に達しています。欧米での中国語学習者も急増しており、学習者人口はフランス語、スペイン語に次いで 3 番目となりました。また、全米では、中国語科目を設置する公立、私立の学校は、10 年前の 200 校から、今は 1600 校に激増し、今も増加の勢いはとどまらない様子です。また、日本国内でも中国語学習者の人口は増加の一途をたどっており、今、200 万人を突破したとされています。中国との関係が緊密化する中で、中国語が話せる人材の必要性がますます高まり、中国語の学習者は今後も増加していくと見られています。

一方、アンケートによると、日本企業が海外拠点の設置・運営に当たり、企業のグローバル化を推進する役割を担う国内の人材が不足していると答えている企業が、回答企業の約 7 割となっています。また、グローバル人材の中で、特に外国人とのコミュニケーション能力を備えた人材は、海外進出先だけでなく、国内業務を行う上でも求められていることが分かりました。企業側は、海外における今後の最重要拠点を中国と認識しているのに対して、将来を担う学生は欧米志向が強く、中国を中心としたアジアにおける就労をあまり望んでいないというアンケート調査結果も出ており、企業側の人材ニーズと学生の意識の間に大きな乖離が見られています。

上述のような企業側のニーズから察すると、今後の海外最重要拠点と位置付けている中国への進出、また、そのための人材確保に向けて、英語だけでなく、中国語のコミュニケーション能力の高い人材が求められています。その上で、能力の評価基準として、客観的に中国の語学能力を証明することができ、かつ、世界で共通の HSK が TOEIC や TOEFL のように、大学の入学選択基準や卒業の条件として活用されています。また、企業の採用・昇進・昇格基準として活用される機会もますます多くなっていくと思われます。

最後に、国際化についての展望です。中国経済は必然的に改革・開放という国の指導の下で、グローバル化しながら進展し続けなければなりません。従って、人材による支えは絶対に欠かすことのできないものです。まず、温家宝総理がおっしゃるように「国運の興亡は教育にあり、一流の教育があつてこそ、一流の人材が育つ」ということです。大連理工大学の国際化も中国の国際化とともに、既に国の中核的競争力に影響を与える重要な要素の一つとなっており、国の発展戦略の一つの重要な側面になっています。未来に向けて、大学の国際化は必ずより大きく、より速く飛躍的に発展していくに違いないと思います。

私のご報告は以上です。ありがとうございました。

清水： ありがとうございました。それではご質問、ご意見等をいただければと思います。

李篠平： 先ほど大学の状況についてご紹介しましたが、私は外語学院に所属しております、外語学院のことについて、少しご紹介させていただきます。外語学院の国際化は、理工大学の国際化とともに進んできましたが、これまでは日本の 13 の大学と友好関係を結んでいます。

単位交換、短期留学、ダブル学位ではありませんが、3+1 または 2+2 というような方針で進めていくと、3月の大学関係者の会議で学長から指示されました。私が来る前に、院長に、「これから東北大学へ行き、シンポジウムに参加します」と報告したら、東北大学と姉妹校になって何十年もたっているのに、機会があれば、3+1 や 2+2 というコースを共同で教育することができれば、ぜひ検討させていただきたいというお話もありました。

ただ、日本語学部なので、教育専攻ではありません。言葉は3年生になると、授業を聞いたり、発表したりするような能力が備わるようになると思いますが、ただ専門の問題もあるので、これからは共同で何かやるとすれば、どのような形でクリアしていけばいいのか、検討すべきではないかと思います。

清水： ありがとうございます。一つ確認ですが、3+1、2+2 というのは学部の方ですね。

李篠平： 具体的な進め方については、大学から各学部任せられています。大学の方針としては、これからそういう方向に向かって進めていきなさいという指示を受けました。われわれは外語学院なので、今は主に英語と日本語、ロシア語、フランス語など、さまざまな言語教育を行っているので、それぞれの対象国とどうやって 3+1、2+2 のコースを進めていけばいいのか検討してほしいということでした。

本郷： 大学院のプログラムは何かありますか。

李篠平： 外語学院の場合は、まず日本語が専門なので、4年前から城西大学と博士コースを共同でつくりました。主に中国で日本語専攻の大学の先生を集めて、集中講義という形で中国と日本の両方で授業を受けます。基本的には、普段は大連理工大学で授業を行いますが、夏休みと冬休みを活かして、城西大学で集中講義と論文の指導をしていただくということになっています。

なぜそのようなコースをつくったのかというと、先ほど宝力朝魯先生もおっしゃったように、今、学位は将来の昇格につながるもので、博士号がなければ、理工大学では基本的に教授は無理です。ほかの大学も同じような事情です。ただ、いったん留学に行くと、1年間ぐらいは職が保てますが、1年以上職場を離れると、仕事を辞めなければなりません。仕事をしながら勉強したい人の要望に合わせて、このコースをつくりました。

清水： それではよろしいでしょうか。また後でもお話をする機会があるかと思いますが、李篠平先生のご報告はこれでおしまいです。先生、どうもありがとうございました。

# 第二部

## 講演 3

韓国における私立大学の国際化の現状と対応  
—大邱韓医大学校を事例として—

## 講演 4

華東師範大学における国際化の歩み  
—実質的な交流を目指して—

## 講演 5

日中における共同学位開発の展望  
—中国河北師範大学の状況に基づいて—

## 講演 6

台湾高等教育の国際化に関する政策と現状について

## 講演 7

台湾における高等教育の国際化  
—私立淡江大学の国際化戦略—

## 講演 8

長所を生かす高等教育の国際化を目指して

### 講演 3

#### 韓国における私立大学の国際化の現状と対応

大邱韓医大学校 姜 永 培

発表に入る前に、二つ確認させていただきたいと思います。今回は、どちらかというところと研究者というより卒業生としての立場で、依頼を受けた内容に沿って発表したいと思います。

まず、私が勤めている大学は、漢字からも何となくお分かりになったと思いますが、いわゆる東洋医学の漢方医を養成するためにつくられた大学です。日本の医科大学のようなもので、偏差値としても最も高い、医科大学と同じぐらいの大学です。もともとそのような大学が拡大して、今は4年制の総合大学になっています。私は青少年教育相談学科で仕事をしています。

今回の東北大学への訪問は、自分にとってはかなり意義深いものです。私は、昨年3月11日の前まで仙台にいました。昨年3月まで、名取にある尚絅学院大学で教員として仕事をしていた、その後、韓国に戻って仕事をしたいということになりました。皆さんもご存じかと思いますが、韓国は新学期が3月に始まります。向こうは人事も決まっていることと、学期も始まっているので、なるべく早く来てほしいという要望がありました。しかし、日本の場合は3月末まで仕事がありましたが、大学から早めに帰ってもよいということになり、3月11日の前の週に韓国に戻りました。

それで偶然、NHKの番組を見ていたら、名取が出ていました。留学を含めて10年ほど仙台で生活をしていたので、本当のことなのかと疑いながら、家族と一緒にテレビを見ていました。それからちょうど1年ぶりに仙台に戻ってくることができました。昨日も展示会で昨年の震災の記録を見てきました。

まず、自分の専門分野は若者論です。学部のと時からずっと若者論を勉強してきました。東北大学在学中も、若者の職業の問題、職業意識向上について高橋満先生の下で4年半ほど留学していました。最近、興味を持っているのは若者政策で、比較政策論という立場から、日本や欧米、特に韓国から職業社会への移行の問題、管理者の問題に興味を持っています。一方では、失業になると貧困や福祉ということも一つの課題になるかと思っておりますので、その辺について勉強しています。

先ほどご紹介したように、私は尚絅学院大学で4年間、その前に韓国の4年制の総合大学で1年間仕事をしました。その後、また仙台に戻ってきて、また尚絅学院大学の現代社会学科で4年間仕事をしました。去年の春から現在勤めている大邱韓医大学の青少年教育相談学科で仕事をしています。

青少年相談学科というと、ヨーロッパでよくいうユースワーカーを養成するためのカウンセラーや教育ということで、教師とは違った形で若者の教育を担当する専門家を養成する学科です。

大邱という町は、皆さんご存じかと思いますが、昨年の世界陸上が開催された町です。自分も娘を連れて、一度スタジアムに見にいきましたが、ボルトは速かったです。生で見えてすごいなと思いました。ちょうど準決勝を見ていたのですが、決勝で彼はフライングして結局走れませんでした。それで、自分の中では事実上の決勝を見たということになっています。そのような町です。○を付けておきましたが、この辺（スライド）がソウル、大邱、これが釜山です。KTX という日本の新幹線のようなもので、ソウルから大邱までは1時間50分ぐらいかかります。ですから、仙台ー東京ぐらいという感じです。

大邱の人口は250万人です。韓国で最も人口の多い町はソウルで1000万人、その次に釜山が380万人ぐらいです。その次に3番目ぐらいになるとと思いますが、仁川も似たり寄ったりだと思いますが、250万人の町です。

正確には大邱の隣の慶山市が大学の所在地です。私立大学で、設立して31～32年です。学生の数ですが、学部生がメインで、大学院生も含めて7000人ほどです。韓国の総合大学の定員は大体2万人で、総合大学の中でも5000～1万人ぐらいが中堅といわれていますが、それほど規模の大学です。現在、海外からの留学生は、中国、ベトナム、日本を含めて144名ほどです。

今回のプロジェクトについて高麗大学やソウル大学の先生が東北大学で講演をされたという話を聞いています。韓国の大学では、国際化が国立大学だけではなく、すべての大学において一つの課題になっています。歴史的な背景としては、1990年代半ばごろ、金泳三が大統領を務めているときに、国の政策として国際化を掲げました。その一環として大学も積極的に国外に向けて開放し、なるべく多くの人を外に送り出して、いわゆる国際的人材をグローバルスタンダードに沿って育成するという方針が推進されることになりました。現在でも、様々な大学で国際化を大学の一つの大きな課題として進めています。

もう一つ考えなければいけないのは、1994年度から韓国の教育部（現教育科学技術部）が大学を評価するようになったことです。それは大学総合評価制度というものです。その中で、国際化が一つの評価項目に含まれることになりました。この中を見てみると、受け入れる留学生の数、留学生のためにどのぐらい講座数、外国人教員の割合などが含まれます。それで、大学でも積極的に外国人教員を受け入れることになりました。例えばソウル大学などでは、国語文学学科で外国人が韓国の文学を教えるというような時代になっているほどなので、かなり変わっています。

もう一つ、韓国の大学が最近気にしていることは、タイム誌などが行っている大学の国際評価です。いわゆるメジャー級の大学はとてそれを気にします。ソウル大学もそうです。国際化という項目も当然含まれていますから、現時点で受け入れるという体制が十分整えられていないので、積極的に国際化を進めている状況です。

大学国際化を幾つかの段階に分けてみました。まずは国内で英語を教えることです。特に教養英語や実用英語などを教えます。次に短期留学、つまり語学研修です。特にアメリカ、カナダ、オーストラリアなどへ行く学生が多いです。最近は経費の問題で、フィリピンなどにも、

子どもたちも含めて、学生たちが半年、あるいは1年間留学することもあります。また、交換留学として、姉妹校というネットワークを使って、いろいろなところに韓国の学生たちが留学しています。どちらかという、英語圏の希望者が多いのが現状です。短期から長期ということですが、1年間の語学研修ではなく、留学という形になります。以前は大学生になってからだったのが今は小学生から早期留学させ、アメリカをはじめ、いろいろな国で勉強をしていました。それが10年前のことで、最近は戻ってきています。小・中はアメリカで、大学は韓国で勉強します。このような場合、彼らは逆に韓国語が自由に話せないのが、大学では彼らのために英語の授業を用意しています。

一方では、企業のニーズが大きいことが挙げられます。先ほど申し上げたように、グローバルスタンダードで、英語ができるという語学プラス、経営学や会計、財務などの知識を求めようになりました。それが結局、大学にも影響を及ぼし、大学では積極的に企業のニーズに応えるような形で、国際化を進めざるを得ないという状況もあります。

もう一つは、受験生たちも大学の国際化を、大学を選択する際の一つの指標として考えていることです。そのため、大学側としても自分の大学が進めている国際化の事情などを、受験生にも積極的に発信しています。1年生から交換留学に行きたい、あるいは外国に行ってもっと勉強したいと言いますので、そういうことを含めて考えると、現時点で韓国の私立大学を含めたすべての大学にとって、国際化は選択ではなく、必修になっているといえようかと思えます。

大邱韓医大学の国際化の取り組みを五つに分けて説明したいと思います(スライド5)。それは、交換留学生制度、海外インターンシップ語学研修、複数学位制度と World Explore Program という大学独自でつくったものです。

大邱と釜山は九州に近いので、日本だと大阪教育大学や福岡教育大学などとの交流が多いです。今回私が大邱から仙台に来るためには、まず大邱から列車に乗ってソウルに行って、ソウルからまた列車に乗って仁川に行って、仁川から仙台ということになります。留学になると、大邱から釜山に行ってすぐに福岡というように、船でも行けます。それで、この辺だと九州大をはじめ、その近辺の大学と交流している大学が多いです。

アメリカなどでは海外インターンシップということで、大学で半年語学研修をして、その後、企業に行ってインターンシップを行うという制度も実施しています。本学では、語学研修をアメリカやイギリス、中国、フィリピンなど国の大学と提携しています。海外インターンシップはカナダや中国の大学と提携を結んでいます。また、大阪教育大学などと交換留学生制度を立ち上げています。日本の大学とは、主に語学研修に近いような感じです。複数学位は中国の四川師範大学と組んでいます。

国際交流プログラムは、まず語学力の向上と異文化体験を目的として行っています。期間は半年から1年です。派遣大学は Eastern Kentucky 大学や日本、中国の大学などに学生を送り出しています。

国際交流プログラムは基本的に授業料を韓医大学に払って、協定校では授業料を払いません。イギリスもそうですが、物価の高い国に行く場合にはどちらで授業料を払うのかということも



学生にとっては気になる場所なので、なるべく負担の少ないようにするためです。

単位の認定は受講科目の内容によって各学科で決定します。それは難しいところですが、内容を見て、それを専門科目として認めるのか、教養科目として認めるのか、さまざまなパターンがあり得るので、それは各学科で判断するような形をとっています。

次は、海外現場学習制度についてです（スライド9）。期間は半年間、特にフィリピンの大学やカナダ、中国の大学に派遣します。留学した学生は大学での勉強もしますが、現地の企業に行って、インターンシップもできる制度です。

この制度では大学から1人100万ウォンの補助をします。100万ウォンは日本円に換算すると7万円前後になると思います。単位の認定については、派遣大学で取得した単位をすべて認定します。それは前もって両方で協議をし、履修科目を留学する前に決める形を取っています。授業科目の内容については各学科の教員がある程度分かりあっているので、それに対してはすべて認定するような形をとっています。但しこの制度は自分が出掛ける国や地域の言語の公認の資格や証明書を大学に出すことが条件になっています。そのような条件については前もって学生に知らせ、学生はそれを見て自分がそれを満たしているかどうかを判断し、志願するような形になっています。

語学研修については、特に条件はありません。言葉を習うために出掛けるので、半年から1年間という期間です。派遣先はアメリカの大学です。大学からの支援として、派遣大学での授業料を全額補助します。就職する上で、言葉ができるということは一つ大きなメリットです。大学としてもなるべくそのような機会を学生に与えたいので、授業料を全額補助しています。このように語学研修という形で海外に出掛ける学生は、年間20名程度です。

複数学位はイースタン・ケンタッキー大学と行っています。実際学部生のなかで実際に取った学生が何人かいます。基本的には、自分の大学で2年間勉強して、派遣大学でまた1~2年間勉強します。両方の卒業条件を満たした場合、両方から学位を出すようにしています。大学からの支援としては、授業料の半額を補助します。

派遣条件は、まず、教養科目の履修です。学部の2年生は教養科目を受けなければいけないので、出掛ける前に教養科目は全部履修することになります。次は語学力で、TOEFL基準にしています。学生は公募を見て応募するような形をとっています。他に、70単位を履修しなければなりません。今、韓国の大体の大学は、卒業認定単位が140単位ほどですから、70単位というと、2年生までに履修する単位になります。実際、アメリカの大学で5名の学生が複数学位を取得しました。中国の大学では3名が取っています。

上述の通り、この制度があっても、実際にこれを利用して二つの学位を取るということは、それほどよくあるケースではありません。ただし、大学としては学生が取れるような仕組みを用意するというのを大学の役割として認識していると思います。

海外インターンシップについても、大学が奨学金という名目で150万ウォンを補助します。派遣条件は2年生以上であることと、語学力です。英語や、派遣先の国の言葉の能力を前もって評価します。実績としては、2007年度に5名を派遣しました。

自分の場合は先ほど申し上げたように、東北大学で5年近くお世話になりました。当時アメリカの大学に行きたいと思っていましたが、ちょうど自分が大学を卒業したのが1997年で、IMFから救済を受ける年でした。また自分の大学院の指導教員が東北大学の先生と交流がありましたので、仙台に来ることになりました。もう一つの理由としては、教育学というか、社会学分野において日本で学位を取って、大学で教員をしている方を一人も見ることがなかったからです。韓国と日本という、常に歴史の問題になってしまいます。そのため、社会をテーマに日本でもっと勉強したいということも日本に留学したきっかけです。

思い出に残っているのは三条町です。留学生というとやはり三条町で、国際交流会館が一つの思い出です。9月末に仙台にきて、芋煮会を経験しました。このような経験は韓国ではなかなかできないものでした。昼にお酒を飲むという習慣がないので、それはある意味でカルチャーショックでした。お酒がまずいわけがないので、それなりに楽しかったという思い出を持っています。ゼミ合宿という習慣も韓国にはないので、それが自分にとってかなり楽しかったです。岩手辺りだったと思いますが、毎年行った記憶があります。それは自分にとって大きな思い出になっています。

もう一つは、中坊公平先生を皆さんご存じかと思います。3階の掲示板で偶然、中坊先生に関わる留学生のフォーラムを開くというので、志願したところ参加することができました。それで豊島まで行き、さまざまな国からの留学生や日本の学生と環境問題について考えることができました。自分の専門とは全く関係ありませんでしたが、実際に豊島まで行って、中坊先生の講演を聴いたりしたことも、自分の中では大きな思い出として残っています。

それから、サッカーというのは、今も活動しているかどうか分かりませんが、ペダゴジアという、主に教育学部の学部生がメインになって活動しているサッカー部があります。自分もスポーツが好きなので、留学して最初に買ったのは、本ではなくサッカーシューズでした。それはそれなりに楽しかったです。それも牛越橋の近くで毎週サッカーをしていました。テニスコートが北キャンパスにありましたので、スポーツ文化論の中島先生とたまにボールを交わしたりしたことも思い出になっています。

最後になりますが、東北大学の国際交流についてです(スライド14)。まず、積極的な情報の発信が大事だと思います。理系はよく知られていると思います。韓国でも東北大学の理系を出て教員や、研究職に就いている方は多いですが、文系を出て大学で働いている人はあまり聞きません。そういう意味ではプロジェクトの内容も大事ですが、文系でもこのような研究をしているのだということを外に向けて発信することも大事だと思います、特に大学院に進むということは、研究者を目指していると思いますので、それを発信するのもよいのではないかと思います。

また、長期プログラムなので、やはり言葉の問題があります。来て、すぐに授業を受けて分かるということはなかなか難しいと思いますので、そういう意味で長期プログラムを考えて、交流を考えた方がいいのではないかと思います。

それから、受け入れ態勢の整備で、英語の授業はある意味で仕方がないと思います。英語で

進めないと、言葉だけで半年や1年が過ぎてしまうからです。ただし、最近韓国でも大きな問題になっていますが、韓国で大学の教員を採用する際に、ほぼすべての大学が外国語能力審査をします。つまり、公開授業をしますが、それは英語でなければなりません。例えば、日本人の後輩もそうですが、新規の教員については、毎年英語で授業を何科目かしなければならぬということ、大学が教員に対して義務付けます。英語圏へ留学した人には特に問題ないかもしれませんが、ほかの国に留学した人にとっては大きな問題です。国内で勉強した人もそうです。そのような現状です。一方では、講義の内容を、学生が分からないということがあります。それは、教員は大体大人になってから留学するので、発音が正確でないことと、留学中は一方的に授業を受ける立場で、教えた経験がないことが原因となります。アメリカに留学したのでいきなり英語で授業をなささいということになったときに、かなり困ります。先ほど申し上げたように、大学が必修として国際化を進めているので、そういう面でも大きな問題になっています。

一つお願いしたいのは、卒業生とのつながりです。東北大学を卒業して各国で研究職に就いている方とのつながりで、共同研究や、例えば留学が終わりではなく、この経験を活かして次の仕事ということもあります。例えば複数の学位を取って、その内容をよく分かっている方が周りにたくさんいれば評価してもらえますし、留学生がそういう研究に参加することによって、それに乗るような形で次のステップの研究、仕事を見つけることも容易になるのではないかと思います。それも考えてもらえないかと思います。

最後になりますが、国際レベルでの学者、研修者同士の共同研究です。卒業生のメリットは、完璧ではありませんがある程度日本語ができるということですお互いに堪能ではない英語で話すより、卒業した留学生の場合は日本でも数年間勉強しているし、向こうの大学で仕事をしているのであれば、言葉の問題も、研究としても、共通課題を見つけるにも容易な点があるのではないかと思います。そういうことも考えていただければと思います。

それでは、私の発表を終わりたいと思います。ありがとうございます。

清水： ありがとうございます。最後に具体的な提案までいただきまして、ありがとうございました。若干、質疑をしたいと思います。いかがでしょうか。

かなり積極的に、大学として学生を海外に送り出そうとしている様子が分かりました。そのために大学から資金的な援助がかなり出ていますが、学生の派遣の実績などを見ると実にうらやましいという感じがします。こうして学生にお金を付けてやるというのは、大学の経営にとってはどうなのでしょう。

姜永培： そうですね。詳しいことはよく分かりませんが、私も韓国に戻って、丸一年大学で働いて、大学が外部評価ということをととても気にしていることがわかりました。学生に対する奨学金の割合も評価の基準になっていますので、大学側が出さざるを得ない状況もあります。もう一つ、皆さんもご存じかと思いますが、現時点で、韓国の大学進学率は8割を超えていま

す。高卒者の8割以上が大学に行っているのです。どちらかというと首都圏は大学側もそうですが、受験生も選べるようになってきました。そうなったときに、大学も積極的にいろいろなことをやっていかなければなりません。例えば、奨学金を出したり、いろいろな大学とも提携を結んだりして、入学しましたら行けますよということを発信しなければいけない状況でもありません。そのため、大学としても大変かもしれませんが、奨学金を出さざるを得ない事情もあるかと思っています。それで教育部からの評価を受けています。

もう一つ韓国で最近話題になっているのは、授業料の半額免除です。一方で、野党では無料ともいっていますが、なるべく学生の負担を少なくすることが教育方針や政策の流れになっているので、大学としても積極的に学生に対する補助などを行っている現状です。

本郷： ありがとうございます。韓国の大学の事情はよく分からないところがありますが、新聞の記事などでは、大学の序列化と数を減らしていくという過当競争の時代に入って、日本と同じように国立大学の一部法人化が始まるので、大変な状況かなと思います。一つは大学の国際化で、学生が外に出ていくことが多いということを伺いました。逆に外に出ていく、特に大学院で海外に出ていくことによって、韓国国内の大学、とりわけ地方の大学の空洞化も起こりつつあるのではないかともしられていて、韓国全体としての政策の国際化と、大学運営としての国際化が一致する部分と矛盾する部分と両方抱えているのではないかともしられているようです。その辺も含めて、今後、韓国の大学の国際化はどのような方向に進んでいきそうなのかということについて、大きな質問ですが、教えていただければと思います。

姜永培： ありがとうございます。一つ目は、大学の国際化で、例えばメジャー級の大学、特に大学院クラスだとやはり研究者を目指していて、彼らは学位を取って地方の大学へ教員として流れていきます。地方の大学は研究者を養成するより、学部を出て就職することが求められています。地方の大学の学生が就職に、有利になるため海外へ留学するか、あるいはインターンシップに参加した経験が大事になります。例えば英語ができて、海外でも勉強したということで、研究者としてはなかなか、先ほど先生がおっしゃったように、地方では序列化がかなり厳しく固着されているので、地方の大学を出た場合デメリットが大きいのです。というわけで地方大学の学部が卒業すると大学院はソウルや海外を選ぶことになり、地方大学の空洞化が生じています。日本の大学で、大学院レベルの国際化がなかなか厳しいというのはよく分かります。主に学部生がメインになって、「国際化＝就職」という形をとっています。

今後の政策の流れとして考えられるのは、現時点からそんなに変わらないと思いますが、大学の数の削減だと思います。減らすといっても、実際になくなったのは一つか二つしかありません。韓国には今、4年制大学が160ほどあります。教育部が進めている政策の一つは、外部評価を厳しくしています。評価には主に、就職率と学生の定員の確保を取り上げています。国際化も評価されますが、全体的な割合として、パーセンテージはそれほど高くありません。そういう意味では、学生に対する補助として、学部レベルの学生に国際プログラムをよりたくさ

ん提供する流れになると思います。

他に、韓国の大学では英語で行う授業が受けられるような形を取る大学がますます増えると思います。そういう面では、教員にとってはかなり負担が大きくなるのではないかと思います。これはソウル大学の先生からもお話を聞いています。悩みの中身についてはソウルにあるメジャー級の大学と地方にある大学では、若干異なっているのではないかと思います。

清水： ありがとうございます。それでは、若干時間も過ぎていきますので、姜先生どうもありがとうございます。

## 講演 4

### 中国華東師範大学における国際化の歩み —実質的な交流を目指して—

華東師範大学 陳 曦

私は 1995 年から 2006 年まで東北大学教育学部で、学士、修士、博士の学位を取りました。指導教官は荒井克弘先生です。教育学研究科のパンフレットを見たら、東北大学から移られていましたが、社会貢献のところにまだ写っているのを発見しました。教員・指導者講座で講師になっていたのを見ました。

私は 2006 年に学位を取って、中国上海にある華東師範大学高等教育研究所に就職して、現在に至っております。師範大学と聞くと、先生方は教育大学を想像されるかもしれませんが、華東師範大学の師範学生は 3 割に過ぎません。確かに教員養成の機能も果たしていますが、それは一つの特色となっています。

まず、大学を少し紹介させていただきたいと思います（スライド 1 ページ）。華東師範大学は 1951 年に、大夏大学や光華大学、復旦大学の教育学部、それから同済大学の植物学部など、さまざまな大学や学部が合体して、創立しました。大学が発展して、1959 年に中国の 16 校の重点大学の一つになりました。1986 年には、中国で最初に大学院を持つ 33 の大学の一つになりました。先ほどの李先生の紹介でもありましたが、「211 プロジェクト」と「985 プロジェクト」について、「211 プロジェクト」は重点大学で、「985 プロジェクト」は重点の中の重点だと理解すれば、簡単だと思います。

現在、大学は全部を一流にできないので、若干の一流学科を有して、他学科と協調して発展させ、中国の教員教育の発展をリードし、世界に知られる高水準の研究型大学になることを目指しています。ですから、特色としては研究型で、認知神経学科などがありますが、医学以外のほとんどの専攻を持っているので、教員教育を特色にした総合型大学です

大学は現在、二つのキャンパスを持っています。郊外の新しいキャンパスにほとんど移りましたが、東北大学の先生方がいらっしゃったことがあるのは、普陀キャンパスです。これは（スライド 3 ページ）二つのキャンパスの地図です。合わせて 200ha あります。新しいキャンパスは古いキャンパスの 2 倍ぐらいの大きさです。

これは（スライド 4 ページ）新しいキャンパスの写真です。先生方は多分、まだいらっしゃったことがないと思います。古いキャンパスから 35km 離れています。私は毎週水曜日、本当は今日の夕方、そこに行って学部の授業をしなければなりません。車で最低 40 分はかかります。

2010 年のデータを見ると、教職員は 3889 名、そのうち教授が 544 名、准教授は 738 名います。その中の 39 人は外国国籍の方です。

大学生は全日制というか、フルタイムの大学院生は 9106 人となっていました、今は 1 万人を超えています。学部生が 1 万 8000 人程度、留学生も 2010 年のデータでは 4344 人で、そのうち学位を取るための学生が 865 名でした。

大学の理念は、初代の学長が掲げたもので、三つの C としています。もともとは中国語ですが、1951 年につくられた大学なので、これは去年の 60 周年のときの旗です（スライド 6）一つは知恵の創造と獲得（Creativity）、もう一つは品性の陶冶（Character）、また、民族と社会の発展（Community）です。

大学の発展戦略は三つの I です。英語を見れば分かると思いますが、本日のテーマである国際化（Internationalization）はその一つです。先生方のお手元にある PPT とこれとは少し違うところがあるかもしれませんが、ご了承ください（スライド 7）。

では、本学の国際化について話したいと思います。これまで大学は、主に教職員の交流と学生の交流、共同学位プログラム、共同研究、学術交流、資料情報交流といったことを通して国際化を進めてきました。その成果として、現在世界の 150 以上の有名大学や研究所との国際交流協定を結んでいます。また、150 名余りの外国人の先生が名誉教授、あるいは顧問教授になっています。毎年 800 名以上の学者が研究や講演などのために大学を訪れます。ほか、毎年 30 回以上の国際会議を主催しています。30 回というのは、大学から補助をもらえるのがその程度で、それ以上に資金があれば、もっとたくさん国際会議を主催します。

スライド 10 はアジアなど、いろいろな国からの留学生の数を示しています。150 以上の大学と国際交流協定が結ばれていますが、例えば UCLA とは、F が教員の交流で、S は学生の交流、L は国際会議や国際セミナーなどの学術交流です。ペンシルベニア大学とは共同学位プログラムを進めています。ほかにもヨーロッパではイギリス、フランス、ドイツ、またオーストラリアとも幾つかの大学と共同学位などを行っています。アジアではたくさんの国と交流協定を結んでいます。お昼のときにも話しましたが、東北大学とは IFARS がありますが D だけがありません。今回のプロジェクトが D になるので、これからここに D が加われば良いと思っています。

これ（スライド 11）は協定を結んだ大学との記念のものです。

こちら（スライド 12,13）は国際交流の際の写真です。いろいろな大学の学生が来てくれます。

コロンビア大学ともいろいろな交流をしています（スライド 14）。

マンチェスター大学、イェール大学など、華東師範大学の名前が入っている服を配って、いろいろな交流をしています（スライド 15,16）。

国際文化祭りもやっています（スライド 17）。

これは華東師範大学における留学生数の推移です。2008 年以前、留学生の多くは言語を勉強するために留学していましたが、近年はそれ以外の学生がどんどん増えています。逆に語学研修で留学してくる学生は、むしろ減少する傾向にあります。大陸別で留学生の数を短期と長期で見ると、どちらも増加する傾向を示しています。アジアからの留学生が最も多く、次いでア

アメリカ大陸、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニアの順となります。アメリカといっても、南の方とは全然交流がありません。ほとんど北のアメリカとカナダですが、9割以上はアメリカからです。

国別で短期留学生をたくさん送ってきているのはアメリカです。アメリカは正規課程以外の学生が多いです。正規課程で一番多く来ているのは韓国で、その次が日本です。2001年のデータを見ると、アメリカからの留学生が1240人ほどで最も多く、留学生全体の4分の1を占めています。次いで、韓国711名、日本578名、フランス410名の順となります。

学位の取得を目指す学生は、本学は上海の大学の中で2位で、全国でも6位となっています。国際交流は留学生を受け入れるだけでなく、自分の大学の学生を海外に送ることもその一つです。これは学部と大学院の両レベルで進められています。学部レベルでは、交換や交流を通して、国際視野を持つ学生の競争力を高めることを目的としています。これからの目標は1割などではなく、25%以上の学生が交流経歴を持つということです。大学院レベルでは、国家留学基金委員会の計画を利用して、現在38の海外大学が本学の博士課程の学生を受け入れています。短期留学はもっと頻繁に行われています。

また、本学では若い教員を海外研修に行かせることも盛んに行われています。この3年間で、教員の海外研修者数が145人に上りました。去年からは、1年以上の海外経験がなければ、あるいは海外でSSCI (Social Science Citation Index) の論文を發表していなければ、教授にはなれないとされています。海外に行かせることによって、教員の学術視野を広げ、海外の大学や教員と長期的な共同研究も行われ、大学への影響力を高めました。

午前中にもありましたが、アメリカで孔子学院をつくり、中国文化を海外に広げる役割を果たしています (スライド21)。

国際化の進め方としては、今日は9人の先生が自分の大学についていろいろ紹介されますが、多分似たようなことをしています。本学の特色といえば、一つはフランスのエコール・ノルマル・シュペリールとの共同学位プログラムです。もう一つは、上海市およびアメリカのニューヨーク大学と連携して、上海ニューヨーク大学をつくったことです。

フランスとの共同学位プログラムは、前回のセミナーで話したことがあるので、今回は簡単に紹介させていただきます。このプログラムは2002年から実施されて、ちょうど10年たちました。毎年、30~40名の学生が修士プログラムの学生として入学して、過去8年で152名が修士学位を取得しました。そのうちの一部の学生が博士プログラムに進学して、フランスで博士課程に進みます。これまで85名の学生がフランスに行って勉強しましたが、そのうち34名が博士学位を取得しました。修士学位は華東師範大学のみが授与しますが、博士学位はフランスに行って勉強するので、中国とフランスの両方で学位を出します。つまり、このプログラムは大学院に入った段階で、後期課程はフランスで勉強するのだという覚悟を学生にしてもらい、修士課程はその準備段階でもあります。フランスとはこのようないろいろな分野で共同学位を出しています。

昨年、先生方がお聞きになったかどうか分かりませんが、中国では結構話題になった上海ニ



ニューヨーク大学に関してお話ししたいと思います。連携先のニューヨーク大学に関しては、皆さんご存じかもしれませんが、1831年に創立された研究型私立大学です。在学者数は4万人近くいます。AAUのメンバーの一つで、2010年の大学ランキングでは、総合では32位、金融学部、国際ビジネス、MBAでは2位になっています。法学院が5位、応用数学は大学院レベルで1位となっています。大学の32名の教員がノーベル賞を獲得しています。かなりいい大学といえます。

華東師範大学とは2002年から交流を始め、博士課程のサマースクールを数回開催しました。やはり最初はサマースクールからでした。2006年にニューヨーク大学の中国キャンパスの設立によって、華東師範大学で国際教育センターが設立され、国際教育パークという考え方が生まれました。2008年6月に、ニューヨーク大学から共同弃学の意向書を受け、10月から翌年9月にわたって、上海にいらっしゃったことがある先生はお分かりだと思いますが、浦東空港があつて、浦東新区のトップが数回協議をして、共同弃学の枠組みが出来上がりました。新しいキャンパスは浦東にあるので、そのトップなどいろいろな話してそういう枠組みをつくりました。上海市の副市長がリーダーとなって準備委員会が設立されました。2010年4月に上海ニューヨーク大学(NYU-Shanghai)をつくる協議書に、華東師範大学とニューヨーク大学がサインをして、その年の5月に、教育部の専門家が大学を考察しました。そして、2011年(昨年)1月に教育部の許可を得ました。

大学は上海で、土地の価格が一番高い陸家嘴に立地しています。陸家嘴といっても分からないと思いますが、上海を紹介するとき、テレビタワーがよく出てきます。そのテレビタワーの周りです。この間、ここにできたマンションは1平米26万元です。土地のすごく高いところで、上海市政府も浦東新区の政府も、その土地をくれたので、すごく力を入れていると思います。

これは中国で初めての中米共同建設の大学です。独立法人格を持っています。全世界から3000人程度の学生を募集する予定です。

この大学は、中国の高等教育システムの中にあつて、国際水準を目指す大学です。また、独立法人資格を持つ研究型大学で、非営利的な学術機構です。大学は学部教育を中心に、大学院教育、専門職学位教育も行います。母体とする二つの大学の特色と長所を活かした専攻を開く予定です。先ほど大学ランキングを言いましたが、ニューヨーク大学のいいところと、本学の設けた学科と一緒に専攻を開く予定です。学位授与権を持っています。ニューヨーク大学学位とNYU-Shanghai大学学位を授与します。ただ、初期の大学院生にはニューヨーク大学と華東師範大学のダブルディグリーを授与します。

この大学は一流の質を確保することを前提に、段階的に募集拡大します。最初は3000人程度とします。学部生には、中国大陸の学生、ほかの国からの留学生、およびニューヨーク大学からの交換大学生が含まれます。中国人学生と外国人学生の比率は、大体1:1とします。学生全員にニューヨーク大学あるいは、ニューヨーク大学はほかにも海外キャンパスがあるので、ほかのキャンパスも利用可能で、最大3学期学習する機会を与えます。

先ほども言いましたが、両大学の長所を活かした専攻を設定するので、最初はビジネスと金融、経済、歴史、中国研究、生物、科学、物理、数学、神経科学、エンジニアなどの専攻を設置する予定です。学生には、批判的な学習および開放的な討論を展開することを奨励し、学術自由を尊重します。ST比をできるだけ低く、つまり教員を多くして、学生を少なくし、学生により多くの授業外活動や実践の機会を与えます。授業言語は基本的に英語とします。グローバル人材育成が叫ばれている中で、専門知識はもちろん、そのほかにも言語力や異文化を理解する能力、コミュニケーション能力など、じっくりとした国際交流を通して養成していかなければならないと思います。留学生の数だけでなく、いろいろな付加価値を生むことによって真の国際化につながると思います。

この大学の教員はニューヨーク大学の募集基準に基づき、全世界から公募します。一部はニューヨーク大学の教員で、あとはニューヨーク大学と上海ニューヨーク大学の両方に招聘された教員と、上海ニューヨーク大学と華東師範大学の双方に招聘された教員と華東師範大学の教員、また、国内外の一流の学者や客員教授を呼んで、最初から世界一流大学の基準で教員陣を整えることにしています。

管理はアメリカモデルに倣って、理事会は学校の最高権力機構で、中外（中国とアメリカ）それぞれ4人から成ります。理事長は中国側、副理事長はアメリカ側が担当します。学校の法人代表は学長で、それは中国側が委任します。副学長はアメリカ側が派遣し、学校および学術関係の仕事に責任を持ちます。

大学の運営経費は一部が政府からの投資で、学生一人当たりの経費や学校創設費、奨学金、さまざまな免除などがそこに含まれます。また、学生の学費も運営経費になります。華東師範大学の学生は、1年間5000元ですが、上海ニューヨーク大学は今、1年間10万元を予定しています。専門職学位大学院生と一部はトレーニングなどによる収入、また社会からの寄付や科学研究費などが運営経費になります。

1年10万元というと、誰が来るのかと思うかもしれませんが、中国では今、お金を持っている人はたくさん持っています。特に男の子は海外に簡単に行かせることができますが、女の子は大学段階で外に行かせるのはちょっとという人が、ここに多く来るのではないかと考えています。もちろんこの大学も賛美だけでなく、新しい大学が母体の大学にとって、あるいは母体の大学教員にとって、本当にいいのかどうかということは疑問視されています。もちろん、母体となる大学は新しい大学から刺激を受けますが、教員をどのように公募するかという点で、優秀な教員が流れ出すのではないかと、それで母体大学の実力を弱めてしまうのではないかとという声も出ています。

まとまりのない話になりましたが、要するに、華東師範大学は、現在、協定を結んだ大学とさまざまな交流を通して、着実に国際化を展開しています。今回のAJP（アジア共同学位開発プロジェクト）に関してはまださまざまな支障がありますが、本学はとても重視しています。これからより具体的に展開できれば、きっと何かができると思っています。

以上です。

清水： ありがとうございます。最近の新しい動向を中心にご報告をいただきました。いかがでしょうか。

スライド 31 ですが、NYU-Shanghai の「専攻の設置及び授業方式」で書かれている能力観といえいいでしょうか、批判的な学習、開放的な討論、学術自由、それから授業外活動、実践の機会というのは、世界の高等教育改革の動向をにらみながら、世界レベルの人材を育成しようという方向を目指しているのか。質問を変えれば、既存の華東師範大学での人材育成の目標はどうなっているのかということです。

つまり、これは日本の問題でもありますが、どうしても今、東北大学などでも専門家の養成、専門的な研究者の養成に焦点が合わされていて、早い段階から、幅広く勉強するのではなく狭い範囲を極めていくというような形で人材育成が行われています。ところが、世界の大学もさまざまあるので分かりませんが、ただ、英語の文献などを見ていると、それこそジェネリックスキルやコアスキル、あるいは雇用可能性（エンプロイヤビリティ）というような言葉がたくさん出ていて、知識だけでなく実践的なスキル、あるいはものの考え方や価値観といったものを幅広く育成しなければならないといった議論が出てきています。ちなみにうちのプログラムでは、今日、本郷先生から報告がありましたが、KASP という新しい能力観念を打ち出そうとしています。NYU-Shanghai でも新しい能力観を目指していることがうかがえますが、本体の華東師範の方はどうなのかということです。

陳羲： 華東師範大学だけでなく、中国の大学は大学まで受け身だけになっているのが基本で、いくら創造的とか中国語で創新といいますがそういわれてもなかなかそれができません。つまり、先生が「こうだ」と言うと「そうなのか」というのが普通です。ですから、批判的な学習が必要です。華東師範大学も少しずつ変わってはいますが、学生は批判的な精神を持っているとはまだいえないと思います。

清水： 全く新しいタイプの大学教員教育ということですか。

陳羲： はい、そうです。

清水： ありがとうございます。いかがでしょうか。では、時間も過ぎていきますので、陳先生、どうもありがとうございました。

それでは次に、河北師範大学の董存梅先生です。最初にご紹介しましたが、董存梅先生は今年、客員教授ということで、2月から3月の終わりぐらいまで、東北大学で研究をなさっています。

## 講演 5

### 日中における共同学位開発の展望 —中国河北師範大学の状況に基づいて—

河北師範大学 董 存 梅

先ほど清水先生に紹介していただいたように、私は2月15日からこのプロジェクトの客員教授として研究を始め、まもなく2ヶ月半になります。大変お世話になっています。また、2日間国際シンポジウムに参加させていただき、ありがとうございます。

私の報告のテーマは、「日中における共同学位開発の展望」です。これは最初に、プロジェクトの事務局の方に聞かれたときに一応考えたテーマですが、具体的な内容を考えたとき、このテーマは広すぎると思ったので、その後、副題を付けました。副題は「中国河北師範大学の状況に基づいて」です。

まず、自己紹介をさせていただきます。私の現在の所属は中国・河北師範大学です。河北師範大学は中国河北省の省立大学です。大学の所在地は、中国の石家庄市です。日本で自己紹介したとき、河北師範大学、あるいは石家庄市は中国のどの辺に位置するのかとよく質問されました。この地図（スライド1）をご覧くださいになると、すぐお分かりになるかと思います。全体が中国河北省の地図で、赤丸の付いているところが石家庄です。赤い星が付いているところは北京です。石家庄市は北京より南にあり、電車で2～3時間の距離です。日本の方は、2時間から3時間かかると聞きますと、遠いと思われそうですが、中国は広いので、電車で2時間から3時間の距離というのはかなり近い感じです。

この上の写真（スライド1ページ）は、大学本部の正門の写真ですが、現在は新しいキャンパスに移転しました。まだ建設中です。

次に、私の研究内容についてお話しさせていただきます。ここに2つの研究テーマをあげています（スライド）。一つは、乳幼児・児童の自己制御に関する研究です。私の博士論文の題目は、「幼児の自己制御の発達に関する日中の比較文化的研究」です。今もそのテーマを続けて、子どもの自己制御の発達の变化について研究をしています。

もう一つのテーマは、子ども（気になる子ども）の社会性の発達の支援です。現在、中国の都市部の家庭の、ほとんどの子どもが一人っ子なので、子どもの自己制御の問題だけでなく、子どもの全般的な社会性の発達について、人々の関心が高まっています。それで、子どもの社会性を発達させるために、どのような支援が必要なのかということについても関心を持っています。

今回、日本に来る前に、中国の気になる子どもの調査も行いました。その結果から見ると、子どもの集団場面の行動や、落ち着きのなさが少し気になります。

次に、東北大学時代の留學生活についてお話しさせていただきます。私は2004年10月に東北

大学へ留学し、2005年4月から教育学研究科の博士後期課程に入り、本郷先生のご指導を受けました。東北大学を選んだ理由は、東北大学の情報を手に入れたからです。中国の国費留学生は、日本へ留学する前に、まず中国の留日予備学校で半年ぐらい日本語を勉強します。その半年の間で、留学先の日本の大学を決めなければいけません。日本の大学の情報がなかなか手に入らなかったため、とても困りました。留日予備学校に、留日案内用のハンドブックはあるけれども、日本の全部の大学の情報も、大学の最新の情報も入っていません。その時、友達から東北大学のホームページのアドレスをもらい、そこから本郷研究室の情報を入手することができました。本郷先生の研究テーマと自分が関心のある分野と近いと思ったので、その後、本郷先生に手紙を送りました。

そして、教育学研究科に入学してから、本郷先生の丁寧な指導のおかげで、4年間で博士論文を完成し、2009年3月に東北大学の博士学位を取得しました。

本郷研究室の雰囲気はいつも温かく、留学生の私も、徐々に心細さがなくなってきました。先生のご指導を受け、ほかの二人の院生とご協力して頂き、院生プロジェクト型共同研究「中国における養育者の子どもの将来と高校教育への期待に関する研究」に取り組むことができました。

この4年半の留学期間は私にとっていい勉強になりました。博士論文の執筆に当たり、幾つかの研究を行いました。その結果を日本の発達心理学会やSSBD（国際行動発達学会）に発表しました。

そのうち乳幼児教育学研究に特化した論文が乳幼児教育学会2008年の第6回研究奨励賞を受賞しました。この写真（スライド7）は、受賞したときに撮ったものです。

東北大学時代の留学生生活は、生涯忘れられない経験になりました。先生たちのご指導や、先輩、後輩たちの助言に再びお礼を申し上げます。

また、4年半の留学生生活を通して、学術水準を高めたほか、日本文化に対する理解をより一層深めることができました。このことについては、写真の中のこの方（スライド8）にも感謝を申し上げます。この方は、留学生に日本語を教えるボランティアです。仙台国際センターからの紹介でこの方と最初会ったとき、「董さんはどのようなことを勉強したいのですか」と聞かれて、私は「日本の文化についてとても興味を持っているから、日本の文化についていろいろと教えていただければありがたい」と言ったら、その後、週2回で2年間教えてくれました。

2009年に私が卒業して中国に帰っても、この方とは連絡が絶えませんでした。今回も仙台に来て、この方と会っていろいろ話しました。その日は日本のおひなさまの日だったので、おひなさまについていろいろ話して楽しかったです。私が東北大学に在学していたとき、うちの子どものも何回か仙台に遊びに来たことがあり、仙台市国際交流センターが開催した日本文化交流会に参加しました。そこで日本のいろいろな文化を体験しました。その印象は今も子どもたちの記憶に深く残っています。うちの子どものは絵を描くことが大好きなので、白いこけしに一生懸命描いている様子です（スライド8）。このこけしは今も自宅に飾ってあります。

次に、中国における国際的教育交流の現状について申し上げます。中国から海外へ留学する

人数について近年の推移を見ると、2005年以降、一貫して増加しています。また、前年に比べて、2008年から4年連続で20ポイント前後上昇しました。留学需要の急成長以降、外国から中国に留学する人数も徐々に増えています。2003年はSARSの影響で一時、減少しましたが、その後はずっと上昇しています。

次は、中国における国際的共同教育の現状について申し上げます。中国では国際的教育交流活動の進展に伴い、国際的共同教育も発展してきました。また、2003年3月1日に中華人民共和国中外共同教育条例が公布されてから、中国教育部は国際的共同学位を行った大学等プロジェクトを審査し続けています。

現在、国際的共同教育を実施している大学は40校で、プロジェクトの数は577です。また、国際的共同教育の資格を持つ大学の所属地域から見れば、多くの国際的共同教育プロジェクトは、北京や上海などの大都市と、江蘇、西湖など沿海地区の大学で開発されています。中国河北省においては、このような国際的共同教育の資格を持つ大学は一つしかありません。また、提携している大学の地域は、ほとんどがアメリカやオーストラリア、カナダなどの欧米諸国です。

次に、中国河北師範大学の国際的教育交流の現状についてお話しさせていただきます。中国河北師範大学は現在、日本、韓国、アメリカ、ロシアなど、30カ所余りの大学と協定を締結しています。その中で、日本の大分大学、大阪教育大学、島根大学の三つの大学と学術交流や学生交流を行っています。現在、私たちの大学の在学留学生は300人を超えています。

次に、河北師範大学の教育学院はアメリカのドレーク大学と協定を締結しており、単位を承認する連合カリキュラムが開発されています。この連合カリキュラムは三つのステップにより構成されています。ステップ1は、中国の河北師範大学教育学院で科目を学習し、それに合格したら9単位が取れます。ステップ2は、アメリカのドレーク大学では24単位が取得できます。ステップ3は、中国に戻って、中国の病院や子どもセンターのようなところで、障害児支援などの実習を行って、それに合格すれば3単位が取れます。全部の単位を取れば、最後に修士学位が取れます。

次に、中国における近年の学位教育の動向についてお話しさせていただきます。現在、中国の修士教育には、学術型学位と専門学位の二つの種類があります。学術型学位教育は、主に研究型人材を育成するのに対して、近年の専門学位教育は応用型の人材育成を目標とします。専門学位は最初、1991年に設置されました。そして1991～2008年の間に、専門学位教育は主に社会人から選抜し、定時制の課程を実施しています。2009年から専門学位教育は、社会人と一般学生からも選抜し、全日制の課程を実施しています。

また、中国教育部は2010年から学術型学位課程の定員を削減し、専門学位課程の定員を増やしてきました。それから中国教育部は、2015年には、学術型学位課程の人数と専門学位課程の人数が半分ずつ占めるように計画しています。本学では今、応用心理学専攻と教育学専攻というような専門学位課程を行っています。

次は、日中における共同学位開発についてお話をさせていただきます。近年、中国において

は、海外に留学する人数と中国に留学する学生数が共に増えてきました。しかし、海外への留学先は大部分が欧米諸国です。その一方、留学生の中心地域の上位3位は、アメリカ、日本と韓国です。現在、中国の学生が海外に留学する動向と海外から中国へ留学する学生との間にはアンバランスが生じています。その原因の一つは情報不足だと思います。そして、情報ネットワークづくりが必要だと思います。

まず、情報手がかりが必要だと思います。例えば、海外連携大学のホームページに、東北大学大学院教育学研究科のホームページにリンクを設定し、海外の学生が接続しやすくします。そして、留学に関する情報発信も必要だと思います。例えば留学希望者の募集、選考などについての留学情報、または入学してからの流れの情報の充実も必要だと思います。もう一つ、地域の情報も重要だと思います。日本は地震や津波などの自然災害の多い国だと思います。とりわけ去年の東日本大震災の影響を受け、地震や放射能を恐れて、日本に留学しようとしなくても少なくありません。従って、地域についての透明な情報を提供する必要があると思います。

今回仙台に来てから、以前、一緒に東北大学で勉強した友達から連絡があり、「仙台はどうか」と聞かれました。私が町の中はほとんど変わらないと答えると、「そうですか。めちゃくちゃになったと思っていた」と言っていました。日本で生活した経験が全然ない学生にとっては、怖いイメージがあったと思います。地域の情報をどのように提供するかも課題だと思います。

次に、日中における共同学位の優位性を発揮し、欠点を改善するということです。それはアジア・欧米間の共同学位に比べて、日中における共同学位は特有の優位性を持っていると思います。その一つは、共通課題です。とりわけ専門においては、日中の共通課題が多いと思います。そのため、説明会やセミナーによって、学生にこのような優位性を理解してもらうための取り組みも重要だと思います。

もちろん、アジア・欧米間の共同学位に比べ、日中における共同学位の開発においては課題もあります。その一つは言語の問題だと思います。先ほど何人かの先生もおっしゃいましたが、グローバル化が進むにつれて、中国でも英語力を重視しています。特に就職をするとき、日本語だけでは不十分で、英語も必要になります。そのため日中における共同学位課程には、一部の科目は英語で行うという改善策も求められると思います。

三つ目は、応用型人材育成を目標とする学習コースの設定です。中国では、日本のような研修制度はありません。日本の会社は採用してから研修させることが多いですが、中国の一般の会社では、就職してすぐに仕事ができるような応用型人材が求められています。このような社会のニーズに沿って、中国教育部では応用型人材育成を目標とする、専門学位教育を発達させる対応策を推進しています。そのため、中国の近年の学位教育の統計から見ると、応用型人材育成を目標とする学習コースが人気です。例えば東北大学教育学研究科でいうと、臨床心理コースや人間発達コースの発達障害学、教育設計評価のコースは多分、人気があるのだと思います。

最後に、支援システムの充実ももちろん必要だと思います。まず、日本と中国の収入基準の

差が大きいので、学費の免除や奨学金の拡大、アルバイト体制の充実が必要だと思います。また、中国の大学生は通常、大学の学生宿舎に入るため、自分で住まいを探すという経験が全然ないので、中国の留学生にとっては住まいの問題は大きいと思います。そのため、留学生のための宿舎の確保は、中国人留学生の受け入れる際の重要な基盤だと思います。

私の発表の内容は以上です。

清水： ありがとうございます。最後に具体的な提案をしていただきました。いかがでしょうか。

本郷： ありがとうございます。今、ここで日・中における共同学位の開発で、応用型人材育成を目標とする学習コースの設定というところが、スライド 16 ページに出てきました。午前中、私の基調講演の中で、共同学位を開発する場合に、例えば一つのモデルケースとして、1 年目は中国だったら中国で学んでもらって、2 年目に半年間ほど日本の東北大学に来てもらうというようなことが考えられます。そのときには、基礎的な学習というよりも、学校や幼稚園などのさまざまなフィールドを回って、そこを調査するなどの方がメリットとしてあるのではないかと言われました。中国の学生から見たときに、日本あるいは東北大学に来たときに、どのようなフィールドで勉強すると、中国にはないような学習や体験ができそうかということをお教えいただけますか。

董存梅： まず、中国の学生にとっては、コースの名前がすごく気になります。コース名を見れば、すぐに「このようなものは応用型のコースだ」と思われて、就職もできるのだろうと思います。そのためにコース名は留学生にとって大事だと思います。

例えば日本で多様な調査ができればいいと思います。そのような調査や活動が学生の成績の中に反映され、就職するときにこのような調査や活動をしたということで、「実際のことにしてもいろいろ勉強した人材ならばこちらも欲しい」と思われるからです。

本郷： ありがとうございます。こちらでは、例えば幼稚園や保育所、あるいは学校の見学などというような形のフィールドワークは可能だと思っています。また、例えば臨床心理学や人間発達などというところに書いてあることでは、中にはそういう関心がある学生がいるかと思いますが、東日本大震災で被害を受けた人たちへの支援をここでも行っていますので、そういう人たちへの支援に関するフィールドワークなども、例えば来ていただいた場合には体験ができます。そのようなことも考えているので、中国や韓国、台湾などではなかなかできないような経験を、こちらに来たときにできるようなプログラムができると、来ていただいてもメリットがあるかと思いました。

董存梅： あとは、日本の特別支援学校や特別支援学級の調査や活動があれば、一番いいと思



います。そのようなニーズが中国にも結構あります。

清水： どうもありがとうございました。

## 講演 6

### 台湾高等教育の国際化に関する政策と現状について

国立台東大学 梁 忠 銘

皆さまこんにちは、梁忠銘と申します。1992年博士コースに編入して、1994年から清水先生と一緒に学校管理講座に5、6年間所属し、それから1999年に帰国してもう13年経ちました。

今日は大体二つに分けてお話したいと思います。まず、台湾の高等教育の国際化に関して少し皆さんに紹介して、それから、台東大学の国際化しについて事例を申し上げたいと思います。

台湾の大学は国際化が進んでいるのではないかと思います。台東大学は田舎の大学ですが、87%ぐらいの先生が博士号を持っています。その内、半分以上が海外の博士号です。教授たちが海外のいわゆる国際的な知識を持っていることは、台湾の高度教育の一つの特徴ではないかと思っています。

それから、2000年ちょうどに私が帰国してから、台湾の国際化はどんどん進んでいます。やはりインターネットの社会でグローバル世界、国際化が叫ばれているので、台湾でもそうしないといけない、特に台湾のいろいろな産業の関係でかなりの海外の企業が入っているという意味でも、次の世代は国際化しなければいけないという意識がありました。

台湾では国際化を進めるにあたって二つの方法を考えています。台湾の学生の国際化・学校の国際化と、台湾の人が海外へ行くという国際化の両面です。台湾の多元文化を考えながら、また大学教育、中学校、小学校を含めて国際的な視野を広げていくことをまず考えなければなりません。また、国際的競争力を考えて、世界のランキングなど、いろいろ学術的にも考えなければなりません。それで、それぞれの国の優秀な学生、青年を台湾に招いて、台湾の文化あるいは国を分かってほしいということです。世界で通用するような人材を養成していく面で、台湾も国際化の環境づくりをし始めなければいけないという考えもあります。

それから、国際化、グローバル世界の中での教育です。例えば、先ほどの中国の華東師範大学ではニューヨークの大学と一緒に高等教育を組み立てているという報告がありましたように、海外の大学の、いろいろな教育産業に台湾はどう対応していくのか、やはり教育産業をまず考えなければなりません。それからの国家戦略的に考えなければいけません。

また、いかに国際社会に貢献していくかを考えなければいけません。先進国、あるいは発展途上国としての役割を果たさないといけないということもあります。

もう一つ、台湾の主体性、影響力をこれからは戦略的、戦術的に考えないといけないところもあります。まず台湾になぜ国際化が必要なのかをいろいろ提起して、国からいろいろ考え始めているのだと思います。

先ほども申しましたように、2001年に「大学教育政策白皮書」、いわゆる台湾の教育政策が

発表されました。ここには、大学教育の国際化がかなり付則として記されています。これは初めて国として、高等教育、学校教育の国際化をもっとまじめにやらなければいけないということで、それが始まりではないかと思えます。

2003年、行政院は、教育改革の中で部局を超えたもっと広い範囲で高等教育の国際化をいろいろ考案しないといけないと発表しました。台湾の大学の留学生の拡大を考え、また、国の重要な政策としていろいろなことを視野に入れないといけないと考えました。

次の闕先生の報告でも補足されると思いますが、2004年から3期12年の目標をはっきり出しています。今年は第2期の最後の1年です。一応、順調に進んでいるということです。

この目標は2016年に国際学生（華僑を含む）、要するに海外からの留学生を4万人に増やす目標を掲げています。さらに、ほぼ1年に3000人、留学生の数を増やしていく計画をしているのです。

政策がそろそろ第3期に入ります。第1期の2004～2008年にはまず、基本・基礎の体制を整備していくということで、国際留学生がどのように勉学するか、あるいは生活の管理をどう整えていくのか、外国の留学生市場にどのような政策を立てるのかなどを、まず調査しました。

今年は第2期の最後の1年です。第2期は、どうやって穏健的に成長していくかということです。国際学生の量ではなくて、質を考えなければいけません。ただ高等教育だけでなく、小・中・高等学校まで一体的に考えないといけません。これも日本と連動して、最近、高等学校と中学校はかなり国際化も進んでいるのではないかと思えます。

第3期は来年から2016年までです。これは成熟期だと考えています。台湾の留学の環境を世界的に広め、積極的にいろいろな拠点を作っていく時期だと考えています。

国の推進組織としては、日本の文部科学省に当たる教育部の中に、国際業務の担当部局があります。各大学の高等教育のいわゆる共同のファンド、基金会を作った方が早いのではないかとこの考え方で、これから一緒に有名な大学、幾つかの大学の共通の高等教育国際化の協力ファンドを作っていこうとしております。

また、大学に国際教育を担当する機構を作っていこうということで、私どものような田舎の台東大学でも、2011年に国際事務局センターを作りました。もっと積極的に国際化を進めようと考えています。

そして、教育部、つまり国からの補助で、海外に大学院の台湾教育センターを作りました。大学の中には国際事務局センター、そして国としては海外の幾つかの拠点に、各地域の大学に任せて台湾教育センターを作ろうということです。東南アジアにも幾つか作りました。

具体的な政策として、国際課程、カリキュラムの設置も実際に行っています。例えば先ほど本郷先生がおっしゃいましたダブルディグリー（雙聯学位）も実施していますし、国際課程のコースもやっています。英語のコースもたくさんやっています。海外のコースに関しては、先ほどの共通の学位のこともいろいろ考えています。

ここにあるのは、海外教育センターの拠点および運営機構です（スライド7ページ）。ベトナムには重きをおいて二つの大学に設置しています。やはりすべての学校で一緒にやるの

ではなく、特定の国は特定の大学が責任を持ってやった方が効率的ではないかということで、政府では重点的にいくつかの大学を補助していくという方針です。例えばベトナムについては文藻外語学院と国立暨南国際大学が責任を持ち、タイは台湾師範大学が責任を持つということです。マレーシアは彰化師範大学、タイにある銘傳大学が韓国とモンゴルを責任持って台湾の教育センターを作っています。

国際化するためには、まず関係法規の整備をしないといけません。意外に台湾は国レベルの法規で制限しているものは少なかったです。例えば留学生の就学については入国管理局の関係であるのだと思います。それから、どうすれば留学生が台湾奨学金を得られるのか、また、どのように留学生向けの奨学金を作っていくのかということです。

そのほか、留学生に対しての政策では、むしろ各大学がかなり役割を担っています。例えば台東大学の場合は、留学生のほとんどが言語力や授業料などを心配することなく来られます。それは、まずほとんどの留学生に奨学金を与えて、一から中国語を教えようとしているからです。なぜなら優秀な人材を確保するのと、最初から言葉を求めることの両立は難しいと判断したからです。それで、東北大学もただ日本語学科などに絞って人材を取るのではなく、優秀な学生は言葉ができなくてもいいのではないかと思います。どんどん取らないと、優秀な学生はアメリカやイギリスなどに行くという話になるのです。台湾の場合、教育部の補助制度で、大学側が中国語の教育センターを作ります。台湾で有名な教育センターで、台湾師範大学などは歴史もあって学生もかなりいますが、それを小さい大学でも作ろうとすると、教育部からいろいろな補助金がもらえます。

また、例えば留学生 40 名がその大学で修学すると、教官が 1 名、教育部（国）からプラスされます。ベトナムなど東南アジアの国からの留学生をどんどん取って、大学教員の数も増やしていくという戦略的な考え方を持っている大学もあります。

それから、大学院レベルの留学生のために、企業の協力がなければなりません。台湾はコンピューター産業が非常に発達しているので、いわゆる理工学部が企業と連携して優秀な理工人材を確保するということです。特に東南アジアを中心にどんどん奨学金を出して、産業、企業に委託された特別コースを開設し、企業の要望に沿って人材を養成します。それで学費あるいは奨学金は企業から寄附してもらうということもやっています。特にこのようなコースがかなり成功しているわけではないと考えています。成功するかどうかはまだ疑問がありますが、数だけはとにかく幾分確保していると思います。

そのほか、海外の教育博覧会でいろいろと台湾の留学生制度をアピールしたり、留学生の援助システムを充実したり、中国語の学習施設を整えたりします。例えば私どもでも華語（中国語）センターを頑張って作りました。どこかの大学にも中国語の教師が必要でしたら派遣します。例えば大学で夏休み、あるいは冬休みに中国語コースで勉強したければ、無料で教師を提供します。講師を派遣する施設なども持っています。また、大学生の奨学金を地区で大学側が企業と連合して作っていくことを奨励しています。

留学生の現状ですが、2011 年、去年までかなり数が増えて、2004 年には 2000 人に達してい

なかったのに、2011年には1万人くらいの数になり、ますます増えています（スライド11）。しかし、これは数だけです。今まで台湾の留学生政策、国際化の中で量的成果は出ていますが、私どもでも質的にはかなり問題があるのではないかと今、議論を始めています。例えば中国語を勉強しに来る学生はかなり増えています。もちろん台湾では、学士と修士と博士の学位取得をこれから中心にしようとしている考え方もありますが、これ（スライド13）を見れば分かるように、台湾で博士を取っている留学生が結構いるのではないかと思います。特に華僑がかなりいます。但し、今2012年の詳しい資料がまだそろっていないため、その統計表は1993年から1996年のデータです。

留学生の国籍は、あまり変わりはありません（スライド14）。ベトナムが一番多いのです。ベトナムに進出する企業はかなり増えて、企業と連携して留学生が台湾に入っているからです。台東大学でも今ベトナムの学生は20名近くいるのではないかと思います。中心となっています。あとはインドネシア、マレーシア、そして日本も台湾にいる留学生では4位を占めています。

留学生の専攻を見てみると、やはり科学技術が一番多いです（スライド15ページ）。台湾は理工系、特にコンピューター産業がかなり強い方なのです。これを見れば分かります。また、ビジネス専攻もかなりの人が勉強しています。

この表（スライド16）は、主な国からの留学生の人数です。ベトナムが一番多いです。次はマレーシアで、日本からも今までに大体400名くらい台湾に留学しています。

次は、国際化の中の問題点です。留学生は、台湾政府の奨学金の大体4分の1くらいを受けています。言葉を勉強しに来る留学生への奨学金は意外に少ないのです。台湾の学費は安いし、生活費もそんなに高くなく、勉強しやすい環境です。

留学生で学位を取得するために台湾に来ている学生は大幅に上昇しています。台湾では特に学士が取りやすく、修士もそんなに取りにくいので、人数も成長しているのではないかと思います。

かなりの留学生の目的は、やはり博士を取りたいということです。台湾では博士コースを設けている大学もかなりあります。田舎の大学では台湾で唯一、私どもの大学にも博士コースがあります。申さん（現東北大学教育学研究科に在学中）も私どもの博士コースに入ったことがあり、今のところ大学に1名いて、かなり優秀な方です。申さんだけが優秀なのではなく、博士コースは全員優秀です。もちろんここにおられる申さんも優秀な学生です。

次は効果ですが、今のところ量的には達成しています。関係部会の統合は、まだ整備しないといけないところがあります。特に奨学金はこれから大幅に増やさないとはいけません。外国の留学生がもっと留学しやすい環境を作らないといけないということです。それで、もっと留学生向けの奨学金の補充をします。先ほど申しあげましたように、台東大学側は、どこの国からもほぼ無料で受け入れています。そして環境については、例えば中国語ができない人をどうすればいいか。基本的にまずは中国語コースに入れて、半年ぐらい基本・基礎を勉強させてから単位をどんどん取らせていき、学士であれば何とか4年間で、修士であれば2年間で取らせる

ように整備しています。

課題ですが先ほども申し上げましたが、数の目標は一応達成していますが、質保証の面ではまだ議論が必要かと思えます

台東大学（当時の台東師範）の交流モデル、あるいは契約の内容等は、1999年の当時の考え方を今でも使っているのです。人材がやはり足りないのは、一番問題ではないかと思えます。

また、各大学の国際学生に関する政策が統一されていないこともあるので、意外に留学生の中で動きやすいということもあります。

政府の方策としては、補助制度の整備が求められています。1980年代、私が日本で留学生だった頃を振りかえてみますと留学生受け入れ体制において、恐らく台湾は、日本より20年ぐらい遅れているのではないかと考えています。ただ、方法が違います。

実績に対する評価の奨励制度を確立するという事です。今、全くめっちゃくちゃで、統一されていません。これは国としてしっかりした制度を持つことを考えないといけないのです。

2005～2008年に、何かしないとイケないということで、国際化教育重点が出されました。今でも大体このくらいの要点があります（スライド22）。

先ほど申し上げましたように、全てを英語で行う教育を奨励しないとイケないということです。ヨーロッパや東南アジアではなく、台湾でも英語で授業をしないとイケないということです。これは意外と台湾ではやりやすいです。台湾は留学生の数が多いため、これは意外に早くできました。

そして、外国の大学との学術交流を強化することです。これはわれわれも精力的にやっているので、問題ないと思えます。ダブルディグリーの環境整備についてはのちほどご紹介しますが、台東大学と仙台大学が3年前から学部レベルでダブルディグリーを取り組んでいます。要するに仙台大学で一つ学士の学位を取得し、また、台東大学でも取得するというものですが、先々週あたり、2名の学生がダブルディグリーを取得することができました。

何よりも、やはり一流大学に対する競争力をどのように高めていくのかなど、考えないとイケないということです。それから、奨学金の増加です。

こちらは、台湾留学に関する広報の方法です（スライド23）。意外に、台湾への留学情報は、ほとんど海外に知らされていません。これを考えないとイケません。先ほども申し上げましたように、高等教育の国際協力ファンドを作っていないとイケません。資金をどう募集するか、また宣伝方法や、いわゆる国際教育博覧会の企画、参加がもっと効率的にできるようにする、台湾の国際教育に関するホームページをもっと分かりやすく作っていないとイケない、また、諸制度の統合もいろいろ問題があります。

国際学生の管理が一番問題だと思います。私ども留学生の管理に頭を悩ませています。例えば精神的病気があったら、どうすればいいのか。今の制度ではどうにもならないのです。外国学生の相談窓口の設置や、関連するデータの整理・追跡など、いろいろ考えないとイケません。

国際的な優秀な青年がもっと簡単に台湾で研修できる、あるいは勉強できるような制度を考えなければイケません。特に企業の協力も必要になります。それは台湾教育センターがそれぞ

れ考えないといけません。それぞれの大学が運営するだけで、統一の同じ制度にはなっていないのです。それから、学生の国際経験と視野を広げることです。どのようにすれば、もっと台湾の青年と海外の青年が行ったり来たりできるかということです。

そして、外国学生の授業料をどうすればいいのか。今は各大学で決められていて、台東大学では先ほど申し上げたように、ほとんど授業料は免除されています。

台東大学をあらためて紹介しますが、台湾の東の唯一の大学です。元は小学校教師を養成する大学でした。当時は教師を養成し、卒業すると教師になれるということで、2000年まではレベルが高かったのです。最近は何のすごい就職難でレベルがぐっと下がりました。それで今新しい学部を作りました。いわゆる文化、教育とメディアの学部などを作りました。教育学部専攻から、理系と文系に分化して、21の専攻になっています。

台東大学の国際化の趣旨に沿って、2012年3月まで、8カ国と学術交流が締結され、16の海外の大学と交流しています。2000年以降は中国の大学とも積極的に進めています。

先ほども申し上げましたように、私どもの大学でもアメリカ、日本などの大学と積極的に契約を結んでいます。私どもの戦略としては、そんなに数多くの国は要らなく、提携した大学ときちんと交流を深めていく方法を進めています。トルコもとも交流を行っています。また、中華人民共和国の23校と交流をしています。北京師範大学は上海師範大学とも学術交流を結ぶ予定です。

台東大学の教育に関する奨励制度は、国と違った政策を取っています。行政担当は国際交流事務センターを作って、彼らに任せています。でも、実際には先生たちも行っています。例えば、国立台東大学生の出国、研修などは、申さんが詳しいと思います。法規的整備がされていなかったのが、もうかなり完全に整備されています。学生、先生たちすべての奨学金が今は充実しています。

最後になりますが、国や大学は何を一番考えないといけないか。やはり国際学生の数だけではなく、質を高めるということです。例えば台東大学と仙台大学の場合、言葉を学びに留学に行くと思います。仙台大学は中国語のコースがありません。だから、中国語を勉強したければ台湾に来るということで、私どもの大学が受け入れて、中国語を教育するということです。できるから来るのではなくて、できないからこそ来るということです。教育部の考え方に反して、できないからこそ、いい人材を確保できる、それから教育していく方が質のいい学生を得られるのではないかとということです。

それから、教育内容の方法の開発です。国際学生がもっといろいろな便宜を図って、卒業しやすいものを考えないといけません。また、国際教育に関する制度の何が合理的か、何が不合理かを考えないといけません。分かりやすく効率的な、留学しやすい環境を作っていくということです。最後に、やはり専門の担当の人が必要です。専門の担当がいないと、交流はすぐ駄目になってしまいます。企業との協力関係も必要です。これはいろいろ連携の体制を整えなければならないと思っています。

以上が私からの報告です。ありがとうございました。

清水： ありがとうございます。台湾の国家レベルの話と、台東大学の事例に即してお話をいただきました。実際に留学生の受け入れ、送り出しをされているので、話がとても具体的だったと思います。いかがでしょうか。

フロアーから質問がなければ私から質問ですが、結びののところの下から2番目に、国際学術交流に専門担当者の育成という、これは具体的にはどのようにしているのですか。あるいはまだできていないというか、これから作らないといけないという話なのですか。

梁忠銘： そうですね。でも、今のところ、シンポジウムみたいなことはかなりやっています。年に2回くらいやっていますでしょうか。特に高校と中学校あたりで、どこかの大学に教育部から委託して、集めて、これからどのように国際教育をやっていこうかというシンポジウムを年2回くらいやっています。校長と担当者を集めて講習しています。

上埜： 上埜ですが、梁先生、ありがとうございます。

経済的なことですが、われわれのところで、よく学生や教員などに紹介するときに、やはり奨学金が払えるとか、宿舎を用意するとか、いろいろなことが多分ネックになるのではないかと思います。先生のところは何か基金、ファンデーションということのようでしたが、それは安定的にあるものなのですか。それとも先生が努力されているのか、あるいは国がかなりバックアップして、割と永続的に行くものなのか、それを教えていただければと思います。

梁忠銘： ありがとうございます。台東大学の場合は、いろいろと教育・企業間のことをやっています。この制度は紹介していませんが、台東大学は院生の割合が多いです。院生が1000名くらいいて、その中の70%くらいは、在職先生、いわゆる現場の先生です。現場の先生を対象としたマスターコースを作りました。進修部です。こういう学生には学費を普通の学生より3倍くらい高く取っています。それがすべて学校の資金になるわけです。進修部では大体年間1億円くらいの資金を得て、その内5000万くらいが大学側の運営資金として自由に運用できます。その中で資金を捻出します。意外にこの私どものやっていることはうまくいっています。夜のコース、休日（土日）コースと夏休みコースといろいろあって、私どもの大学は年中無休です。ですから、その辺がかなり大学の資金源になります。

上埜： ありがとうございます。教員は大変ですね。夏休みなくて…

梁忠銘： 大変です。私は帰国してから1年、1回も休んだことがないです（笑）。

清水： 梁先生は本当に1日2時間とか3時間ぐらしか寝ずに、ずっと仕事をしているという状況が続いていて、それでもわれわれが行くといつも本当に大歓迎してもらって、感謝しています。





## 講演 7

### 台湾における高等教育の国際化—私立淡江大学の国際化戦略

私立淡江大学 闕 百 華

皆さん、こんにちは。淡江大学の闕百華と申します。どうぞよろしく申し上げます。

まず簡単に自己紹介をさせていただきます。1996年、私は交流協会奨学金留学生として、東北大学大学院教育学研究科博士後期課程に転入学しました。4年間の実りある留学生活を送って、博士号を取得して帰国しました。そして2001年、母校の淡江大学で教職に就き、日本事情、日本語会話などの科目を担当して今日に至っております。それから、昨年度から修士課程で「日本社会文化論」「現代日本の教育改革」の2科目を担当し始めました。

淡江大学について少しご説明します。私が勤務している淡江大学は、台湾で最も創立が古く、最大規模の私立総合大学です。ここ(スライド2)にキャンパスが三つあると書いてありますが、現在、サイバーキャンパスを入れて四つのキャンパスがあります。それから、9学部、博士課程17研究科、修士課程51研究科、52学科があつて、学生の総人数は2万8000人で、教職員は2200名余り、今までの卒業生の数は23万人に上っています。淡江大学は、台湾大学に次いで台湾のナンバー2のマンモス大学と言われています。おとし淡江大学の創立60周年を記念して、多言語の紹介ビデオが作成されました。ちょっと皆さんにお見せしたかったのですが、時間がかかりそうですので、時間があれば、ぜひ本学のホームページをご覧ください。

これは最近 Facebook に流されているものなのですが(スライド3)、1枚目は保護者の目から見た淡江大学、つまり学校説明会の時の写真です。

2枚目はちょっと分かりづらいですが、世間一般から見た淡江大学です。先ほど申し上げましたように、淡江大学のOBは多いので、よく助け合いながら各方面で活躍しているという意味です。

それから、学校行政から見た淡江です。いつも上位にランクされている大学です。

下の1枚目は友達の間から見た淡江の様子です。宮殿式のロマンチックな教室です。下の2枚目は、入学する前に思っていた淡江大学の様子ですが、サークル活動や楽しいイベントが多くて、みんなよく遊んでいるのではないかと考えていました。しかし実は淡江大学に行ったら、どこに行っても人でいっぱいでした。この写真はちょっと大げさなのですが。

それでは本題に入りたいと思います。まずは台湾における高等教育の国際化政策として三つあります。一つ目は重点支援大学の選定、二つ目は大学の質的保証、三つ目は留学生政策です。

グローバル時代における国際競争を勝ち抜くためには、台湾でも日本のようにCOEやGPなどの競争的資金制度が採用されています。

まず、世界水準の研究拠点大学育成を目的とする「5年500億計画」は、国際競争力向上のために、大学における研究人材の養成、確保を第一として、教育という機能より研究を重んじ

ます。台湾教育部に選定された大学に対しては、大学のホームページをとおして情報公開が要請されていますが、ほとんどの取り組みが似ているものが多かったです。

各大学で取り組んでいる項目は主に国際交流の推進です。それから、「教学卓越」は、卓越した授業の展開です。下の部分は学習環境の整備、「校園文化」とは、伝統・校風の確立です。そして、世界水準の研究推進と産官学連携などの項目から構成されています。

ここで最大の目的は、国際競争力を強化し領域横断的な優れたリーダーやエリートを育成することです。

この重点支援大学への方針の集中化により、世界の大学ランキングでの先端大学の順位が上昇しました。特に国立台湾大学の順位が上昇しました。しかし、これは同じ中国語文化圏にある中国、香港、シンガポールに比べれば決していい成績とは言えません。

それから、大学の質保証を図るために、特色、個性ある優れた取り組みを選定、支援する「教学卓越計画」、いわゆる台湾版 GP が打ち出されましたが、国の財源不足のために昨年度より政府からの経費補助が大幅に削減されました。しかし、少子化の中で教育体制の充実や魅力ある教育の実現は大学の存廃にかかわる問題でもありますので、各大学では優れた教育効果を上げるための創意工夫の実践研究が進んでいます。

三つ目の留学生政策についてです。台湾における高等教育サービスの輸出政策は、東南アジアからの学生の台湾留学招致拡大に重点が置かれています。これは先ほどの梁先生と重なる部分ですが、私は主に中国大陸留学生の來台就学開放について話したいと思います。

昨年度は台湾における中国人留学生の門戸開放元年と言われていています。しかし、台湾の学生の権利の保障および政治的配慮のために、馬英九政府では、「三つの政権」、「三つのノー」という厳しい規制が設けられました。そのために、定員は 2000 名余りでしたが、入学手続者の人数はわずか 928 名という結果が出ました。さらに台湾政府は中国の 41 大学、午前中、中国の先生が発表の中でおっしゃった 985 工程校の中の 41 大学の学歴を承認しましたが、中国政府は台湾留学生に対して 211 工程校、つまり 123 大学の受け入れ校に対して、さまざまな優遇政策を打ち出しています。報道によりますと、2008 年まで中国で大学以上の学位を取得した台湾人は、既に 2 万人余りに達しているそうです。このような状態が続けば、大陸の優秀な学生をゲットできるどころか、かえって台湾の学生が一方的に中国に流入してしまい、その流出も非常に危惧されています。

続きまして、淡江大学の国際化戦略について説明します。淡江大学の教育プログラムが 6 年間連続、台湾教育部の教学卓越計画に選定されました。これは本学が長年にわたって行っている教育研究の国際化および高度な人材育成に資する取り組みが広く認められたことも意味します。

淡江大学の教学卓越計画は、ご覧のように教師、学生、教育課程、特色という四つの部分から構成されて、その目的は、教育全体の質的向上を推進して、知性の卓越した人材を育成することです（スライド 6）。

なお、国際交流は本学の特色として幅広い分野で推進されています。淡江大学の国際化戦略

は、主にこの三つにまとめられます。

淡江大学は、台湾全国の大学で初めて学部3年次の海外留学制度を発足させた大学です。昨年度には428名の学部3年生が海外で勉強しました。そして、中国人、華僑を入れて合計1138名の留学生を受け入れています。なお、受け入れ学生の出身国を多い順に並べると、マカオ、香港、中国大陸、マレーシア、日本、アメリカとなっています。

先ほど梁先生が、高等教育国際協力基金のことについておっしゃったのですが、本学の学長、張家宜は初代の理事長を務めていました。そして第2期の理事長は台湾大学の学長でした。今期、つまり第3期の理事長は、同じく本学の学長です。その影響もあり、本学の姉妹校の数はかなり多いです。2012年3月の時点で、本学は30ヶ国・地域で合計146大学と国際交流協定を結んでいます。学生や教職員の国際交流シンポジウム、学会、講演会の共同計画、共同研究の実施、刊行物・図書との交換などを積極的に推進しています。

このグラフは、過去5年間、つまり2007～2011年度の淡江大学との大学間協定数の変化を国別で示したものです(スライド8)。最も多いのはアメリカの34校、それから中国30校、日本25校、韓国6校という順になっています。

もちろん協定校との間でダブルディグリーも積極的に導入しています。現在はパリ第4大学をはじめ12の海外大学とダブルディグリー取得制度の協力を行っています。

さて、大学の国際化の有効な手段として、近年、学問の分野を問わず、英語による授業の増設が奨励されています。2003年度より、本学には学士課程で初となる英語のみで学位の取れるコースが国際貿易学科に開設されました。それから、昨年度、本学には英語による授業が800以上あり、全学の総科目数の10%ほどに上っています。

さらに在学生の英語力を確保するためには、大学の卒業条件としてご覧のような英語検定レベルが設けられました(スライド10)。これはあくまでも最低基準です。科によって点数のレベルは違います。これは全学共通のレベルです。

本学は英語の専門学校だったという歴史があるため、語学教育に力を入れていることでよく知られています。私が勤務している外国語学部は、教育部からの補助金を得て、本学工学部と協力して、このような6ヶ国語の学習サイトを開発しました(スライド11)。

これだけではなく、本学ではインターネットを介して、イギリス、アメリカ、フランス、日本など、多くの海外大学との間で国際的な教育研究を進めています。

具体的な例を挙げると、2005年度には早稲田大学との連携講座設置の協定が締結されて、異文化交流実践講座が開設されています。また、東京外国語大学との間でも、学部上級生向けの遠隔共同授業が実施されました。

その経験をベースに、2010年、ご覧のようなシンポジウムが開催されました(スライド12)。これはインターネットで行われたシンポジウムなのです。シンポジウムの目玉は、中国語、日本語、フランス語、英語、スペイン語の共同授業がプログラムに組み込まれたことです。

言うまでもなく、教育の質の確保と学位の質の保証は、優秀な学生の獲得競争に勝つための必要条件とされています。本学は世界大学ランキングを強く意識して、国際的な認証機関の認

証を取得することを目的として国際化を推進、進展させています。例えば 2006 年、本学の情報工学科は、ワシントン協定により認定されました。そして 2010 年 1 月、商学部で事務局を設立して、現在はマネジメント教育に関係する国際認証の取得に着手しています。これを慶應大学は既に取っているそうです。

これはつい最近、先月発表された世界大学ネットランキングですが、本学は世界で 309 位、アジアで 43 位、台湾では連続私立大学の第 1 位です（スライド 14）。それから、台湾の大企業に好まれる大学生です。15 年連続で私立トップです。

これも先月発表されたものなのですが、大学ブランド力の調査です（スライド 16）。ここでも私立大学の中ではナンバーワンです。特に就業力は成功大学、台湾大学に次いで全国第 3 位です。

ご覧のように本学は、国立大学に負けないほど多くのランキングや認証評価で良い成績を維持してきました。

以上、申し上げましたように、本学における国際化の戦略から分かるように、英語による授業の実施以外にも、海外から質の高い留学生の受け入れ、海外姉妹校・学術交流協定校の締結、国際的認証、評価などは、国際化の主な指標として台湾の多くの大学で推奨されています。

このような動きは、国際交流の中での双方向性を保つという意味では非常に好ましいですが、あくまでも表面的な数値にこだわる国際交流の取り組みは、真なる国際化と言えるのでしょうか。国際交流は、大学国際化に必要な方法・プロセスであって、目的ではありません。その目的は国際的な視野と多元的文化の素養を持つ学生を育てることにあるということは何もありません。

ところが、この国際交流という方法が、一流大学の重要な評価基準として使われているので、目的化している現実が極めて多いです。思えば十数年前に私が東北大学に留学しに来たときは、文系は博士号が取りにくい、博士課程を満了しても学位が取れないと、よく周りの日本人院生や留学生に言われました。留学生は博士号を取れないと留学の意味がないので、文部科学省からの強い指導があって博士号を出すことになったようです。振りかえってみると留学中に最も心の支えになったのは、奨学金制度ではなく、指導教官の水原先生をはじめ、元助手の清水先生、特に仙台のホストファミリーの温かい支援がありました。

今は、日本や台湾を含む一部の国では、修士号はもちろん、博士号取得者も供給過剰状態になっています。博士号を持っているからといって就職が保証されるわけでもない、博士過剰の時代には、単なる留学生を受け入れるための制度整備にとどまらず、人の意識のレベルアップも含めて、自国の学生と海外の学生が本当の意味での相互理解を深められる教育の仕組みを大学の中に構築していくという認識と努力が必要です。要するに、有形の制度はもちろん、無形のもの、つまり人と人との間のつながり、きずなをつなぐことは、長い目で見て非常に重要だと考えています。

草の根の国際交流の実例として、本校の 3 年次、日本人交換留学生の例を見てみましょう。これは麗澤大学のある留学生の留学体験談です（スライド 18）。ここから分かるように、留学

生にとって一番印象に残っているのは、やはり学校生活、そして、先生、クラスメイトとのふれあいです。

もう一つ、中国人1年生の例を見てみましょう（スライド19）。中国大陸で台湾での学位が認められ、正式な留学ができるようになったのは去年からです。つまり、第1号の正規の留学生たちが1月、今回の台湾の総統選を間近で見守ったということになります。その数はおよそ1000人です。この蔡さんがその中の1人です。彼女のブログ「台湾でのわが青春」が一躍人気になり、1日数万アクセスとなっていると書いてあります。

それから、これも彼女が本校の学生との交流で分かったことなのですが、「中国の物価は意外と高い」ということです。それから、「台湾と大陸の地理的距離は遠くないが、心理的距離が遠いのだ。時間差ではなく時代差がある」とも言っています。それから、「大多数が統一を望まず現状維持を望んでいる」「民主政治でも、とても良いとは言えない」「4年後は、台湾の重厚な経験を吸収して大陸に帰るスポンジになる」などと書いてあります。つまり、中国大陸からの留学生は、中国大陸の民主化と将来の両国間平和にとって非常に大きな意義があるのではないかと、私はつくづく考えているのです。

以上をもちまして、私の発表を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございます。

清水： ありがとうございます。2年前のシンポジウムでお呼びして、われわれの将来構想についてお話ししたことがあったのですが、闕先生からは、「そんなことはうちでは全部やっている」と言われまして、ちょっとがっかりした思い出もあるのです。今のお話を聞いて、本当に淡江大学が多角的な形で国際交流を進めていることがよく分かりました。

それでは、いかがでしょうか。

闕百華： 遠隔教育について、一つ補足したいことがあります。今年5月から本学は台湾教育部からの委託を受けて、アジア研究科、つまり地域研究のアジア研究科で、南アメリカの幾つかの国、台湾と国交のある国の外交官、あるいはエリートに向けて、アジア研究所の修士課程の遠隔教育を行う予定です。これは5月からです。

これは日本にも参考になるのではないかと考えています。なぜかといいますと、国際的教養、国際的教育指導者を養成するならば、アジア地域で既に教育に携わっている国家公務員や教育に関する職業に就いている社会人を対象として、修士や博士コースで遠隔教育を行ったらいかがでしょうか。また、教育の質の保証という点から考えると、英語で授業を行うのではなくて、日本語で授業を行ってほしいです。特に、東北大学には日本語が堪能な韓国人留学生も多いのです。留学生の力を活かして遠隔教育の授業に活用したらどうでしょうか。

清水： ありがとうございます。遠隔教育は、先ほど午前中に本郷先生のお話の中でも少しありましたが、やはりどういう形ができるのか分からないけれども、とにかく機械だけは買い

ました。機械を買って、これからどういう形で活用していこうかということを考えているのです。先生のアドバイスをぜひ活かして、大学の中だけではなく、実際に教育公務員、あるいは学校の先生として働いている人たちにも、ぜひその遠隔教育システムを使って、新しい魅力ある情報を作りたいと思います。

## 講演 8

### 長所を生かす高等教育の国際化を目指して —日本の東北大学と中国の内蒙古師範大学の実態の手がかりに—

内蒙古師範大学 宝 力 朝 魯

こんにちは。ご紹介にあずかりました内蒙古師範大学の宝力朝魯でございます。どうぞよろしくお願いたします。

私が、なぜこういう題目で発表させていただくことにしたかといいますと、「長所を生かす高等教育の国際化を目指して」という大きな演目ですから、副題を「日本の東北大学と中国の内蒙古師範大学の実態を手がかりに」ということにしました。東北大学の場合はもう世界的に知られている名門大学で、これが一つの典型的な例になれるということです。内蒙古師範大学は普通の大学ということで、とういった取り組みが出されているかを紹介することによって一つのいい例になるのではないかと思って、こういう副題にさせていただきました。

私は 1999 年から 2003 年の間、東北大学の教育学研究科の博士課程で勉強させていただき、学位を取って、内モンゴルに帰国し、内蒙古師範大学外国語学院で、もう 1 人の先輩と 2 人で頑張っ、日本語学部を作りました。そして日本学術振興会外国人特別研究員として、2004 年に日本に来る機会がありまして、2 年間、外国人特別研究員として研究をして、2006 年に帰りました。昨年からは、日本語と日本の思想を研究するという目的で修士課程の大学院生を募集しています。今は 7 名の院生の指導をしています。先輩の学長が私はもう疲れているから、やってくれないかと言われて、私ができることなら頑張ってみましょうということで、今、内蒙古師範大学の外国語学院の中にはロシア語学部、英語学部、日本語学部と三つあるのですが、日本語の方を私が担当しています。先生と学生、院生を合わせて 160 名ぐらいいます。

まず、東北大学の話を少しします。私が言わなくても先生方はよくご存じだと思います。東北大学は建学のときから門戸開放ということで、ほかの大学は女性の学生を募集していなかったのに東北大学が初めて募集し、また、早くも外国人留学生を受け入れるという伝統の学校で、今、世界的な名門大学です。これについて私は非常に誇りに思っています。総長は、10 年間で留学生を 1300 名から 3000 名に増やすという目標を立てていて、やはり素晴らしいと私は誇りを持っています。

次は、内蒙古師範大学はどうなっているかということです。内蒙古師範大学の国際化について紹介させていただきます。

内蒙古師範大学は 1952 年に創立されました。中華人民共和国が建国されて間もなく、国境地帯の少数民族のところで最初に作られた大学です。ですから、内蒙古師範大学は民族教育の揺りかごといわれています。内蒙古師範大学を出た学生たちには、モンゴル民族の学生もいますし、漢民族の学生もいます。そして、それぞれの職場で非常に活躍されています。内蒙古師



範大学は基本的には教師を育てるのが主な目的ですが、教師ばかりではないです。行政の面で中央の偉い幹部にもなっている人もよくいます。

今の内蒙古師範大学が保有している土地面積は 253ha もあり、専任の教師は 1500 名余りいます。学部生は 2 万 9000 名余りで、大学院生は 4400 人、継続教育を受けている学部生は 5600 人余りいます。

内蒙古師範大学は特色を持った研究型の総合性の師範大学を目指して頑張っています。特色というと、内モンゴルにある師範大学なので、やはりモンゴル民族の特色を持っています。モンゴル高原という地域の特色を持った研究型の総合師範大学にしようとして頑張っています。例えばモンゴル研究などでは北京大学とも競争できる状況も出ます。しかし、ほかの歴史や哲学などの方面の研究だと、なかなか北京大学と競争することができません。ですから、自分の特色を出すのがまず重要です。そういうことを目指して頑張っています。

国際交流のやり方は、学院によって異なります。こちらで言っている学院とは、日本で言う学部ですが、日本の学部より少し規模が多きいです。すべての学院を紹介するのは時間的に無理だと思いますから、この中で代表的な学院（学部）、あるいは研究院（大学院）を紹介させていただきます。

例えば科学技術史研究院というところなのですが、1956 年に、内蒙古師範大学で李迪という先生が最初に科学史の研究をし始めました。李迪先生は業績を上げて、世界的に科学史の研究の面で知られている先生でした。残念ながら李先生は亡くなりましたが、科学史の研究の面では、内蒙古師範大学で 50 年余りの研究の歴史を持っています。

1983 年に科学史研究所を作り、2006 年に科学史と科学技術管理学部ができました。そして、それが発展して 2009 年に名前を変えて科学技術史研究院となっています。この科学技術史研究院には四つの研究所があります。それは科学史研究所、日韓科学技術史研究センター、北方民族伝統的科学技術研究所、伝統的射芸文化研究発展センターという四つです。この学院は結構国際化を進めており、今は日本、韓国、シンガポール、ニュージーランド、インド、フランス、イギリス、ドイツ、ロシア、ウクライナ、ベルギー、オランダ、ポルトガル、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど、20 ヶ国と学術交流を結んで交流を行っています。

そして、毎年、外国から贈書されています。例えばケンブリッジ大学のジョゼフ・ニーダム研究所が毎年英語で書いた原書を送ってきます。日本からも、横地清という先生が本棚 15 個分の蔵書と 2 万枚余りの研究写真を贈呈しています。それで、日本のそろばん方面の道具を集めた大矢という先生が、自分の集めたたくさんの道具などを内蒙古師範大学の科学技術史研究院に贈呈しています。これは科学技術研究史の場合です。

そして、もう一つ補足させていただきたいのは、この科学技術史研究院に日・韓科学技術史研究センターがあると申し上げましたが、ここでは何を研究しているかということ、中・日数学交流史、数学教育史、朝鮮数学史および関係資料の研究などをして、非常に業績を上げているところなのです。

一方、体育学院を見ても、体育学院も 1952 年、内蒙古師範大学の創立されたときに

できた学部です。今はもう体育学院となっていますが、ここではモンゴル民族の伝統的な体育についての研究が盛んに行われていて、中国でも高く評価されています。この学部生は 886 名で、大学院生は 196 名もいて、専任の教師は 57 名です。そして、この体育学院は、アメリカのミシガン大学や日本の鳥取大学、韓国の青雲大学、モンゴル国のチンギスハン大学、台湾の国立師範大学、ロシアのブリヤート国立大学などと非常に盛んに学術交流などを行っています。内モンゴル師範大学の体育学院からはオリンピックのチャンピオンも出ていますし、アジア体育大会のチャンピオンもよく出ています。これは体育学院です。

次に紹介させていただきたいのは、内モンゴル師範大学のモンゴル学研究所の蒙古学学院です。これも 1952 年に創立されました。今は、先生が 49 名、学部生が 2000 名、大学院生が 300 人、留学生が 120 名です。国際交流は、例えば東京外国語大学、モンゴル国教育大学、モンゴル国科学学院、イギリスのケンブリッジ大学などと学術交流などを行っています。

次は、内モンゴル師範大学に国際交流学院というところがありますが、これは実は最近できたものです。2003 年にできました。目的は、開放型の学院運営という方針を打ち出して、複合型の人材、国際型の人材を育てようと頑張っています。今は日本、韓国、マレーシア、アメリカ、イギリス、オランダ、ドイツ、カナダ、オーストラリア、ロシア、モンゴル国などの国々の大学や研究機構と学術交流をしています。

ダブルディグリーのようなところをやっているのは、スコットランドの学歴管理委員会と合同で、SQA HND という項目をやっています。これはスコットランドと協力しながら学生を育てますが、例えばここで育てた学生をスコットランド校も認め、両方の卒業証書がもらえるということになっています。残念ながらこれは短大レベルなので、我校の学生はあまり行こうとしません。それは、今はますます高い学歴を求めているのに、せっかく留学するのに短大レベルなので、お金まで使って留学するにはもったいないということになっています。午前中も先生方に教えていただいたところがありましたが、やはりプロジェクトをするなら、基礎的なところをやるのも重要ですが、もっと高いところで、例えば博士課程のプロジェクトも積極的に推進することが重要だと思います。

なぜかという、一つは学生たちの心理です。親たちの心理もそうです。学生本人も、なるべく高いレベルの学問を取りたい、いい学位を取りたい、できれば博士号を取りたい。そういう心理的なところがあります。もう一つは、学校運営の場合です。簡単なお話、もう分かるところは協力などをしなくてもできます。しかし、高いレベルの博士課程の大学院生を育てようとすると、名門大学は協力すればするほどいいところももっと出てくるのではないかと私は思います。ですから、内モンゴル師範大学の国際交流学院のスコットランドとのダブルディグリーは、今のところ頑張っているのですが、予想どおりにはあまりなっていない状態です。

これと同じような、3+1+1 もあります。国内で 3 年間勉強して、外国で 1 年間勉強する。それで学部の卒業証書を両方出します。そして、またあと 1 年だけ頑張ってお修士課程の修士号を取ることができますが、韓国の大学と始まりました。これは順調にいくと思います。

次は、私が勤務している外国語学院のところですが、外国語学院は 1959 年から始まっていま

す。やはり英語やロシア語が中心だったのですが、2003年に日本語学部を作りました。現在、内蒙古師範大学外国語学院は、学部生が1514名、大学院生が279名います。

英語学部の方はアメリカ、オーストラリア、イギリスなどと交流を盛んにしており、学生も派遣するし、先生も行って勉強してもっと学問を深めてきたり、そして向こう側も、ちょっと人数が少ないので、また先生を派遣してくださるといった状態です。

ロシア語学部の方は、ロシアのハーカス国立大学とクラスノヤルスク国立大学と交流を深めています。もちろん学生を派遣していますが、向こうの学生も受け入れています。

本学の日本語学部の場合は、やはり日本語学部の先生たちの多数は日本に留学して帰ってきているので、それぞれの母校と交流を持っています。例えば、私の場合は母校の東北大学、鹿児島大学、ほかの先生は鳥取大学、東京外国語大学、大阪大学、名古屋大学などと交流を持っています。

そして、もう一つ紹介させていただきたいのは、物理学です。先ほど私が申し上げたところでも、やはり内蒙古師範大学は社会科学がほぼ中心になっています。しかし、自然科学の物理・電子情報学院というところがあり、これがなかなか今、活発に国際交流をしています。なぜかという、この物理・電子情報学院の院長が、オランダのアムステルダム大学に留学した人で、帰ってきて、アムステルダム大学との交流を深めており、アムステルダム大学の方もいろいろな面で支援してくれます。そういうことでレベルが高くなって、非常に影響力が強くなっています。留学生が、帰国して、母校の方からまた後押ししてもらい、支持・応援をいただくのは非常に力になります。

内蒙古師範大学の国際交流は以上のとおりです。もちろん私は典型的な例を挙げたのですが、よくできているところもあれば、あまりできていないところもあります。

次に、学生の心理としては、やはり大学の長所を求めて来るのです。私はどこに行けば何が勉強できるというのは、学生の狙うところなのです。例えば私は1999年の春、博士課程に進学するとき、清水先生もよく覚えてくださっていると思いますが、私は鹿児島大学で修士課程を修了して、東北大学に参りました。東北大学の先生からは、「ええ、なぜ鹿児島からここですか。他に大学がたくさんあるのではないですか」と言われました。私は思想史の勉強をしたかったので、いろいろ調べてみて、やはり東北大学が一番自分に合っていると思って東北大学を選んだわけです。もちろん東北大学は世界的なランキング評価も非常に高い大学なので良かったと思います。そして、学都、杜の都などと言われる、非常に学術環境の優れたところなのです。これは東北大学の長所だと思います。

では、内蒙古師範大学の場合はどうなのかというと、先ほど申し上げましたが、例えばモンゴルに関する研究については、やはり中国で内蒙古師範大学はいい条件を持っているところです。そして、地理的な優位性です。特にモンゴル高原について研究するのでしたら、ちょうど北はロシア、東は東ヨーロッパ、そして南と東は東アジアという状態で、真ん中にあるという地理的な状況なので、やはりこれはいいのではないかと思います。

国際化を進めていく上で、特に留学生を受け入れる場合は、内蒙古師範大学の留学生は、中

国語の勉強もできるし、モンゴル語の勉強もできるのです。しかし、ほかの例えば南の方、北京に行こうとすると、中国語の勉強はできますがモンゴル語の勉強はできません。内蒙古師範大学に来たら、言葉だけではなく、モンゴル民族、漢民族、ダウール民族やチャン民族など、ほかの少数民族の文化にも触れることができます。これは内蒙古師範大学のいいところではないかと私は思っています。

しかし、いいところばかりでなく、駄目なところも認めなくてはならないので、考えてみますと、国際交流というと、私は早稲田大学のことを言いたいです。なぜ早稲田大学のことを言うかというと、早稲田大学はもう 1905 年から、当時の清国の留学生を、留学生部まで作って中国からたくさん受け入れていました。そして、早稲田大学に留学した中国人留学生、私の大先輩たちが帰国し、中国のいろいろな分野で活躍されています。それで、早稲田大学は中国でよく知られています。「早稲田っていいところですね」と、よく言うのです。

私が持っているこの冊子には、早稲田大学がここ何年に何をやっているかが記載されています。中国の大都市の人たちは早稲田大学をよく知っています。大都市部の学生たちはわりといい条件に恵まれているので、日本に来やすいです。しかし、内陸の地方の学生たちが日本に来ようとしたら大変です。それで、早稲田大学で今度は中国の西北地方の学生たちを呼びましょうということで、年に 20 名くらい、西北地方の大学の学生をこの何年間、呼んでいます。笹川財団と協力して、早稲田大学で 4 週間勉強するのに必要な費用、往復チケット、生活費の全額を負担しながら、中国の内陸の西北地方の学生たちを呼んで国際交流をしています。そして毎回、どういうことをやったということを冊子にまとめています。つまり、国際交流というと、なぜ早稲田大学が中国であんなに広く知られているかということ、やはり工夫されているからです。

この前も話したと思いますが、私は鹿児島大学にいたときは国際交流で非常に忙しかったのです。毎週のように小学校、中学校で子どもたちと交流しました。しかし、東北大学に来たらあまり会えるチャンスがなかったのです。私は最初変に思いました。東北大学は大きくて留学生が多いから、仙台の方々、東北の方々には留学生に飽きて、国際交流はよく知っているからもうしなくてもいいと思っているのかと思ったのです。しかし、後から聞いたらそうでもなかったです。やはり国際交流の面で足りないところもあったようです。

では、そうするとどのようにすればいいかということ、「長所は短所」という言葉を使っていますが、いいところはいいところでいいのですが、いいところの作用を発揮しなければ、やはりあまり良くないことにもなるのではないかと思います。例えばお兄さんが弟の面倒を見る、そして弟に尊敬される。このように、名門大学がリーダーシップを発揮し、リードすることによって、本来持っている力を発揮することができるのではないかと思います。例えば東北大学は世界的に知られている名門大学なので、対外学術支援による影響力のさらなる拡大を考えてもいいかと思っています。

次は、内蒙古師範大学はどうすればいいかということです。総体的に考えてみると、やはり弱いところが多いです。だから頑張らなければいけません。では、どうすればいいかということ、

わが国には偉大な鄧小平が出て「先富起来」という言い方をしました。門戸開放でも中国はまだみんな思い切ったことができない。門戸開放は何かということは、最初は一部の人しか知らなかったかもしれません。それで、鄧小平の「先富起来」は、まず一部の人が豊かになり、さらに周りの人にも波及し、みんなが豊かになるという方針です。これに例え、内蒙古師範大学では「先動起来」という方針を立てております。それは、まず個別の学院が国際化を進めていき、そこから大学の単位で国際化を進めて行くということです。それによって、国際化が推進されていき、レベルも上がっていくのではないかと思います。頑張っている内に、短所が長所になるのではないかと思います。

毛沢東は、「貧乏はいい学校だ」とおっしゃいました。貧乏から脱却するためには頑張らなければなりません。勉強しなければなりません。だから、貧乏は悪いことばかりではなくて、「いい学校だ」と言ったのです。だから、弱いところも頑張れば強くなれるという希望を失くしてはいけません。

次は、共同学位開発プロジェクトの実施に当たってです。先ほどほかの皆さんがこの方面に触れたのですが、留学生にとって言えば、やはり奨学金があることが重要です。奨学金があれば安心して勉強ができます。そして、授業料の免除もしていただければ安心して勉強できます。アジア共同学位開発プロジェクトで、何ヶ国かを転々と回りながら学位を取るという発想でしたら、東北大学に入学し、東北大学の学籍を持つのが大事だと思います。東北大学の学生として奨学金をもらいながら、ほかの第2国、第3国に行くということはいいかもかもしれません。但し、学籍があるのは東北大学、そして、ほかの国に行ったら学籍が変わったりすると、あるいは奨学金が切れたりすると、かえってプロジェクトの実施には悪い影響を与えるかもしれないと私は考えています。

国際化といいますと、長所を活かして国境を越える国際化もあれば、長所を活かして学校に迎え入れる国際化もあります。例えば東北大学は名門大学で、いろいろな学生が東北大学に留学しています。だから、これは長所を活かして学校に迎え入れる国際化です。

そして一方は、短所補足の国際化です。例えば内蒙古師範大学でも思っています。国際化を進めようとする、外部から優秀な先生を招聘して、教えていただくのも一つの方法です。そして、短所補足です。今回は外に出ていってもいいのではないかと考えられます。

私の発表題目では長所を活かした高等教育の国際化ですが、国際化を進めるにあたって、短所を補うための国際化は消極的なものになりがちで、効果はあまりないと思います。ですから、頑張るべく長所を活かして、自分の悪いところを補って、もっと自分の長所を活かすような高等教育の国際化になればいいのではないかと私は考えています。ご清聴どうもありがとうございました。

清水： ありがとうございます。長所、短所という話が出てきましたが、哲学的な感じもいたしました。いかがでしょうか。

早稲田大学は中国でもやはりよく知られていますか。

宝力朝魯： よく知られています。かえって東北大学は、特に内モンゴル辺りでは早稲田大学ほど知られていません。

清水： 早稲田大学については、先生方お手元にお配りした「アジア型エラスムス・ムンドゥスの可能性」という報告書があり、こちらに早稲田大学の先生、彼はもともと台湾の人なのですが、昨年7月のシンポジウムに来てもらってお話をしてもらいました。早稲田の場合には、大学の存続を懸けて、国際留学生担当の部局に100人ぐらいのスタッフがいるということです。その100人は、全部早稲田大学に勤めているかというところではなくて、中国や台湾、韓国など、アジアの諸国に散っています。そこで早稲田大学に留学してもらおうようにいろいろな働きをしているという話を聞きました。これは、うちの卒業生である宝力朝魯先生もよくご存じだと思いますが、ちょっとまねできないところがあるんですね。ただ、今のお話で、早稲田が笹川財団と連携しながら留学生の呼び込みをしているということを伺って、これは一つ勉強になりました。

あと、宝力朝魯さんからいただいたアドバイスでは、マスターレベルよりもドクターレベルで、なるべく高いレベルでプログラムを考えたらいいのではないかということで、これは朝も質問されていましたね。

宝力朝魯： そうですね。先生から教えていただきまして、まずは修士課程、そして博士課程を狙ってということです。

清水： ちなみに、ちょっと報告と関係ない質問で恐縮なのですが、中国はものすごく多様です。今日お越しいただいたのは、大連と上海、董存梅先生は河北、あと、叶さんは杭州、宝力朝魯さんは内モンゴル、これは地域によって、例えば大学卒業後の就職の難しさは違うのでしょうか。

宝力朝魯： 場合によって、ありますね。

清水： 違うのですか。華東師範の陳さんのお話を伺っていて、一方で伝統的な大学教育を行いながら、アメリカの大学と協力して、全く新しいタイプの教育を行う学校を作るといことです。そこでは人材育成のビジョンや目的、方法なども全部違って、それがおそらく新しいグローバル化した世界に対応するような人材の育成を手掛けるということなのだと思いますが、内モンゴルでは、フフホトでしたね。フフホトではどうですか。そして、グローバル化の影響はあるのでしょうか。

宝力朝魯： そうですね、やはり経済の国際化、そして教育の国際化にもなっています。そうすると、やはり大学と大学の競争も出てくるんですね。大学と大学の競争をしますと、全面的

にぶつかって、特に地方の大学はなかなか無理です。そうすると自分の特色を持ち出さないと生き残れないということです。ですから、特色を持った大学を目指して頑張っているところです。

清水： もうちょっとお聞きしたいところがあるのですが、ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

もし質問、意見等がなければ、本日はこれで打ち切りということにさせていただきたいと思えます皆さまからのご意見、質問、ありがとうございました。

# 第三部

## 講演9

慶熙大学の新たな挑戦と世界市民教育

## 総合討議

(全体討議)



清水： おはようございます。それでは本日のシンポジウムを始めたいと思います。

昨日のディスカッションの後で、エドワード・ヴィッカーズ先生から、議論のポイントを幾つか挙げていただきました。今日、鄭先生の報告が終わった後に全体でディスカッションをしますけれども、若干、ヴィッカーズ先生からいただいた質問および論点について紹介しておきたいと思います。

まだ、プログラム全体がご理解いただけていないのではないかと思いますけれども、もし皆さんが日本の東北大学に留学したとき、現在われわれが考えているようなジョイントディグリーあるいはダブルディグリーが利用できていたとしたら、関心を持たれていたかどうか。もし関心を持たれるのであれば、その理由、そうでないのであれば、またその理由をお聞かせいただきたいということが1点です。

二つ目は、皆さんそれぞれ大学で教鞭を執られているわけですが、学生さんたちを見ていて、現在の学生は、われわれが考えているような東アジア共同学位、日本、中国、韓国、台湾という地域・国を移動しながら学位を取るというプログラムに関心を持つでしょうかという点です。

それから三つ目になりますが、現在われわれは教育学分野のマスターコースでコースを開設しようとしているわけですが、どういうテーマがいいのか、あるいは、どのような焦点の当て方が多くの学生にとって魅力的なのか。例えばテーマの絞り方ですが、ある程度広いテーマがいいのか。例えば比較教育学のような非常に広い、比較教育学というのは実は何も言っていないに等しいので、そういう広いテーマの設定がいいのか、あるいは、今、小川先生が中心になってくださって、心理学のコースにかなり絞った形でコースの設定を進めているのですけれども、そのように特定のテーマにある程度絞った方がいいのかどうかということです。

そのほか、四つほど質問をいただいているのですけれども、大きな質問はこの三つぐらいでしょうか。最後にまたヴィッカーズ先生から補足していただくかもしれませんが、最後の論点でこういうテーマについてお話、ご議論いただければと思います。

さて、若干スタートが遅れましたけれども、このシンポジウムの最後の報告者になります。慶熙大学の鄭賢卿先生からご報告をいただきます。

## 講演 9

### 韓国慶熙大学校の新しい挑戦と世界の市民教育

慶熙大学校 鄭賢卿

皆さん、おはようございます。鄭賢卿と申します。自己紹介を重ねて発表させていただきたいと思っております。

今回の発表についてですが、大学校の国際化と共同学位のプロジェクト関連の発表を依頼されましたが、私は共同学位のプロジェクトの中身がよく理解できていないところもありまして、今日何を話せばいいのか迷っていましたが、本日の発表では慶熙大学校の国際化を中心に発表させていただきたいと思っております。私と慶熙大学との縁はちょうど1年余りで、あまり慶熙大学校の行政的な話などは、詳細に申し上げられませんが、一応、資料を用意いたしました。今日の発表は、昨日、皆さんのご意見や発表の中身、あとは懇親会での話を踏まえながら、私の方で準備した資料と合わせて、お話しさせていただきます。

先ほど、清水先生から紹介していただきましたが、私は1991年に日本に参りました。最初は日本語学校で勉強をしました。当時、日本のことは全く知りませんでした。とにかく日本は経済発展している国で、自分が学ぶところがたくさんあると思い、留学生としてきました。日本語の勉強は一切していませんでしたが、怖いものがないという20代前半に参りました。

東北大学を選んだのも、個人的な理由があって来ましたが、もともと学部の専攻は社会福祉でした。日本への留学を選んだ理由としては、日本は経済発展以外にも、優れたものが多いと思いますが、影というか問題点も韓国より先に経験しており、抱えている課題をどのように解決するかということに興味がありました。

最初は社会福祉を学ぼうとしていました。当時私は結婚していて、夫が先に東北大学に決めました。しかし東北大学には社会福祉専攻がなかったため、私の専攻と一番似ていると思い、社会教育を選びました。社会教育については日本で勉強して、専門を理解することができました。それは、市民センターというところの日本語教室で、無料で授業を受けることができましたし、それから日本のボランティア、いわゆる日本の奥さんたちと出会いました。こうした住民の活動が社会教育という学問だったことが私にとっては貴重な経験でした。東北大学には1992年に研究生として入学し、高橋満先生にはいろいろとお世話になりましたし勉強の指導をしていただきました。考えてみればもう20年前の話です。

私が福祉を勉強しようとしたのは、韓国では、なぜ人々は不平等で、ある人はお金持ちで、ある人は貧困で生活が苦しいのかという疑問を持っていたからです。それから、福祉だけではやはり世の中は変わらないのではないかなということと、市民活動については日本に来て分かったので、社会教育を学び、市民がどういう学習をして実践するかを研究したくて、1993年にマスター課程に入りました。それから1997年に、いわゆる単位取得満期退学という形で仙台

を離れることになりました。

1997年から1999年の2年半ぐらいは東京におりました。そのときは子どもができたので、東京では学生ではなくて、母親として、それから住民として生活しました。それから、住民運動や市民運動に携わっている方たちに出会いました。楽しかったですが、赤ちゃんがいたのでなかなか活動ができず、1999年に韓国に戻りました。博士号についてですが、当時、博士号が取れない雰囲気でしたし、それで、私も取れるとは思いませんでしたので、博士号を取らないまま帰国しましたが、振り返ってみると、研究は辛いながらも楽しかったです。修士論文は市民活動、日本の自主グループの活動をまとめましたので、韓国に戻って修論を活かした活動をしたいと思っていました。韓国に1999年の秋ごろに戻りました。私の故郷は水原（スウォン）というところで、ソウルから車で40分ぐらい離れているところです。2000年に、水原にある女性団体に入って、日本で学んだものをそこで何となく実践してみようと思いました。それともう一つは、大学校の非常勤講師を掛け持ちしながら、自分が研究者なのか、実践家なのか、活動家なのかというアイデンティティにも迷いながら時間が経ちました。結局、研究と活動をまとめたということで、博論を2004年から2005年にかけて、自分が韓国で活動したものをまとめることになり、「韓国の女性運動団体とエンパワーメント」というテーマで博論をまとめました。

それから今回東北大学から招待をいただき、12年ぶりに東北大学に訪問することができました。アジア共同学位開発プロジェクトで話をするにあたっていろいろな思い出があり、短い時間に自分が話したいことが言えるかどうか自信はありませんが、慶熙大学校の取り組みについてお話しさせていただきたいと思います。

それで、韓国に戻って、なぜ去年から慶熙大学校と縁があるかということからお話いたします。私は社会教育（韓国では平生教育）が専攻だったので、学校で学生に教える非常勤もしながら、公務員や、NPO活動家、住民など、韓国と日本の架け橋みたいになって、韓国にいながら日本からいらっしゃった活動家や研究者と共同研究や調査をし、逆に韓国から日本にきて活動をしました。

私が今日招待されたのもやはり慶熙大学校にいるからだとは思いますが。慶熙大学校のことは、名前ぐらい知っている程度でした。昨年12月に、慶熙大学校の関係者から「教養学部を変えて、市民教育という講座を教養必修科目とするので、そこで講義専任教授としてやってくれないか」と提案されました。そのカリキュラムと中身、方向性を見ると、これこそ私がやりたいことだと思い、すぐその場で受け入れました。

ポスターに「教授」とあるのは間違いで、講義専任教授です。ですから、非正規職というか契約職です。そして、慶熙大学校の新しい改革の中で、市民教育という講座を、去年1年、新入生3500人ぐらいを対象に教えました。今回の発表原稿の作成にあたっては、「はじめに」と「終わりに」のところをどうまとめるかを考えるうちに資料を東北大学に提出しました。なぜ共同学位を開発するのかがよく分からなかったのです。だから、昨日のシンポジウム及び懇親会で聞きながら、韓国から来る前の問題意識も重ねて幾つか述べましたが、今朝早く起きてプ

プロジェクトの報告書を読んで、先生たちも私と同じ問題意識を持っていると思いました。

要するに、何のために、誰のために共同学位を開発しなければならないかということ、先生たちも悩んだと思いますが、私も自分の話をしながら、皆さんと討論したいです。昨日たくさんの方々から自分の国で頑張っているお話、国際交流、国際化のお話をいただきましたが、私はいまだに国際化や教育にまだまだ戸惑う人間で、疑問を持ちながら聞きました。それから、学位というのは資格です。資格については昨日いろいろな問題や提案が出ているので、それについては触れずに、「共同」に絞ってお話をしたいと思います。

共同というのは、何のために共同するか。一応、アジアの国際的な教育指導者を育てるための共同学位プロジェクトですよね。そのとき、本当にアジア的なものはあるのでしょうか。昨日、ヨーロッパやEUのことを聞きましたが、自分の勉強不足で、同じ研究室にいた李先生のことや中国上海のことをいまだによく知りません。彼と彼女たちがおかれている政治、歴史、社会的な文脈などをまだ分からないままです。アジアにおける国際的指導者の教育というのは何かということでもさらにわからなくなりました。

ですが、何らかの動きがあるのは、共同的な問題があり、その問題に対応して、解決するために考える人を育てるということでは試みているのではないかと思います。そういうことを皆さんも考えたと思います。その手掛かりになることは、私の実践と研究のことと、慶熙大学校でちょうど私のような人に声が掛かったということです。

6番に書いているのは、「フマニタスカレッジ」です。昨日も言われましたが、今、韓国では入試試験中心の教育から抜けて、オルタナティブな教育を教養学部で行おうとして、市民教育風の現場と実践を大事にするということにチャレンジしています。それを中心に、それと実践を手掛かりとしてお話しさせていただきたいと思います。

まず、慶熙大学校は、二つのキャンパスを持っています。ソウルと水原というところにあります。水原のキャンパスは名前を国際キャンパスとして、いわゆる慶熙大学校で考える国際化を進めています。国際キャンパスは20年前にできたらしいです。ソウルキャンパスは1949年にできたものなので、60周年を迎えた2009年からフマニタスカレッジ以外にもいろいろな大学校の改革を積極的に進めたようです。

大学の規模としては、マスコミや大きな新聞社、教育科学書などでは、私立大学の中で10位以内に入ります。

外国人の留学生については、慶熙大学校は早くから中国の留学生を積極的に受け入れていて、2500人もいます。現在、韓国で最大の留学生数です。外国語大学校の大学生を受け入れていますが、そのうち約2000人が中国からの留学生です。中国との国交がなかった以前から、中国の留学生を積極的に受け入れたらしいです。そのような流れから、ようやく去年、中国の留学生を中心にして、留学生の自治機構、要するに学生会という組織ができました。そのぐらい留学生に力があるということです。日本に来る直前に会長さんにインタビューもしてきました。

「はじめに」というところに、抽象的な言葉と、あまりにも理想的な言葉というか、理論的な言葉をいろいろ書きましたが、私も来る前に慶熙大学校をちゃんと勉強しました。どうい

ことを慶熙大学校は狙って教育を考えているかということ、このように四つにまとめることができます（スライド2）。ここで見ると、グローバルな人材というのは、普遍的な人間愛ができる人ということです。「はじめに」に書かれているものは私の言葉ではなくて、慶熙大学校が将来どういった人材として教育したいか、どういう人間像を求めているかをまとめたものです。

ここには書いていませんが、慶熙大学校の設立者は趙永植という博士です。後ろの資料に出てきますが、彼はそもそも韓国で朝鮮戦争が起きた1950年の直前、1949年に大学校を設立しようとしたのですが、1950年に朝鮮戦争が起きたので、残念ながら大学校の活動はあまり活発にはできなかったようです。もともと彼の考え方は、社会的な歴史もあり、とても平和にこだわっていました。平和というのはとても重要なものだと思います、自分が大学校を設立するとき、平和を中心に人材育成を目指しました。60年間一貫性を持って進めております。次に国連との活動や平和活動を見ると、もちろん学校の報告なのできれいなところを表現したと思いますが、60年間、一貫性があるので、こうした取り組みはいいと思いました。

もう一つは、ここに建学精神ですが、人間を愛する人として育ててどういう世界を展開したかということ、最初から「文化世界の創造」という教育理念で学校をつくったようです。文化世界というのはどういうものかということ、学校のホームページに出てくるのが、この三つです。文化的な世界をこのように概念として置いていました（スライド3ページ）。

それから教訓ですが、私はここが非常に大事だと思います。文化世界も非常に大事ですが、学校が創立されたのが1950年で、韓国はちょうど朝鮮戦争の最中でした。にもかかわらず、思想の民主化、生活の民主化、学園の民主化に取り組みました。ほかの大学にも校訓があると思いますが、慶熙大学校は最初から「民主化」「文化」「平和」という三つを校訓に掲げました。

次に慶熙大学校がいわゆる国際交流、国際化をどのように進めているかを、三つに分けてお話しさせていただきたいと思います。それから、ほかの大学校はどのように国際交流をしながら、アカデミックなこと、思想を公開するということです。

「Global Collaborative」ということで、中身は昨日先生たちが発表されたように、中国、日本、あるいは国連（UN）、NGO、NPOと共同でこのようなcollaborativeを作って、アカデミックな共同研究をするということです。

それから、これは（スライド5）実際に技術の文明の価値を知って、「Global Studio Network」として、昨日ちょっと機械やシステムのお話を聞いたと思いますが、実際にGSNというのは一昨年からは北京やニューヨークなどに既に設けています。2015年までに拡大して、グローバルなスタジオを設けて画面を見ながら勉強ができるなど、学術交流、大学の公開する計画を持っています。

次は、学生についてお話ししたいと思います。一つは、慶熙大学校の学生が海外に行くための制度です。これは皆さんもいっぱいお話ししているので読めば分かると思いますが、交換学生制度というものがあり、世界65ヶ国の380校と姉妹提携をしています。その中身は、ここに資料を持ってきましたので後でお渡しします。東北大学も姉妹学校として入っています。いろいろな大学校が入っています。ホームページにも書いてありますが、これは英語と中国語

に対応できるようにホームページに載せられているので、興味のある方はご覧ください。

短期留学生の派遣制度もあります。こうした取り組みは他の大学でも行っておりますが、海外での短期研修を受けるプログラムも実施しています。

それから、ダブルディグリーも実施しています。慶熙大学校は前から立命館大学と深い交流があるようです。それは立命館出身の教員がいるそうです。やはり交流というのは、制度的なものもありますが、人と人の交流も大事だと思いました。

日本はやはり科学的、技術的な専門を勉強しに来ることが多く、日本政府と共同国費奨学生を派遣するというプログラムを持っていました。ここに書いているとおり（スライド9）、日本ではこういう大学に工学部の学生を派遣しています。それから、文化やスポーツなどいろいろなことで交流しています。

4番目に、外国から来た留学生のために慶熙大学校が制度化していることをお話しします。国際交流のために設置された機構を組織で調べると、国際交流委員会や国際交流所など幾つかありましたが、一番体系的にやっているところは国際教育院です。こちらでは、いわゆる学問的、体系的な勉強や指導、支援をしています。1993年に国際教育院ができて、韓国の政府の関係者や外国人など、留学生以外にも外国から来ている駐在員のために、韓国語を専門的に教えることに力を入れています。

前にもちょっとお話ししましたが、中国とは既に長い間交流を結んでいて、北京大学からは無試験で進学できるような課程を運営しています。ちょっとよく分からないのですが、そういうものが一応あるみたいです。

幾つか、ここに外国人のための韓国語教育プログラムを書きました（スライド10）。特徴的なのは、担任制度があり、中学校と高校のように少人数できちんと担任制度にして韓国語の勉強をさせるよう運営していることです。また、もう一つは、日本にチューター制度があるように、それと似たようなもので、大学院生と一对一の付き合いで韓国語ができるように、韓国の生活ができるようにというものがあります。文化や生活が相談できるように、設置した制度です。

一番特徴があるのは、サポートセンター、CISSです。これはどういうものかということ、2年前にできたものですが、これは大事なので、1（スライド11）と2（スライド12）に分けて資料として出しました。

2010年に、韓国の大学校では初めて、留学生教育支援のための特別な部署として、人的なもの、空間と、制度的なものを整えました。これについても来る前に関連の課長に会って話をすると、まだまだできて2年経たないので、いろいろな課題がいっぱいあると言っていました。しかし制度的に、韓国の大学校における留学生のために特別支援という制度で、このように整備されたことはいいことだと思います。

要するに何をするかということ、留学生が大学校の生活及び授業で大変さを感じている言葉の問題の対策をしています。例えば、学部生1年生のために、特に中国の人が2000人ぐらいいると言いましたが、中国語で問い合わせができるようなシステムや語学のできる先輩を付ける

など、最初はそういうことからやるということです。履修届も留学生専用のものがあります。それは英語が共通語で使えるようになっています。

昨日、姜先生もそういう話をしましたが、韓国の国際化はなぜか英語を勉強することに偏っています。慶熙大学校もその現実の問題から逃れられず、英語を共通で勉強する授業が幾つかあります。いい意味では留学生たちはこれを利用、活用して、履修届を出すということもあります。

留学生のために、慶熙大学校は韓国でもナンバー3に入るサイバー大学校を持っています。サイバー大学校と提携しながら、オンラインで韓国語と外国語、要するに日本語や中国語、主に中学の留学生が多いので中国に対するシステムが多いのですけれども、中国と英語の字幕が付いているようなオンラインシステムを整備しました。これはとてもいいと思いました。それは、何回も何回も繰り返して見て、勉強することができるからです。私も前の留学生だったごろ、最初の1年目と2年目は授業の速さに追い掛けるのが大変でしたので、このシステムはいいと思いました。

それから、小さなグループの活動を実施して、自主グループで学習や文化のドキュメンタリーができるようにしました。学習能力を高めるために放課後学習を取り組んでいます。

次は慶熙大学校での世界平和のための活動をまとめました。5番と7番です。大学校の創立者は平和ということを非常に教育理念として大事にして、その内容をPPTにまとめましたので、後で読んでいただければいいと思います(スライド14)。

ここで一番驚いたのは、創立者の趙永植博士が1981年の世界大学総長会議で世界平和の日と年を提案し、それをきっかけに、1986年に国連で通ったことです。

世界平和の日の30周年を記念して、慶熙大学校は去年UNAIと国際会議を開催しました。これは私も参加した。UNはUNの画面で、慶熙大学校の学生は大きな講堂に集まって、お互いに討論しました。討論には、今、UNの事務総長になった潘基文さん、世界で平和活動をして活動者たちも招へいしました。直接学生とお話しができるようにして、非常に評判のいい会議でした。学生にとっては、自分たちが尊敬する人と直接お話しできました。もちろん直接英語でもできるし、通訳することもできるので、密接な話まではできなかったかもしれませんが、学生は影響を受けたと思います。

「明るい社会運動」というのは、趙永植さんが前からずっとしていたもので、彼はずっとそういう奉仕などをしていたようです。「平和大百科事典」も書いています。

大事なものは5-9で、ユネスコから平和教育賞を受賞しました。これは後でちょっと時間があればお話ししますが、平和福祉大学院という特別な大学院の制度を設置しました。これは韓国でも初めてもらった平和教育賞だそうです。平和福祉大学院というのは、要するに平和学、平和を実践するためにいろいろな専門者を育てるような大学院です。

1999年、NGOの大会を学校が主催して開催しました。私もちょうどこのとき韓国に帰ったので、市民団体に興味があるのでちらっと見学しました。少しだけ見たのであまり頭に残っていないのですが、いろいろな世界の市民運動やUNの人が来て、いろいろなブースをやっている

た覚えがあります。

慶熙大学校が行おうとしているマスタープランですが、先ほど言ったように慶熙大学校は水原に膨大な面積の国際キャンパスを持っています。そこにこれから 10 年ぐらいかけて平和公園を造ろうとしています。計画はしていますけれども、予算の問題がありましてまだ目に見える形にはなっていません。Peace BAR Festival はアカデミックな交流です。平和ワークショップも開催しています。(スライド 20)

他、市民フォーラムも創設しました。

未来文明院をなぜここに書いているかということ、これも 3 年前に、こういうことを総合的に推進できるように、一つの機構として発足しました。これは学問的なものをまとめる、記録を理論的にまとめるということ、目的にできた機構です(スライド 21)。

それから、ここに「フマニタスカレッジ」と書いています。こういう流れで、慶熙大学校は 2009 年をきっかけにして、教養学部を「フマニタスカレッジ」という言葉に変えました。「フマニタス」とは、キリスト教で「文明をつくる人間」ということで、哲学的な意味です。要するに、今までの大学の教育が本質を忘れて、技術や物質科学などにこだわってやっているの、国際化や大学校の競争力において、やはりこれでは駄目ではないかと思い、教養学部には三つの柱を設けました。

一つは、中核教科として昔の古典の哲学を 1 年生から学ばなければならないというものです。古典の哲学なので非常に難しいです。2 番目は、自分たちが今住んでいる世界で何が起きるかをきちんと学ばなければならないというものです。3 番目は、私が今やっている市民教育です。

フマニタスカレッジの志向性はこういうことです。(スライド 23)

市民教育が何を志向するかということ、要するに、市民というのは自然に生まれたのではなくて、つくられたものなので、ずっと一緒につくっていくものとしてこれを志向して、このような市民を育てるということです。

中身は、私も市民教育を 1 年間 200 人ぐらい教えました、クラスは必ず 30 人以内です。なぜかということ、最初から現場に行かなければならないので、3 人か 4 人が組んで、自分の頭で考えて、自分が興味を持っていることで社会的な問題意識を持ち、社会や地域に行き活動しなければならないからです。その活動のために 1 学期の時、教員は学生と共に頭を悩ませながら進めました。もちろん教材として分厚い教科書がありますが、それはあくまでも参考書です。

市民教育は人々がテーマを作ってやるものですが、これは、ちょうど去年の 1 学期の学生たちが作った事例をまとめたものです。幾つかの事例集があり、今度 2 学期の事例集もまた発行される予定です。

最後にちょっと述べたいのは、市民教育を発足させたときには、これが本当に今の教育にふさわしいか、これを学生たちが嫌がるのではないか、これをして実際に変わるかなど、いろいろな不安点や不安感はありました。確かに、学生は大変でした。しかし、今までやってこなかった教育のプログラムで、自分が何かもの考えることのきっかけになったという感想文がた



くさん寄せられています。もう一つは、今までやっていなかった現場が分かった。分かったことで、またものを考えることになったということは、みんな共通の所感として話しています。

7 番目は、地球の共同体のために慶熙大学校が行っている活動です。慶熙大学校は韓国最大の漢方病院を持っているので、病院の奉仕の活動もやっています。このようなことをしています（スライド 26～29）。

話が長くなりましたが、最後にまだ補足の資料がお手元にあります。最後になりますが、東北大学教育学研究科における共同学位開発にあたって教育の本質を踏まえたうえで、アジア的なものとしてどういったものと作り上げるかを考えなければなりません。私には市民活動した経験と実践だけでなく、いろいろな大事な資料、人間、資源、現場があると思います。今回留学生出身私たちを呼んだという理由もそうですが、そういう人々の本音や、そこで感じたものをちゃんと把握して、多様性や柔軟性も含めた、共同学位を開発を願っております。

これで私の発表を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

清水： どうもありがとうございました。だいぶ時間をオーバーしてしまったので、一つ二つ質問を受けて、あるいはご意見をいただいて、若干休みを取りたいと思います。いかがでしょうか。

本郷： 「複数学位制度と単位交流」というものがスライド 8 ページにありますが、まだ実態はそれほど動いていないのかもしれないのですが、今回のシンポジウムと関連して、「共同学位制度（Joint Degree）で、両大学で一つの学位を授与するプログラムも実施しており、今後さらに拡大していく計画」であるということが書いてあります。そこについて、現在の状況と今後の方向性について教えていただければと思います。

鄭賢卿： 大変申し訳ないが、私も具体的に話を聞いて来なかったもので、制度的なことは次回にデータをお送りいたします。すみません。

本郷： 分かりました。ついでに言いますが、分野はどういう分野でしょうか。やはりヒューマニティーズですか。

鄭賢卿： フマニタスは教養学部なのです。だから、これは学位ではないですね。

本郷： 分かりました。

鄭賢卿： フマニタスカレッジは、もともとマスタープランでは、一つの教養学部の学位ができることを目指して「カレッジ」という言葉を使っています。それだけの専攻になることを目指して、わざわざ教養学部ではなく「カレッジ」と名付けています。これは大学の中でとても

シフトアップしたもののなので、歴史と哲学、社会、実践という四つの専門があります。

清水： ほかにいかがでしょう。よろしいでしょうか。それでは、この後で全体討議もありますので、その中でまたご質問をいただくことも可能だと思います。

タベ懇親会で話しながらプレゼンテーションの計画を変えてくださいました。最初と最後の方で、何のための共同学位なのか、一体誰のためなのか、なぜ国際なのか、なぜ共同なのかという根本的な問いから始まって、最後は教育の本質をよく考えた上でプログラムを立ち上げることが必要だ、そのためには、われわれが持っている教育的資源をもう一回洗い直すことが必要だというご提案、ご意見をいただきました。この点は本当にわれわれとしても真剣に受け止めて、今後のプログラムの発展に活かしていきたいと思います。先生、どうもありがとうございます。

## 総合討議

清水： それでは総合討議を始めます。皆さんは、われわれの卒業生でもありますし、いわば身内なので、本音でお話ししていただければと思います。われわれの中でもまだまだはっきりしていないところなどありまして、細かいところでも結構ですので、ご意見あるいは質問をぜひお寄せいただければと思います。シンポジウムの記録は、今、皆さん方のお手元にお配りしたような冊子にまとめる予定ではありますが、まとめられる時のことは意識しないで、自由に発言していただきたいと思います。時には、非常にはっきりとしたご意見やご批判もあろうかと思いますが、ぜひ遠慮なくご意見をいただければと思います。

陳曦： このプロジェクトについて、私は一応分かっているつもりなのですが、規模が違ったりやり方も全く違いますので、今回のシンポジウムでは、規模に関する説明が今までなかったので、本郷先生に説明していただければと思います。よろしくをお願いします。

本郷： ありがとうございます。具体的な規模については、正式に人数を定めているわけではないのですが、各国 2~3 人ということで、例えば、日本、中国、韓国、台湾で 3 人ずつだと 12 人、2 人ずつだと 8 人になりますので、新しいジョイントディグリーのコースを作るとすると、多分 10 人前後ぐらいの規模が現実的だと思っています。10 人といっても、現在の教育学研究科の博士の前期課程、マスターの定員が 43 人です。皆さんがいらしたところよりも随分多くなっていると思いますが、例えば 10 人というと、そのうちの 4 分の 1 を占める数になるので、かなり大きいものになってくるのではないかと思います。

清水： 一応、どのぐらいの学生を受け入れれば教育的な効果が一番高いのか、どのぐらいの人数の学生を受け入れるのが一番いいのか全く分からないのですが、例えばヴィッカーズ先生は、ロンドン大学でヨーロッパのエラスムス・ムンドゥス計画に携わっていらっしゃるわけですが、それはヨーロッパ生涯学修士、ライフラーニング何とかというコースなのですけど、そちらは 25 人ぐらいでしたか。

ヴィッカーズ： もともと 25 人ぐらいでしたが、後にヨーロッパ・ユニオンからもらう奨学金がだんだん減って、人数も減りました。

清水： 恐らく最大でも 20 人ぐらいかなということですね。ただ、教育学部の現状から考えると、20 人を受け入れるのはなかなか困難で、現実的には今、本郷先生がおっしゃった 10 人前後になるのではないかと考えております。

陳曦： 留学生は別枠ではないですか。

本郷： 別枠ではありません。考えているのは、先ほどの前期課程修士 43 名の中の内数として考えられると。外国からの学生もいますが、共同学位（ジョイントディグリー）のコースに日本人学生も入りますので、そこも含めて 10 人、あるいはもう少し少ないかもしれません。2 学年になると 20 人になりますので、そこが最大限かと考えています。

清水： では、宝力さん。

宝力朝魯： 本郷先生のお話をお聞きしていて、スライドの「人的体制と予算」というところで一つ教えていただきたいのですが、5 年間の予算として総額 5 億 6300 万円ですが、これはこのプロジェクトを開発するための 5 年間なののでしょうか。それからプロジェクトの開発が終わるとこのプロジェクトは終わってしまうのか、それともこれを安定した共同学位という制度にして、学校運営をずっと続けていくのでしょうか。この辺を教えていただきたいです。

本郷： 総額 5 億 6300 万円というのが、当初の予算です。5 年間でこのプログラムを開発するために 5 億 6300 万円という予算を組んでいます。まずはこの 5 年間だけということです。ただ、今年度の 2011 年度は、予算を計上したとおりにお金が来ていますが、既に来年度は、このプロジェクトの成果の評価とは無関係に、来るお金が 7 割になっています。東日本大震災の関連のこともあって予算が減らされているので、ある程度、教育学研究科の方のお金をここに足して、なるべく計画が落ちないようにと考えています。これは 5 年間だけなので、当然、このプロジェクトを進めていって、ジョイントディグリーで来た学生に対する奨学金などを考えた場合には、別のお金を取ってこなければいけません。別のお金を取ってくるときに、今、考えられている別の二つのプロジェクトがあって、そこに予算を要求して今後のお金を確保することを考えています。隣にいる上埜先生が、今日の午前中の時間、欠席しているのはその会議に出ているからです。今、新たなお金を取ってくる仕組みの会議に出ています。そういう形でお金を確保してこないと、安定的にこれを動かさないことになると思います。

あとは、部局間協定を結んだ大学については、2 名までは学生を授業料無料で引き受けることができるという今の制度もありますので、現行の制度と、新しく取ってくるお金と、現在のお金を組み合わせて、この制度を維持していくことを考えていかなければいけないというのが、現状だということです。

宝力朝魯： もう少し教えていただきたいのは、この 5 年が終わった後、東北大学教育学研究科としては、この制度をずっと続けていくのか、それとも 5 年間で終わってしまうのか。

本郷： 今の計画としては、ジョイントディグリーというところまでうまく到達できるのか、

あるいはダブルディグリーというようなところで5年間で閉じるのかが、ちょっとはっきりしないところがありますが、いわゆる構想しているジョイントディグリーを、5年が終わった後も続けていく、先ほど言った新たな予算を確保しながら続けていくような方策を考えています。5年で終わりではないと考えています。

清水： では、小川先生。

小川： 今回の質問に関係するのですが、昨年度いろいろな学校を訪問させていただいて、一番大きな疑問は、どういう募集単位で募集するのですかということなのです。それは何を意味しているかということ、新しい専攻あるいはコースとして立ち上がるのかどうかという、募集単位です。そこを知りたいという人が、いろいろな大学で多かったです。今、正式には総合教育科学専攻、教育設計評価専攻と2専攻ありますが、将来的には、例えば共同学位プログラム専攻など、何かそういう名前で立ち上がるのかどうか。そうすると各大学は募集しやすいと。東北大学のジョイントディグリーでは10名募集します、8名募集します、そのうち専攻によって何名取りますなど、そういうことまで行くのかどうかを知りたいです。それは先ほどの先生と一緒に、恒常的にいくのかどうかということなのです。

本郷： 小川先生にもその辺を十分検討していただきたいところではあるのですが、これは教授会の検討事項で、教授会の決定を待たないと正式なことは言えないのですが、現在のところ、とりわけ2014年、2015年にこのプログラムをパイロット的に動かすことになっているので、その時点では、取りあえず現在それぞれの講座に所属している先生方に、兼任の形でこのジョイントディグリーのコースを担当していただくというのが、まず第1段階ではないかと思えます。その後、先ほどの質問にもあったように、これを継続していくためには、新たな講座なりコース、あるいは専攻の検討をしていくことが必要になってくるのではないかと考えていますが、今、申し上げたように、これは教授会での決定事項になりますので、そこに諮りながら、相談しながら方向を決めていきたいと思っています。

小川： 要するに、分からないと。できる限り、はっきりさせてほしいというのが、相手方の希望です。東北大学で〇〇専攻を募集しますと向こうに提示できる。要するに、今の質問にあるように、5年でもう終わってしまうのか、今後もきちんと続くものなのか。それによって継続的に学生を送れるかどうかというのが、そうなるということですね。

宮腰： 今回の経費というのは、運営費交付金の特別経費ということになっていますので、この経費のプロジェクトということです。ですから、また4年目あたりに、特別概算要求をして、例えば組織再編・改編という形で、これをさらに拡充していくと。教育学研究科に仮に新しいコースを作る、あるいは新しい教員を配置することになると、また別の形でも文部科学省へお

金の要求をしなければいけません。理想的に言えば、そういった形でまた拡大していったら、例えば、国際教育アジア研究コースなどのコースができれば理想かもしれませんが、それは5年先に、第3期中期目標・中期計画の予定をどのように組むかということともかかわってきます。教育学部あるいは教育学研究科の将来構想にもかかわってきますので、われわれの理想としては、常に大きく拡大していく方向で進めていこうと考えてはいますが、どうなるかは、研究科の小川先生の世代が次に第3期中期目標でこの計画をどう作っていくかにもかかわっていますので、われわれと次の世代とで、いろいろとまた意見交換して進めていきたいと思っています。

清水： それでは、董存梅先生。

董存梅： 私は、ちょっと細かいところに言及したいのですが、修士課程の年数について、先ほど本郷先生は、留学生の場合とこちらの学生が同一であるとおっしゃいました。日本の修士課程の年数は2年ですが、中国の留学生は多分、専門の勉強の前に日本語の勉強をしないといけません。その日本語の勉強には大体1年ほどかかります。1年ぐらいで専門の勉強をして修士論文を書くのでは、ちょっと時間が足りないと思います。中国の修士課程は、通常3年ですが、1年目は日本語の勉強をして、2年目と3年目に専門の勉強をして修士論文を書けば、時間的には良くなると思います。中国の学生もそれを受け入れると思います。すごく細かいことを言いましたが、もし何か参考になればと思います。

本郷： ありがとうございます。ジョイントディグリーやダブルディグリーと考えたときに、例えば2年でやるのか、あるいは2+1あるいは1+2というような形で3年の課程も考えられると思うのですが、昨日、大連科学技術学院の紹介にもあった5年というものと同じように、年数を延ばしたときに、このコースに入ってくる人たちにメリットがあるかどうかというと、その辺のメリットがまだうまく生み出せないような状態です。そうすると、取りあえず日本の今の制度の中での2年というところで運用していくことを基本とする。中国の場合なら3年という形で来てもらってもいいのですが、例えば中国で2年やった後に1年来ていただくということでも可能ですが、基本の構想は2年で考える。言葉の問題が出ていたように、なかなか難しいところがあります。今、考えているのは、サマーコースのような短期のものについては全部英語でやる。長期に来る学生については、英語の授業と日本語の授業と併用、あるいは英語の授業だけでも卒業できる、修了できるけれども日本語の授業も取っていただく形を想定しています。

入る前に一定の日本語の能力を要求すると、入ってくる人がかなり狭まります。日本語だけに焦点を当てていると、なかなか優秀な方が獲得できないので、むしろ英語の能力というところで絞って入っていただく。ただ、入って日本にいる間には、一応日本語の勉強をしてもらう。中国に行ったら、日本人の学生も韓国の学生も中国語の勉強をする、韓国に行った学生は韓国語を勉強してもらうという形で入って、それぞれの国にいるときに語学を勉強してもらうとい

う形で動かしていくのがいいのではないかと、今のところは考えています。事前にそれぞれの国の言葉の獲得がなされてから入る方が、いいことはいいのですが、それには時間がかかりすぎると今は考えています。

清水： 今、お三方から手が挙がったのですが、今の議論とかかわりのある質問でしょうか。そうでなければ、闕さんから。

闕百華： 私も同じく、マスターコースの共同授業について一つ思い付いたことがあります。アジア共通の教育問題というと、すぐ教科書問題が出てきますね。つまり竹島の問題、南京問題などが出てきます。これは歴史問題というだけではなく、文化認識が違うという問題もあります。従って、共通課程の中にアジア社会文化という授業を取り入れたらどうかと考えています。例えば、多くの日本人は「中国人はこうだ」、あるいは留学生は「日本人はこうだ」と一方的に思い込んでしまうことが多いので、異文化交流には、やはり共同授業が必要ではないかと考えています。例えば、私は大学で日本社会文化を教えています。日本人の目から見た台湾はどうなのかについては、自分はあまり詳しくないので、もしこの課程の中で勉強できたら素晴らしいと考えています。

もう一つですが、少子高齢化問題もアジア共通の問題です。少子高齢化が教育に与える影響も、カリキュラムに取り入れたらいいと思います。

清水： ありがとうございます。本郷先生のプレゼンテーションでは、その辺が省いてあったのですが、今おっしゃったようなことはもともとの計画の中には全部入っています。やはりアジアでやるプログラムですから、歴史も含めてですが、アジア的なものは当然カリキュラムの中に書き込まなければなりません。今おっしゃったような問題は、多分、解決できない問題、とても難しい問題なので、最後は統一的な結論に至らなくてもいいのですが、とにかくアジアが持っている多様性を、次の世代が認識することがとても大切だと考えていました。

もう一つの少子高齢化については、最初に宮腰先生が挨拶の中でも触れられていたと思います。具体的にどう対応したらいいかというプログラムはまだできていませんが、われわれはビジョンの中で、少子高齢化にどう対応するのかということも考えています。まだ具体的にはなっていません。ありがとうございます。

では、姜永培さん。

姜永培： 先ほどのヴィッカーズ先生からの四つの質問について、私なりの意見を伝えたいと思います。最初の質問は、もし自分がマスターのときに、どういうコースがあれば参加したいという気になったかという話でした。マスターというと、研究者といっても学部を卒業したばかりで、なかなか研究テーマを決めるのが難しいし、修了した先のことも考えなければいけません。例えば、この共同学位を取っただけで、研究者になろうとするのはどの国でも無理です

ね。それで、教育学部がベースなので、教員になれるかという、それもなかなか難しいと思います。志願する立場に立って考えてみると、ちょっと不安があるのではないかと思います。

二つ目ですが、研究のテーマとしては、個人的にはやはり比較研究の方が、この先を考える時、いいと思います。今の時代、日本に留学したということで、例えば帰国して日本語を教えることになれば、それなりのメリットがあると思いますが、自分の専門の分野を持って仕事をするということになると、やはり教育学や教育社会、教育心理、発達心理など、もっと具体的な研究分野を持たないといけません。仕事をしている大学で、たまたま去年、人事委員会に加わって、新規教員採用に参加したことがあります。大学側の立場やニーズもあるわけです。東アジアの文化で、例えば心理といっても中国、韓国、日本と状況が違ってくる可能性もあるので、それに対する理解のある人、どこでも活躍できる人を欲しがっている面もありますので、そういう方向で考えてもいいのではないかと思います。

もう一つ気になるのは、昨日いただきました報告書を読ませていただきましたが、例えばソウル大学の先生は物理教育がご専門なのですね。宋先生という方です。日本と違って韓国の師範大学は、日本の教育大学に近いです。つまり教科教育がベースなので、ソウル大学、高麗大学の師範大学と組む場合、具体的にダブルディグリーになったときには、恐らく教科教育の先生は、なかなか発言できないと思います。そういうことを考えると、相手のコンタクティングポイントをどちらに絞るか。中国の場合は、陳先生の話の話を聞いていると、師範大学という名称を使っても総合大学ですので、いろいろな選択肢があるわけですが、韓国の場合は、ソウル大学もそうですし、高麗大学もそうですが、師範大学を出た卒業生は、ほとんど教員になります。教授ではなくて、大体は中高の教員になります。もちろん一部は教授になる人もいますが。そうなったときには、志願者はどうなるのかなということが気になっています。

それを考えると、まず、こういう構想があることを幅広く知らせる必要があると思います。そういう面では、やはり学会を使えばいいと思います。教育心理や生涯教育、教育社会などがあるということで、教員や向こうの研究者を経由して、例えば東北大学でこういう素晴らしい計画を構想しているのだと、学生たちに知らせる。一つの大学、例えばソウル大学の師範大学校と、もし教育学部が協定を結ぶことになると、ほかの大学がそういうことに加わるのが難しくなってしまうので、やはり今の段階ではなるべく広く知らせておいた方がいいと思います。昨日も申し上げたように、東北大学でもいろいろと素晴らしい研究をされる先生がたくさんいるということも含めて、どんどん発信すべきだということです。先生方が身内という言葉を使ってくださいましたので、それに甘んじてこういう発言をしています。

もう一つ、MBA コースはよく一般的に運営されています。例えば筑波大学と早稲田大学のMBA が競争しているように、向こうの学生の立場から見て、教育学というのは東北大学しかないかという、そうではありません。日本への留学を考えたときに、東北大学のメリットは何なのか。経費の問題も確かにあります。一応、法人化されていても国立に近いので、私立大学に比べて授業料が安いというメリットは確かにあると思います。もちろん国によっての物価の違いはあるかと思いますが。そうすると、やはり研究がキーワードになってくると思います。



ダブルディグリーを取って、博士コースに進んでもらって、それで研究者の道へということなのです。

昨日も申し上げたように、韓国から日本に留学して研究されている教育学あるいは社会学の分野の先生は、私が知っている限りほとんどいらっしゃいません。ニーズは確かにあります。私も教育部の仕事をしていますし、いろいろなところで国の仕事もしていますが、向こうは、日本のことを知っている研究者がいないので困るとよく言います。言葉が通じるだけではなくて、それなりの専門分野を持っていて、それで評価される研究者の養成です。方向性としては、個人的にはダブルディグリーの次のことも考えて、研究者になってもらえる人を育ててほしいという期待があります。

清水：　たくさんいろいろな意見を寄せていただいたのですが、時間の関係もあるので、まず質問を続けて受けることにいたしましょう。李篠平先生。

李篠平：　私はダブルディグリーについて、自分の意見を発表させていただきたいと思います。今回招かれた人の研究分野といえば、恐らく教育と言語に分かれていると思います。もしそういう学位を設立することになると、まず教育関係の方にとっては、言葉が大きな問題になると思います。外国語専攻の場合は専攻のことも問題になるのですが、大連理工大学外国語学院のことを例にすると、今、修士課程で3年コースがあります。英語言語学と日本語言語学という二つの専攻がありますが、3年コースの1年目で単位の取得が全部終わってしまうのです。そうすると、もし交換という形になると、2年目と3年目、1年半ぐらいは一応、日本に渡ることができません。つまり、その後の2年間は大体、卒業論文の準備の時間になりますが、今の新しい基準としては、どこかの研究雑誌に少なくとも一つ以上論文発表しないと、卒業論文を提出する資格がないということもあるので、日本語専攻の学生にとっては、向こうで資料を集めるのに大変困ってたりします。もし共同でやる形になれば、1年間でも1年半ぐらいでもいいから日本に渡って、資料を集めたり、あとは授業などを受けたりすることができればと思います。教育学部を中心に国際文化でしょうか、言語関係あるいは日本の文化や社会関係の授業も少し受けることができればありがたいと思います。

ただ、一つ、論文指導をどういう形がいいかということですが、3年前に私どもの日本語学部は城西大学と博士コースを作りました。基本的には中国の大学の在職の日本語の教師を対象に募集していますが、年に30名ぐらい集めています。進め方としては、普段の時間で、中国で集中講義をし、夏休みや冬休みに城西大学で勉強する形を取っています。ほとんど集中講義と論文指導という形になりますが、今、大きな問題は授業料の問題です。日本に行って、夏休みや冬休みの1ヶ月ぐらいの間、住むところがないので、民間のアパートを探すのに大変苦労しています。また、いろいろとお金を払わないといけないので、今、何人かの先生が途中でやめたいと思っているようです。そういうことを考えると、将来、長く続けていくためには、やはりいろいろなことを考えていく必要があると思います。授業料はどうなるのか、アパートはど

うなるのか、奨学金はもらえるのかどうか。多分、学生にとって最も関心度が高いのは、来ることができるということ以外に、それもあると思います。

日本語学部の学生は、日本語はほぼ支障はないと思いますので、今 12~13 名いる学生が、もし授業料免除で住まいも提供していただければ、多分、全員が来たいという形になると思います。

ただ、一つ確認しておかなければならないのは、卒業論文の指導のときに、卒業論文はどちらで発表するかです。今までの中国のやり方では、中国の先生から指導してもらわなければいけないというルールがありましたが、これから国際化を推進するという方針があらためて認識されているところで、そういう改革に向かって、どういう新しい意識を持ってやっていけばいいのか、帰ってから委員長や関係者に相談して、報告しながら話を進めたいと思います。

清水： ありがとうございます。先ほど柴山先生の手が挙がっていたのですが。

柴山： 今日ここにお集まりの皆さんは、卒業生ということで、東北大学で学ばれて、すごく立派になってここに集まっていらっしゃるのだと思います。私が東北大学に赴任したのがまだ4年ちょっと前なので、多分、皆さんの方がずっと先輩だと思います。

そのときのことでお尋ねしたいのですが、先生方にとって、日本で学ぶことの魅力はどのあたりにあったのかということです。姜先生からのお話では、何かディシプリンとかスキルとか、きちんとした学問的なものがないと、その後が続かないという指摘だったと思いますが、実は、今のマスターの学生たちの日常生活を見ていると、留学生も日本人学生も、就職活動に走ってしまうのですね。たった2年しかない中で、大学の中に席を置きながら就職活動をして、大慌てで修士論文を書いて出ていくみたいなどころがあります。このジョイントディグリーはマスターの2年ということで、その危険性をすごく抱えているというように私自身は危惧しています。さらに2年たって、その後どういうスキルを付けて、どういう専門性を強調しながら自分のキャリアパスを切り開いていくかといったときに、これからわれわれが作っていく中身のコンテンツがとても重要になってくるなという思いがずっとあります。どなたからでも結構ですが、日本で学ぶ魅力、あるいはそれは韓国、中国、台湾に行く魅力の裏返しになると思うのですが、そのあたりのご意見等がもしあればお聞きしたいと思って手を挙げました。

清水： もし何かあれば。では、姜先生。

姜永培： まずは、ものの考え方の違いを経験できたことがとても良かったと思います。例えば、アメリカなどから留学された研究者と共同で研究する機会はたくさんありますが、日本は、学問という立場からの見方は結構異なっていると思います。そういう面では、とても良かったと思います。私の場合は、日本にも留学しましたし、教員としても4年務めていたので、日本

のこともある程度知っているし、韓国のことも知っているということで、周りから研究の誘いが結構来ます。英語で授業をしてしまうと、コミュニケーションは取れるかもしれませんが、やはり研究という立場から見ると、会話が通じるぐらいであって、概論的な知識にとどまってしまう、研究という領域での議論まではなかなか難しいと思います。そういう面では、日本に留学したということで、いろいろな論文が読めるし、それを自分なりに分析、解釈もできるという面では、とてもいいと思います。

ただし、先ほど申し上げたように、韓国には、日本に留学した研究者が割と少ないです。どちらかというと、言葉あるいは文学、歴史を勉強した方が多いです。学会などの発表も、ほとんどそちらの分野の方で、社会科学系の方はほとんどいないというのが現状ですので、これからはこういうコースを作って、いろいろな人が社会あるいは人間のことについて勉強して、活動してほしいという期待もあります。

清水： 鄭先生。

鄭賢卿： 抽象的な質問になりますが、皆さんは留学生というと、どのような人を想定しているかが質問です。

私の意見としては、大学で職を持っている人も研究者に設定することが大事だと思います。姜先生の意見と違うかもしれませんが、私は成人教育を専攻して、成人というか社会人がいろいろな NPO 団体で活動をする人を見えています。要するに 20 代ではなくて、社会人になってもう一度、自分なりのアイデンティティや専門性を勉強したい人が教育大学院や福祉大学院、平和大学院などに入って、それなりの専門性を高め、自分悩みを学問的に勉強しています。それは新しい就職先のためでしょうか。学校の先生ではなくて、第三セクター、あるいは別の共同的なものを作る人が私の周りには結構いて、私も経験しています。そういうことも念頭に置くと、人数は少ないです。いろいろな国の人が来て、何か共同的な知識を身に付け、研究者以外にも、アジア的な教育機関で働くような人、いろいろと幅広い就職先、あるいは新しい就職先まで考えておけばいいのではないかと思います。

もう一つ、先ほどの先生の質問に対しては、私は最初に自分のことを言いましたが、アジアの中でも、日本は、先進的に資本主義社会を受け入れて、その経験も他の国々より豊富だと思います。それにはいいものもあれば、影もあると思います。勉強になる点もあれば、反面教材にもなります。中国は今、急激な経済成長をしているので、教育問題など、いろいろな問題があると思います。韓国も同様です。そういう問題をすでに経験している日本から解決方法あるいは、考え方を勉強することは、アジアの人にとって、特に韓国人にとって、大事だと思います。

清水： ありがとうございます。では、ヴィッカーズさん。

ヴィッカーズ： 日本語は片言なので、思っていることを話すために、考えなければいけませ

ん。

こういうプログラムは、奨学金がなければ続けることはできません。私たちロンドン大学と、スペインの大学が一緒に行っていたエラスムス・ムンドゥス・プログラムの経験から得た結果です。

先ほど言いましたが、奨学金が減ったので、学生の数も減りました。奨学金は政府から出ます。教育分野のプログラムの奨学金は、会社や別の組織から出るものではありません。政府だけが教育分野のプログラムを支持することができるのです。ですから、日本、中国、韓国、台湾などの政府が、東アジアを中心にするどのような国際的な教育プログラムを支持したいかが、重要な問題だと思います。学生に興味があるかどうかも大切な問題ですが、学生にお金がなければ仕方ありません。日本と中国で、もし二つか三つの国で勉強しようとしたら、諸経費がすごく高くなりますし、いろいろ問題が発生します。例えば、ビザの問題、先ほど李先生がおっしゃったアパートの問題、もちろん授業料の問題もあります。だから、奨学金がなければ仕方ないと思います。

韓国、中国、台湾から来られた先生方は、自分の政府がどのような教育分野のプログラムを欲しがっているか、東アジアを単位とした共同的なプログラムは欲しがるかについて何かご意見はありますか。イメージすることはできますか。

清水： では、李篠平先生。

李篠平： ダブルディグリーのメリットについてお話ししますが、今われわれが直面している問題は、共通性がだんだん高くなり、自分の国だけの視点で解決するのは難しくなったことです。やはり国際意識、国際の視野を持った国際的人材が、研究も含めて社会で求められるようになりました。中国の場合、日本への留学経験者が就職しやすいことはまず間違いありません。企業もそうですが、大学の場合も同じです。実は先日、中国の有名な大学から、私どもの大学の日本語の教師に応募に来た1人の博士号の方がいました。論文もきちんとたくさん書いておられるのですが、ただ、話した日本語は、中国語のような日本語が多かったです。考えてみると、やはり経験がないということも大きなデメリットだったのかなと思います。

もう一つのメリットですが、二つの学位が取れるのはメリットの一つですが、それよりもっと重要なのは、相手の国の言葉、また相手の国の文化の環境に置かれながら勉強や研究ができるということです。そのプロセスの中で経験するカルチャーショックや文化衝突などが異文化の理解力を高め、国際的感覚や視野を広げることにつながると思います。それが何より重要なで、留学経験者にとっては、大きな宝物になると思います。私にとって、メリットはそれではないかと思っています。

清水： 李旭光先生お願いします。

李旭光： 時間の関係で、できるだけ短くしますが、ヴィッカーズさんの話の続きだと思いま

すが、例えば奨学金などが確保できたとしても、このプロジェクトは、何のために作ってきたかということ、私は今、考えています。奨学金があれば、学生は呼べるのですが、日本で奨学金を確保できても、相手国で確保できるかという問題もあります。また、私が一番気になるのは、例えば東北大学の教育学研究科と、中国のある大学の教育学院との共同研究など、交流のプロジェクトとして、今言っているプロジェクトを実施する場合は、両方とも学生を受け入れる体制なのか、それとも日本側が向こうの学生を受け入れることだけを考えているのかです。論理的には両方ともできます。しかし問題としては、例えば東北大学の心理学専攻はレベルが非常に高いので、向こうの学生はみんな東北大学の心理専攻に入りたい。逆に向こうはちょっと弱いので、こちらの学生が向こうへ行くメリットが見当たらない可能性もあると思います。そうすると一方通行になってしまいます。そうすると、ただ奨学金でいい学生を選ぶという結果になってしまうのではないかと思います。こんな複雑なプロジェクトは要らない。ただ、いい学生を選ぶ。私はそのように考えてしまいます。

清水： おっしゃるとおり、多くのダブルディグリーやジョイントディグリーは、学生の流れが一方向的になってしまうケースが少なくなくて、本当の意味での共同学位になっていないケースが非常に多いのが現状です。その辺は今後われわれも研究しなければいけません。では、梁先生お願いします。

梁忠銘： 私は台湾で、大学や高校の再建や、経営の立場など、いろいろ経験しています。今まで 12 年間、四つのマスターコース、一つのドクターコースそれから一つの新しい学科を作りました。私はダブルディグリー、ジョイントディグリーを全部経験しました。実際に今、台湾と日本でダブルディグリーを 4 年間取り組んできました。実績も挙げて、かなり自分でもいいと思って作ったのです。ジョイントディグリーは今年 3 月、びわこ成蹊スポーツ大学と協定を正式に結びました。

私どもはダブルディグリーを仙台大学と一緒に取り組んでおりますが、今、東北大学に在学している頼さんは仙台大学の最初の交換留学生でした。それから日本が好きになったのです。

言いたいことは、ダブルディグリー、ジョイントディグリーを両方一緒にやっても別に問題ありません。どれが望ましいのかは、やってみればわかります。お互いの大学でやればすぐにできます。そんな難しいことは何もありません。それぞれの国にそれぞれの事情があります。一気に一つにまとめようとする、すべての問題が出てきます。例えば、私どもは小さい大学ですが、マスターの在學生は、教育学科だけで 100 名ぐらいいいます。昨日上埜先生から聞かれたのですが、資金はこういうところから出ます。5 名の博士課程の學生が 15 名ぐらいの修士課程の學生を指導しています。どのようにきちんとしたプログラムを組むかが大事だと思います。有名なプログラムを、そんなに考える必要はないと思います。とにかく、住まいさえ確保すれば、その後の詳しいこと、なおかつかなりの優遇措置があれば、小川先生もおっしゃったのですが、はっきり向こうに情報を伝えることが大事ではないかと思います。

それから、われわれがどのような学生を東北大学へ送るのか院生の選抜は、まず、留学の意欲が強い人です。昨日も申し上げましたように量だけではなくて、やはり質です。留学を希望する学生は、独立性があるのかどうか、また人間性がいかに悪いかを見ます。言葉は、意外と要求すると難しくなります。要するに発展性のある学生であれば、日本語がきるかどうかは問題ではありません。昨日も確か清水先生がおっしゃったのですが、専門性があれば仕事ができるということと全く同じことです。

いい学生を送って欲しいならばできるだけ早くはっきりした募集の条件を出せば問題ないのではないかと考えています。

もう一つ、東南アジアの共同学位で、先ほど聞いてびっくりしたのですが、東北大学のような素晴らしい大学で定員割れというのは、われわれには考えられないことです。いろいろ考えさせられます。これからどのような学生を募集するのか、やはり入り口を考えなければいけないと思います。入り口をいかに広げて、どんどんいい学生を入れて、それから出口を考えるとということです。最低限の要求、例えば、入学する時は、何でもいから、英語、日本語、北京語、とにかく優秀な人に基本だけ要求して、出口をきちんとする。例えば卒業するまでに日本語1級を取らなければいけないと決めた方がいいのではないかと考えています。

あるいは、日本の新しい学期は4月1日からで、ほかの国と違います。われわれ東南アジアは大体8月、9月です。その半年の期間をどうすればいいのか。やはり最初の半年ぐらいで、日本語の基本や基礎をあらためてしっかり教え込む方が、全体的なプログラムがやりやすいのではないかと考えています。

取りあえず、このプログラムにはかなり意味があります。私が見て、まだこういうものはないなと思って、うまくいくのではないかと喜んで喜んでいます。

清水： ありがとうございます。予定していた時間を過ぎてしまったのですが、ほかによろしいでしょうか。では、陳先生お願いします。

陳曦： このプログラムは東アジアにおける、国際的教育指導者の養成を目的としていますが、そこで必要とされる人材を、先生方は3種類挙げられています。教育研究者、教育行政関係者、リーダー教員です。最初の二つの、教育研究者や行政関係者などの政策立案に携わることができる人材には、やはり修士段階だけではなかなかないと思います。今、日本でどうなっているかよく分かりませんが、少なくとも中国でそういうことに携わるためには、これからは修士学位では無理だと思います。できるのは、リーダー教員の養成ではないかと思っています。最近、日本企業が中国にたくさん進出していますし、日本にも中国人がたくさんいます。上海の日本人学校は既に世界一生徒数が多いです。その生徒たちは、日本に戻ることもあれば、中国で勉強することもあります。逆に中国人の子どもたちも、行ったり来たりする場合がありますので、教育現場で教育の実践を担うことのできる人材を養成するのがいいのではないかと私は思っています。

このプロジェクトを進めるには、まず教員側のお互いの理解を深めることも大事ではないかと思います。多分、日本人の先生方は、これまで欧米志向というか、主に欧米に目を向けていました。今、東アジアにより目を向けるようになってきていますが、中国の大学がどうなっているか、よく分かる先生もいらっしゃるし、あまり分からない先生もたくさんいると思います。5年間の計画なので、共同研究などから始めるわけにはいかないかもしれませんが、同時にそういうことをやって、まず先生方の共通の理解があって、それから進めた方がもっとやりやすいのではないかと思います。関心が異なっていると、話もなかなかうまくみ合わないと思います。

清水： 至極まっとうなご意見をいただきました。ありがとうございます。陳先生に言われたことは、実はわれわれも課題として認識しておりまして、どうしても欧米志向で、アジアの方に目を向けてこなかったということがあります。それから研究交流も、アジアの大学とはまだまだ始まったばかりです。そういう意味で、今回お呼びした先生方と、今後とも一緒に共同の研究や、あるいは可能であれば共同で教育のプログラムの開発を心掛けていきたいと思っています。ありがとうございます。

さて、予定していた時間が過ぎたのですが、もしほかにご意見がなければ、最後にプロジェクトリーダーの本郷先生から挨拶をお願いいたします。

本郷： この2日間、先生方どうもありがとうございました。振り返ってみると短い時間だと思えますが、われわれのアジア共同学位開発プロジェクトと関連する情報の提供と、プロジェクトに対する意見をいただいたので、それを参考にプロジェクトについて考えていきたい、あるいは進めていきたいと考えています。

この2日間の議論の中でも出ていたように、ジョイントディグリーにしる、ダブルディグリーにしる、メリットと同時にデメリットも当然持っています。例えば、デメリットとしては、規模の割には手間が掛かります。ご指摘がありましたように、専門性の確立が逆に難しくなるのではないかと、ということもあるかもしれません。あるいはヨーロッパのエラスムス・ムンドゥスの中でも一部指摘されているように、カリキュラムをある程度統一していく、共通化していくことによって、それぞれの大学が持っていた、あるいは研究科が持っていた独自性が失われてくるのではないかとという危惧があります。

一方で、長所も当然あって、昨日も申し上げたように、大学院の質の向上を、このプロジェクトあるいはジョイントディグリーを通して目指すことができるのではないかと考えております。それはわれわれ自身の研究の発展、あるいは教育の発展、大学院生の研究の発展にもつながるし、そのことによって、優秀な学生の確保にもつながっていくという長所があるのだらうと思います。長所と短所を両方見つめながら、どうしたら魅力のある国際化、質の高い国際化というようなことを通じたジョイントディグリーができるか、これからわれわれは考えていかなければいけないのだらうと思います。昨日、あるいは今日もそれをお聞きして、それぞれ

の大学で、それぞれの国際化の試みがなされていて、これだけいろいろなことがやられているのかと、あらためて勉強しました。ただ、どれがきちんと残っていく国際化で、何がなくなっていく国際化なのか。われわれのことも含めて、もう一度きちんと検討しなければいけないのではないかと思います。

そういったところでプログラムを考えていくときに、アジア共同学位、それからとりわけ東アジアに焦点を当てた共同学位であることが、われわれの共同学位の特徴です。今日も意見が出ていましたが、グローバル化と言いながら、本当にグローバルになっているのか。地球全体が考えられているのか。狭く考えても東アジアのことが考えられたようなグローバル化がこれまでなされてきたのかという反省も踏まえて、もう一度、東アジア諸国が抱える共通の問題を考えなければいけません。先ほどの少子・高齢化、それから2年前に行った留学生を招いて行ったシンポジウムのディスカッションでも出ていた高学歴で大学院を出ても就職が必ずしもないという状況で、台湾などでもなかなか厳しいと。それから今日ご指摘いただいた教科書の問題や文化の問題といった共通の課題を持っています。共通の課題を持っているアジアという同じ地域でありながら、制度的、文化的なところでは多様性も持っています。われわれはその多様性を十分に認識しながら、教育や研究をしていかないといけないのではないかと、あらためて気付かされました。

今日の質問にもあったように、この5年間だけではなくて、その先も続けられるような、持続可能な制度の設計をしていかなければいけないと思います。そのためには、一つはどのような内容にして魅力あるカリキュラムを作るか。もう一つは環境の面で、奨学金や授業料、あるいは住居のことも含めて、継続的に資金を獲得しながらどのようにやっていくのかという二つの側面をしっかりと考えながら、これから進めていきたいと思っています。

今後とも、皆さんの意見をいただきながら、このプロジェクトの成功あるいは教育学研究科の発展を進めていきたいと考えています。どうもありがとうございました（拍手）。



# 資料編

## 資料 1

シンポジウム招へい者一覧

## 資料 2

報告資料 (パワーポイント)

## 資料 3

写真集

## シンポジウム招へい者一覧

- |   |      |    |         |
|---|------|----|---------|
| 1 | 李旭光  | 中国 | 大連科技学院  |
| 2 | 李篠平  |    | 大連理工大学  |
| 3 | 陳 曦  |    | 華東師範大学  |
| 4 | 董存梅  |    | 河北師範大学  |
| 5 | 宝力朝魯 |    | 内蒙古師範大学 |
| 6 | 姜永培  | 韓国 | 大邱韓医大学校 |
| 7 | 鄭賢卿  |    | 慶熙大学校   |
| 8 | 梁忠銘  | 台湾 | 国立台東大学  |
| 9 | 闕百華  |    | 私立淡江大学  |



## 資料 2

### 報告資料（パワーポイント）

- 資料 2-1 基調講演 アジア共同学位開発プロジェクト：  
東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究
- 資料 2-2 講演 1 中国大連科技学院における学位取得の多様化
- 資料 2-3 講演 2 中国大連理工大学の国際化について  
—中国の大学の国際化を踏まえて—
- 資料 2-4 講演 3 韓国における私立大学の国際化の現状と対応  
—大邱韓医大学校を事例として—
- 資料 2-5 講演 4 華東師範大学における国際化の歩み  
—実質的な交流を目指して—
- 資料 2-6 講演 5 日中における共同学位開発の展望  
—中国河北師範大学の状況に基づいて—
- 資料 2-7 講演 6 台湾高等教育の国際化に関する政策と現状について
- 資料 2-8 講演 7 台湾における高等教育の国際化  
—私立淡江大学の国際化戦略—
- 資料 2-9 講演 8 長所を生かす高等教育の国際化を目指して
- 資料 2-10 講演 9 慶熙大学の新たな挑戦と世界市民教育



国際シンポジウム 2012.3.28  
東アジアにおける高等教育の国際化

## アジア共同学位開発プロジェクト Asia Joint-degree Project

(東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究)

東北大学大学院教育学研究科

プロジェクト・リーダー 教授：本郷 一夫

### 共同学位開発の構想

国際水準のアウトカムの質保証

連携大学との協議を通して、大学院教育の質を保証し、質の高い教育指導者を養成する

- 単位認定基準の明確化
- タームペーパー・修士論文の質の共同管理・質保証
- ポートフォリオによる学習歴の管理

研究・教育交流の深化

**研究者交流：研究上の交流に加えて、教育上の交流**  
— 共同学位プログラムの共同開発により研究者のネットワークが深化する

**学生交流：日本人学生の意識変革**  
— アジア諸国の学生との共同の学びを通して、世界に目を向ける次世代リーダーを育てる

**ネットワーク形成：国境を越えた人的ネットワークの構築**  
— 人的ネットワークを形成するには、単位互換や短期留学よりも、共同学位が有効

### なぜ東アジアなのか？

急成長する東アジア 膨張する留学需要

留学需要の急成長が見込まれる東アジア  
爆発的な増大が見込まれるアジア地域の留学生 200万人(2010年)から500万人(2025年)に

多文化共生社会の創成・新しいアジアの時代に向けて  
共通の教育課題と多様性。日本・中国・韓国・台湾などの地域とASEAN10ヶ国+α

東アジア及びASEAN諸国と連携しながら東アジアの次世代リーダーを養成  
東北大学の留学生の8割はアジアから

東北大学の留学生 出身地域別割合 2009年調査 (単位%)

- アジア 62.6%
- ヨーロッパ 22.4%
- 北米 12.4%
- その他 2.6%

### どのような国際的教育指導者なのか？

これらの課題に応えるためには

- 必要とされる人材**
  - ・教育研究者：東アジアの教育の現状を的確に分析できる人材
  - ・教育行政関係者：東アジアを中心に世界の教育改革を視野に取め、政策立案に携わることのできる人材
  - ・リーダー教員：東アジアの教育課題を認識し、教育現場で教育実践を担うことができる人材
- 必要とされる資質と能力(KASP)**
  - ・高度な専門的な知識 (Knowledge)
  - ・アジアに対する理解と共感 (Attitude)
  - ・研究技法と言語「英語+英語+α」(Skill)
  - ・世界に開かれた人的ネットワークの形成と情報発信(Practice)

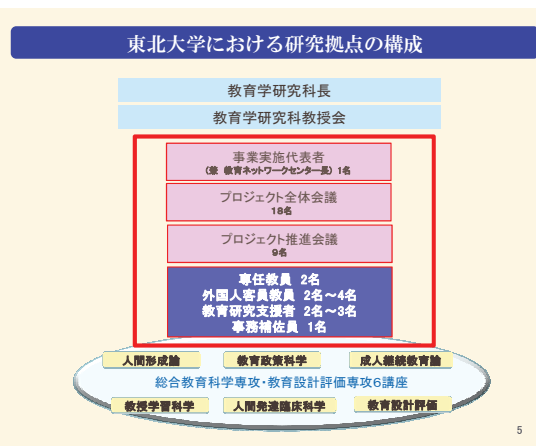
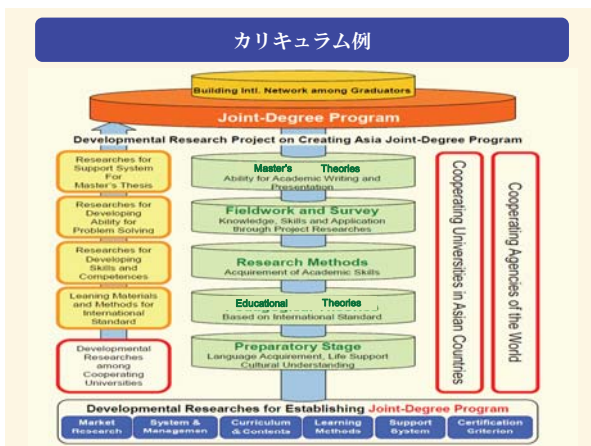
人材育成の現状：2極化  
「知識」と「能力」の両方を具え、アジアに熱心を持つ人材育成が課題

国際流動性  
UNESCO等の国際機関職員  
東アジアにおける国際的教育指導者  
教育研究者  
教育行政関係者  
リーダー教員  
教員

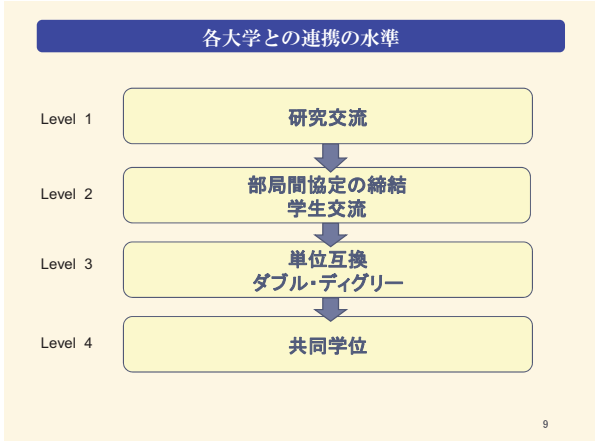
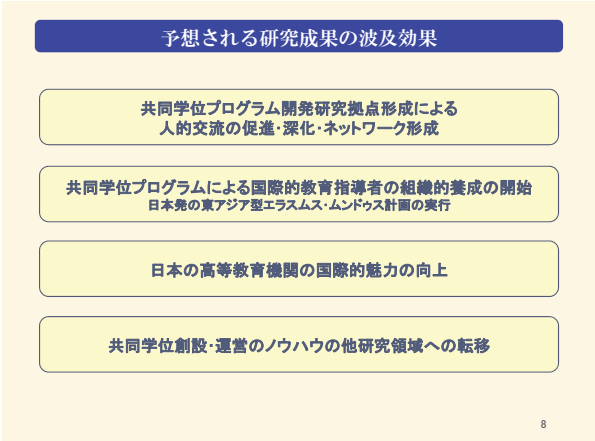
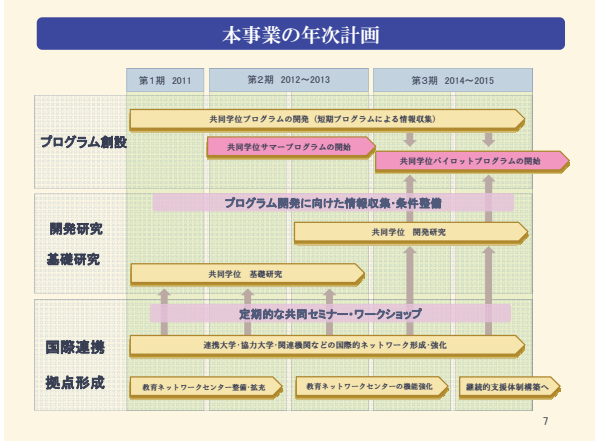
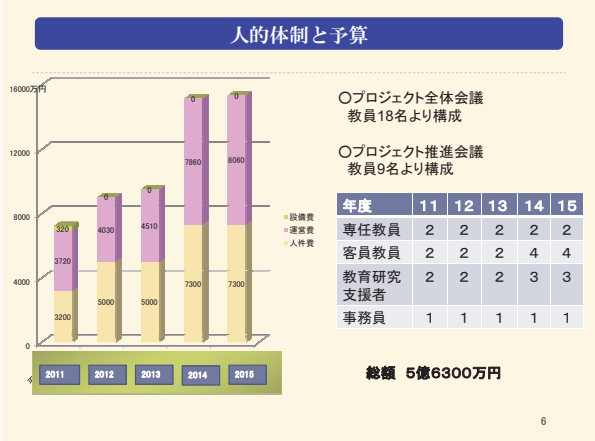
現状では、こうした人材を養成するシステムは皆無

- 教育行政関係者、リーダー教員は、国内に閉ざされた養成システム
- 教育研究者、国際機関職員は、基本的に欧米で養成・リクルートされるシステム
  - ・欧米志向が強く、東アジアへの関心は弱い
  - ・教育研究者の場合、東アジアの現実課題に対応する人材養成システムは弱い
  - ・国際機関職員(教育職)のメイン・ストリームは開発教育が主で、東アジアのニーズとミスマッチ
- 現状では、東アジアの教育課題に応じる国際的教育指導者養成プログラムは皆無

東アジアを拠点として、東アジアの教育をリードする教育研究拠点形成は喫緊の課題



資料 2-1



大连科技学院

## 大連科技学院における学位取得の多様化

中国大連科技学院 李旭光  
2012年3月28日

李旭光

2012年3月

大连科技学院

## 一、近況報告

1. 自己紹介
2. 所属大学の紹介
3. 研究内容

2012年3月

大连科技学院

## 二、本学の国際化等について

- 1、ライト国際学院の成立とその経緯
  - 2011年アメリカライト州立大学と国際交流がスタート
  - 本学がライト国際学院を設立
2. 交流内容
  - (1)本学で勉強し、ライト州立大学の学位を取得

2012年3月

大连科技学院

- (2)直通式の修士過程に進学
  - 本学で本科教育、ライト州立大学で院生教育
  - 入学時点で願書を提出
  - 特別なカリキュラムを編成
  - ライト州立大学が教員を本学に派遣し教育活動に参入
  - 試験に合格する者はライト州立大学の修士課程に進学

2012年3月

大连科技学院

## 三、本学のダブルディグリー等について

1. 2008年から「ダブル専攻」を実施
  - (1)その背景
 

情報化時代と産業構造の変化によって時代のニーズに応えられない
  - (2)パターン
    - 四年制で学生を募集し、五年制を実施
    - 実施専攻は情報関係の専攻
    - 入学時点の専攻＋副専攻
    - 卒業証書に副専攻を提示

2012年3月

大连科技学院

2. 2011年から五年制の学生を募集
  - (1)教育管轄機関が五年制の学生募集を認可
  - (2)大学入学試験段階に五年制でホームページとパンフレットで情報を流す
  - (3)現段階で三つの専攻に限定
    - ソフト開発専攻＋日本語専攻
    - 会計専攻＋日本語専攻
    - 機械設計専攻＋英語専攻

2012年3月



大连科技学院

●カリキュラムに置ける単位数はほぼ半々

4. 卒業証書に二つの学位と専攻を記載

5. 問題点

(1)卒業時点で就職が保障できるかは親の心配

(2)社会のニーズをよく把握すること

2012年3月 6

大连科技学院

四、本学のサマープログラムとインターシップについて

1、海外での語学の実習

日本の諸教育機関と連携し、夏休みを利用して語学の研修を強化(例東京吉岡教育)

2、企業での教育実習はほぼ義務化される

専攻によってそれぞれの会社と契約し、「実習基地」を設立し、学生の実践力を強化。現在、本学は15の「実習基地」を保有

2012年3月 7

大连科技学院

3. 構内でトレーニングセンターを設立し、企業での実習を補足

2012年3月 8

大连科技学院

谢谢!!!

2012年3月



## 中国大連理工大学の国際化

—中国の大学の国際化を踏まえて

大連理工大学  
李 篠平  
2012.3.28

### 日本の大学にある孔子学院一覧

NO	設立年	設立大学名	提携校
1	2005年	立命館孔子学院	北京大学
2	2006年	桜美林大学孔子学院	同济大学
3	2006年	北陸大学孔子学院	北京語言大学
4	2006年	愛知大学孔子学院	南開大学
5	2007年	立命館アジア太平洋大学孔子学院	北京大学
6	2007年	札幌大学孔子学院	広東外語外貿大学
7	2007年	大阪産業大学孔子学院	上海外国語大学
8	2007年	岡山商科大学孔子学院	大連外国語学院
9	2007年	早稲田大学孔子学院	北京大学
10	2008年	工学院大学孔子学院	北京航空航天大学
11	2008年	福山大学孔子学院	上海師範大学・对外經濟貿易大学
12	2009年	関西外国語大学孔子学院	北京語言大学

2

## 一.中国の大学の国際化

○1978年～2007年、外国への中国人留学生は106.7万人。うち27.5万人は帰国。

例：2005年度の国家自然科学賞の第一取得者は73.7%、中国科学院の81%のアカデミー会員、国家教育部所属の大学のリーダー的人物は80%、大学の博士指導教官の2/3は留学帰国者。

○現在、世界184カ国や地域および国連と協力関係を結んでいる。

○孔子学院の誕生、中国語と中国文化の教育機関。世界に200校、日本には12校。

1

## 一.中国の大学の国際化

### 1.大学の国際化への挑戦

#### ①外部世界からの挑戦

○外国の大学は中国で優秀学生の争奪戦を展開。中国の高等教育は厳しい国際化の挑戦に直面。

#### ②対策

○先進国の一流大学と提携、シラバス、カリキュラムを改革。

○教員同士の相互派遣を推進。

○外国の研究機関と共同研究を展開。

○大学生を外国へ留学に派遣。

○外国人教員の招聘制度・留学生の受け入れ制度を改革。

3

## 中国地図

中华人民共和国地图



4

## 二.大連理工大学の国際化

### 1.大連市の紹介

○大連市は大陸から渤海と黄海の境目に着き出した遼東半島の先端にある。

○680万人、「世界で最も安全な都市」に選ばれる。

○日本と文化的に似ている、住みやすい街。

○日本人学校、日系銀行など生活に必要な環境が整えられ、日本語を話す人材が豊富。

→日本留学から帰った中国人が多い。

○主な産業は石油化学、造船、現代設備製造、電子産業基地と物流。

5

## 二.大連理工大学の国際化

### 1.大連市の紹介

- 1984年から外資の進出が本格化。外国企業 13,168社、日系企業 4012社。
- 各種金融機構が2270ヶ所、150カ国と地域と決済ネットワークを築いた。
- 外資金融機構は21社、外資保険会社は2社、外資保険会社の事務所は5社有して、東北地域で外資銀行が一番集中する街。
- 外国語、特に日本語のできる人材がよく求められている。

6



## 大連にある大学

### ○大連には24の大学

- 大連理工大学、大連海事大学
- 大連医科大学、東北財經大学
- 大連科技大学、大連交通大学
- 大連水産学院、大連外国語学院
- 大連大学、遼寧師範大学
- 大連民族学院、大連工業大学
- 海軍大連艦艇学院、東軟信息学院など

9

## 二.大連理工大学の国際化

### 2.大連理工大学の紹介



10

11

## 二.大連理工大学の国際化

### 2.大連理工大学の紹介

- ・ 1949年に成立した国立大学。理学と工学を中心に経済、管理、文学、法学などの文系も設立された総合的な重点大学。
- ・ 22の学部にも60の専攻と4つのダブル学位があり、学生は成人教育を含めて8万人。
- ・ “211プロジェクト”と“985プロジェクト”に指定された大学。
- ・ 「21世紀に求められる複合的なエリート人材を育てる」のは目標。

12

### 211プロジェクト

1993年、21世紀へ向けて社会発展の中で生じる問題を科学技術力によって解決できる専門人材の基盤を構築することを目標に、100校前後の大学と重点学科を集中的に整備していくことを決定。1995年に国家プロジェクトとして正式に始動。2010年2月、112の大学が対象校に指定。

### 985プロジェクト

世界一流の大学の構築を目指す国家プロジェクト。北京大学、清華大学等の一部の優秀な大学に国家予算を集中的に投入。2010年2月まで、39校が対象校。

13

## 二.大連理工大学の国際化

### 3.教育の国際化

教育の質を高め、国際的にもレベルの高い大学教育システムを作るために、教育拠点を開設、共同運営を行い、外国の先進的な教育理念と管理制度、プログラム設置、教育内容・方法を直接に導入。

- A. 学者や教授を招聘、教育・管理へ参加。
- B. 外国語の授業や専門科目を担当、院生を指導。

14

## 二.大連理工大学の国際化

### C.外国の大学に教員や学生を派遣。国際意識の養成は目的。

2008年～2010年、50の国家と地域に長期留学教師や学生、短期留学生を3500人派遣。学生の交流活動は5種類、50項目、2008年から1400名の学生が外国の大学へ留学に派遣。

15

## 二.大連理工大学の国際化

### D.留学生受け入れ体制の整備

- 留学生センターの設立。
- 1993年～2011年、70カ国から5000名留学生を受け入れた。
- 現在、650人在籍。日本人留学生は70名ぐらい。卒業後、日系企業に就職する人が多い。

16

## 二.大連理工大学の国際化

### E.国際化基金が設立

2006年「大連理工大学国際化基金」を設立。

- A. 海外学者の短期来訪、大学教員の海外研修、学会の参加支援、国際シンポジウムの主催および協定大学の学生来訪支援に専用経費。留学生奨学金制度も設立。
- B. 国際交流基盤を作り、外国の大学と教育・研究資源を分かち合い、協働枠組みを構築。

17

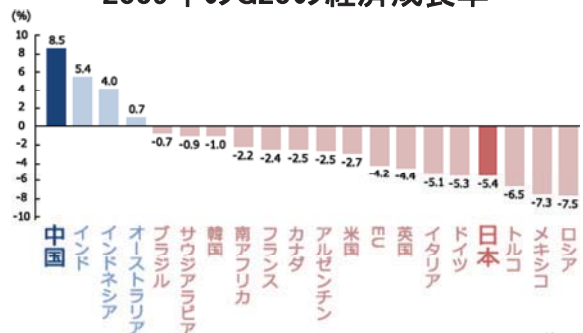
## 二.大連理工大学の国際化

### 4.今後の課題

- 教授同士の共同研究の展開と共同研究の長期化
- 協定校の退官教授同士の交流
- 留学生の相互派遣制度のアンバランス  
中国語のできる日本人が少ない

18

### 2009年のG20の経済成長率



19

## 中国語ブーム

- 中国語を学ぶ人口は約4,000万人。
- 欧米での中国語学習者も急増、フランス語・スペイン語に次いで3番目。
- 日本でも中国語の学習人口は200万人を突破。
- 日本企業が海外進出を進め、海外拠点の設置・運営に必要な人材が約7割不足。
- 今後の海外拠点の中国への進出、そのための人材確保に中国語のコミュニケーション能力の高い人材が求められる。
- 能力の評価指標として、大学の入学者選抜基準や卒業条件、企業の採用・昇進・昇格基準として活用される機会もますます多い。

20

## 二.中国の大学の国際化

### 5.国際化についての展望

- 温家宝総理によると  
「国運の興亡は教育にあり、一流の教育がある一流の人材が生まれ、一流の国が建設される」
- 先進的な教育理念を確立、伝統的観念と体制の束縛を打ち壊し、大学の運営体制、教育内容、教育方法、評価方式の面で大胆な模索と改革を行っていく

21

ご清聴

ありがとうございました。

## 韓国における私立大学の 国際化の現状と対応

-大邱漢医大学校を事例として-



大邱漢医大学校  
青少年教育相談学科  
姜永培

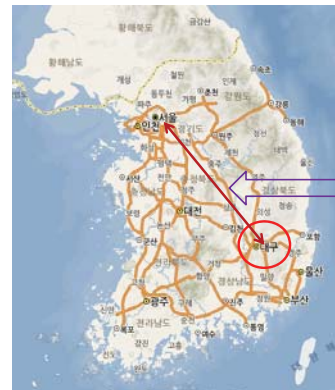
2012. 3.28 - 29 Tohoku University Japan

## 自己紹介

- 専門分野: 若者論、比較政策論、若者福祉
- 所属: 大邱漢医大学校 青少年相談学科
- 在学期間: 1999年～2004年(指導教官: 高橋満先生)
- 経歴: 韓国 極東大学校(社会福祉学部)(2006年～2007年)  
日本 尚綱学院大学(現代社会学科)(2007年～2011年)  
2011年～現在(青少年教育相談学科)

## 学校紹介(概要)

- 学校名: 大邱(デグ)漢医大学校 (4年制総合大学)
- 所在地: 慶北尚道 慶山市
- 設立年度: 1980年度
- 学生数: 7,032名(大学院生を含む) (2011年現在)
- 留学生数: 144名(中国、ベトナム、日本など) (2011年現在)



KTX  
1時間50分

## 韓国における大学国際化の背景

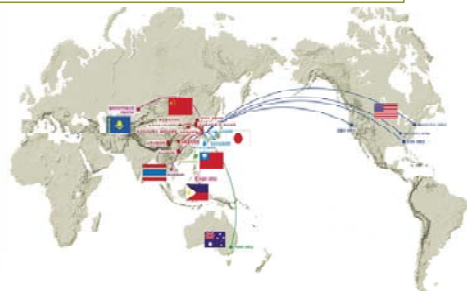
- 1990年代中盤から国家政策として国際化を推進
- 1994年から『大学総合評価制度』を導入
  - 大学情報を外部に公開
  - 大学教育の国際化を評価項目に包含
- 大学国際化の段階
  - 語学力(英語、国内)→海外経験(語学研修、交換留学など)→専門知識(短期→長期、大学院→学部又は小学校)
- 企業のニーズが大き(グローバル・スタンダード)(国際競争力の強化)
- 大学の国際化は受験生の大学選択の情報(材料)として活用

国際化は選択で  
はなく必須

## 大邱漢医大学校国際化の取り組み

- 交換留学生制度
- 海外インターンシップ
- 語学研修(経費を一部を大学が支援)
- 複数学位(Double Diploma)制度
- World Explore Program 等

## 大邱漢医大学校の国際交流の現状



10ヵ国 29機関

## 大邱漢医大学校国際交流の内容

プログラム	国	大学名
語学研修	アメリカ	Eastern Kentucky Univ.
	アメリカ	Valdosta State Univ.
	イギリス	University of Derby
	中国	Ocean Univ. of China
	フィリピン	Asia Pacific College
海外 インターンシップ	カナダ	University of Victoria
	中国	Ocean Univ. of China
交換留学生	アメリカ	Eastern Kentucky Univ.
	日本	大阪教育大学
複数学位	中国	Sichuan Normal Univ.

## 国際交流の詳細内容

## ● 国際交流プログラム

- 目的: 語学力の向上、異文化体験 など
- 期間: 1学期または1年
- 派遣大学: Eastern Kentucky Univ. 湖南師範大学、大阪教育大学、福岡県立大学
- 大学の支援: 授業料を本校に納付
- 単位認定: 受講科目の内容によって各学科が決定
- 奨学金: 交付なし

## 国際交流の詳細内容

## ● 海外現場学習制度

- 期間: 6カ月
- 派遣大学: University of St. La Salle, University of Victoria、四川師範大学
- 大学の支援: 授業料の一部を補助(100万ウォン)
- 単位認定: 派遣大学で取得した単位を全部認定
- 奨学金: なし
- 志願条件: 語学力(英語、中国語など)、学校成績など

## 国際交流の詳細内容

## ● 語学研修

- 期間: 6カ月～1年
- 派遣大学: Eastern Kentucky University
- 大学の支援: 派遣大学での授業料全額を補助
- 単位認定: 英語成績によって単位を決定
- 奨学金: なし
- その他: 毎年20名程度が参加

## 国際交流の詳細内容

## ● 複数学位(Double Diploma)

- 内容: 本学で2年間以上修学、派遣大学で1年～2年間修学
  - 両校の卒業条件を満たした場合学位を付与
- 派遣大学: Eastern Kentucky Univ.、四川師範大学
- 大学の支援: 授業料の半額を補助
- 派遣条件: 教養科目を履修、語学力、70単位以上履修
- 実績: アメリカの大学で5名、中国の大学で3名(2006年度)が学位を取得(2007年度)

## 国際交流の詳細内容

- 海外インターンシップ
  - 派遣期間:アメリカの企業(経営、金融、貿易、建築、電子情報、衣類分野などの民間企業、教育機関、公共機関など)
  - 大学の支援:奨学金の名目で150万ウォンを補助
  - 派遣条件:2年生以上、語学力
  - 実績:5名(2007年度)
  - 派遣時期:年2回(8月、2月)

12

## 東北大学留学時代の思い出

- 留学のきっかけ:韓国 大学の先生の紹介
- 三条町(国際交流会館)
- 牛越橋での芋煮会
- ゼミの合宿
- 中坊公平先生(弁護士)の後援会、豊島産業廃棄物問題
- サッカー、テニス

13

## 東北大学の国際交流について

- 積極的な情報の発信(特に、文系、研究分野)
- 長期プログラム(留学など)の実施、運用
- 受け入れ態勢の整備(英語授業など)
- 卒業生との繋がり、ネットワークの構築
- 国際レベルでの学者、研修者同士の共同研究

14





## 華東師範大学における国際化の歩み ——実質的な交流を目指して

華東師範大学高等教育研究所  
陳 曦







- 2006 ■985プロジェクト大学に
- 1996 ■211プロジェクト大学に
- 1986 ■大学院成立
- 1959 ■16校の重点大学の一つになった
- 1951 ■大学創立




特色:

- 研究
- 総合的
- 教員教育

1

2



3




### 大学の教員と学生

- > 3889 Faculty
- > 544 Professors
- > 738 Associate professors
- > ( 39 Foreign Professors)





Over 28000 Full-time Students

- > 9106 Graduates
- > 14803 Undergraduates
- > 4344 Overseas Students  
(865 Diploma Students)

5

### 大学の理念

- Creativity(知恵の創造と獲得),
- Character(品性の陶冶),
- Community(民族と社会の発展).

——初代学長孟憲承



6



### 発展戦略

- Innovation
- Interdisciplinary
- Internationalization



7



## 二、華東師範大学における国際化

### これまでの主な国際交流の道

- F-教職員の交流
- S-学生の交流
- D-共同学位プログラム
- R-共同研究
- A-学术交流
- I-資料情報交流



8


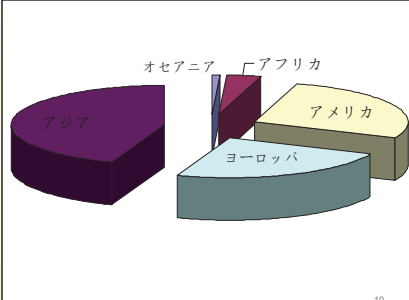


- 世界の150以上の有名大学や研究所との国際交流。
- 150余名の外国人学者が名誉教授或いは顧問教授になった。
- 毎年800名以上の学者が研究や講演などのため大学を訪れる。
- 毎年30回以上の国際会議を主催する。



International Collaboration In General

9

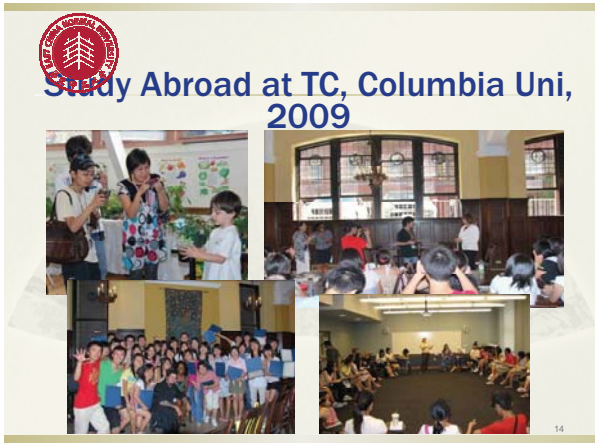



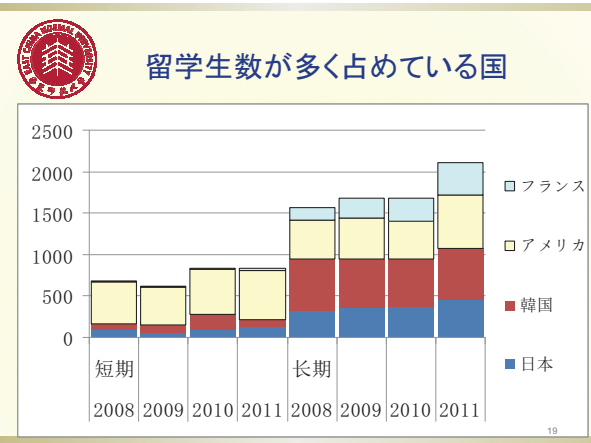
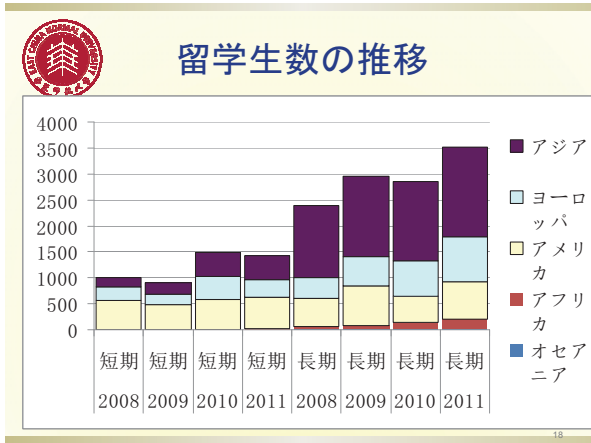
北アメリカ  
ヨーロッパ  
オーストラリア  
アジア

オセアニア アフリカ  
アメリカ  
ヨーロッパ

10







**学部レベル:**  
 目的: 交換や交流を通して国際視野を持つ学生の競争力を高める  
 目標: 25%以上の学生が交流経歴を持つ

**大学院レベル:**  
 国家留学基金委員会の計画を利用し、現在38の海外大学が博士課程の学生を受け入れている。

### 孔子学院

- New York
- Chicago
- Iowa
- Central Arkansas
- Oregon
- Torino

### フランスのエコール・ノルマル・シュペリウールとの共同養成

- 2002年からスタート
- 2005年から連合大学院誕生
- 修士プログラム: 毎年30-40名の学生、過去8年で152名が修士学位を取得
- 博士プログラム: 毎年12-16名の学生、85名の学生がフランスで博士課程の勉強、うち34名が博士学位を取得

Mathematics	Environmental Science
Physics	Cognition
Chemistry	Computer Science
Life Science	Economics
European Studies	Education
	Languages

Building a Strategic Partnership

### 三、上海ニューヨーク大学 NYU-Shanghai



## ニューヨーク大学の概況

- 1831年に創立
- 2010年の在学者数は39403人
- 研究型私立大学
- AAUグループのメンバー
- 2010年のアメリカ大学ランキング:
  - 総合32位、金融学部2位、国際ビジネス2位、在職MBA2位、法学院5位、応用数学(大学院レベル1位)
- 32名の教員がノーベル賞獲得



## 連携の背景

- 2002年から交流を始め、数回博士課程のサマースクールを開催した。
- 2006年にニューヨーク大学の中国キャンパスの設立によって、華東師範大学で、国際教育センターが設立され、国際教育パークという考えが生まれた。
- 2008年6月に、ニューヨーク大学から共同併学の意向書を受けた。



25



## 連携の背景

- 2008年10月から翌年の9月に渡って、上海市と浦東新区のトップが数回協議し、共同併学の枠組みが出来上がった。
- 2009年11月、副市長がリーダーとする委員会が設立された。
- 2010年4月、NYU-Shanghaiを作る協議書に二校がサインした。
- 2010年5月、教育部の専門家が大学を考察した。
- 2011年1月、教育部の許可を得た。



26



## NYU-Shanghai

- 2006年、NYU Shanghaiセンター
- 2011年3月28日、NYU-Shanghai, Ground-breaking Ceremony



27



- 場所: Lujiazui Finance & Trade Zone
- 初めての中美共同建設大学
- 独立法人格を持つAn independent legal entity
- 全世界から3,000名ほどの学生



28



## 目標及び位置づけ

- 中国高等教育システムの中にあり、国際水準にあり、学位授与権をもち、独立法人資格を持つ研究型大学で、非営利的な学術機構である。
- ニューヨーク大学学位とNYU-Shanghai 大学学位(初期の大学院生にはニューヨーク大学と華東師範大学のダブルディグリー)を授与する。
- 学部教育を中心に、大学院教育、専門職学位教育も行い、母体とする二つの大学の特色と長所を生かした専攻を開く。

29



## 規模及び募集源

- NYU-Shanghaiは一流の質を確保することを前提に、段階的に募集規模を拡大する。
- 学部生には中国大陸の学生、留学生及びニューヨーク大学の交換大学生が含まれる。中外学生の比率は大体1対1とする。
- 学生全員にニューヨーク大学あるいはその他の海外キャンパスで最大3学期学習する機会を与える。

30



## 専攻の設置及び授業方式

- ビジネスと金融、経済、歴史、中国研究、生物、化学、物理、数学、神経科学、エンジニア等の専攻を設置する予定。
- 批判的な学習及び開放した討論を展開することを奨励し、學術自由を尊重する。
- ST比を低くし、学生により多くの授業外活動や実践の機会を与える。
- 主な授業言語を英語とする。

31



## 教員構成

- ニューヨーク大学の募集基準で全世界から招聘した教員
- ニューヨーク大学の教員及びニューヨーク大学と上海ニューヨーク大学双方に招聘された教員
- 上海ニューヨーク大学と華東師範大学双方に招聘された教員
- 華東師範大学の教員
- 国内外の一流訪問学者や客員教授
- 最初から世界一流大学の基準で教員陣を

32



## 管理

- 理事会は学校の最高権力機構で、中外それぞれ4人からなる。理事長は中国側が、副理事長はアメリカ側が担当する。
- 学校の法人代表は学長で、中国側が委任する。副学長はアメリカ側が派遣し、学校及び學術関係の仕事に責任を持つ。

33



## 経営経費

- 政府側の投資(学生一人当たりの経費、学校創設費、学科建設経費、外国留学生奨学金、レンタル代の減免等が含まれる)
- 学生の学費(1年10万円の予定)
- 専門職学位大学院生及び专业学位研究生と高端培训的収入
- 社会からの寄付
- 科学研究費等

34




Thank you!



東北大学大学院教育学研究科 国際シンポジウム  
東アジアにおける高等教育の国際化

日中における共同学位開発の展望  
—中国河北師範大学の状況に基づいて—

董存梅  
(中国河北師範大学教育学院)



自己紹介

所属





自己紹介

研究内容

1. 乳幼児・児童の自己制御に関する研究  
「幼児の自己制御の発達に関する日中の比較文化的研究」 → 子どもの自己制御の発達の変化
2. 子ども（気になる子ども）の社会性の発達の支援

Page • 2

東北大学時代の留学生活



Page • 3

東北大学時代の留学生活



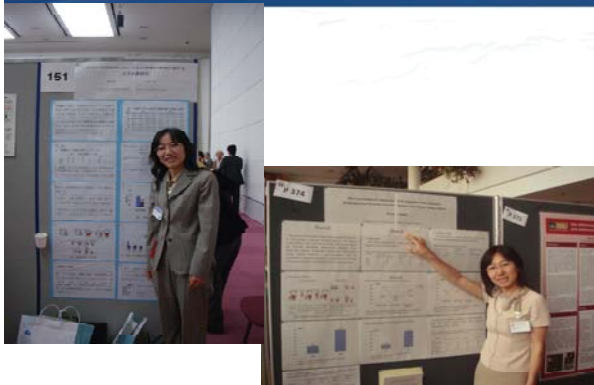
Page • 4

東北大学時代の留学生活



院生プロジェクト型共同研究：中国における養育者の子どもの将来と高校教育への期待に関する研究 Page • 5

## 東北大学時代の留学生活



## 東北大学時代の留学生活



Page • 7

## 東北大学時代の留学生活



## 中国における国際的教育交流の現状

図1 中国における留学人数の推移

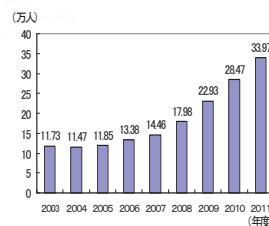
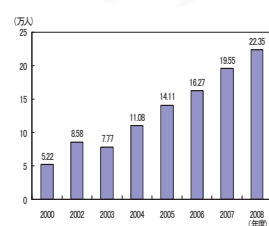


図2 中国における留學生人数の推移



注: 中国教育部の統計結果より作成

Page • 9

## 中国における国際的共同教育の現状

表1 国際的共同教育の資格を持つ大学数とプロジェクト数

所属地域	大学数	プロジェクト数
北京	4	59
上海	7	88
天津	1	23
鄭州	3	3
江蘇	2	40
浙江	1	30
⋮	⋮	⋮
河北	1	2
⋮	⋮	⋮
合計	40	577

注: 中国教育部「中外共同教育」より作成

Page • 10

## 中国河北師範大学の国際的教育交流の現状

- 中国河北師範大学の連携大学: 日本、韓国、米国、ロシアなど30か所あまり

表2 中国河北師範大学と日本との交流協定締結校一覧

大学	締結年月日	交流内容
大分大学	2000年7月17日	学術交流 学生交流 (5人)
大阪教育大学	2005年12月13日	学術交流 学生交流
島根大学	2002年7月29日	学術交流

- 在学の留学生: 300人以上

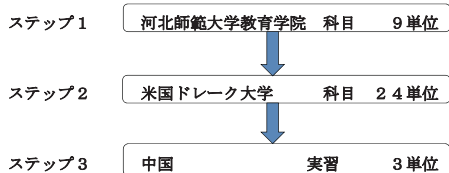
Page • 11



## 中国河北師範大学の国際的共同教育の現状

## ■ 河北師範大学教育学院

図3 河北師範大学教育学院と米国ドレーク大学の連合カリキュラム



Page • 12

## 中国における学位教育の動向

学術型学位 (academic degree) と専門学位 (professional degree)

- 専門学位は1991年に設置された。
- 1991—2008年の間に、専門学位教育は主に社会人から選抜し、定時制の課程を実施していた。
- 2009年から、専門学位教育は社会人と学生から選抜し、全日制の課程を実施している。
- 中国教育部は2010年から学術型学位課程の定員を減少し、専門学位課程の定員を増加してきた。
- 中国教育部は2015年に学術型学位課程の人数と専門学位課程の人数は半分ずつ占めるよう計画している。

中国河北師範大学教育学院：応用心理学専攻と教育学専攻

Page • 13

## 日中における共同学位開発について

## 1. 情報ネットワークの作成

- 情報手がかかり  
海外連携大学のホームページに東北大学大学院  
教育研究科のホームページのリンクの設定
- 留学情報  
留学フェア
- 地域の情報

Page • 14

## 日中における共同学位開発について

## 2. 日中における共同学位の優勢を發揮し、劣勢を改善する。

- 優勢：共通課題が多い  
説明会やセミナー
- 劣勢：言語  
一部分の科目は英語で行う

Page • 15

## 日中における共同学位開発について

## 3. 応用型人材育成を目標とする学習コースの設定

- 臨床心理コース
- 人間発達コース (発達障害学)
- 教育設計評価

Page • 16

## 日中における共同学位開発について

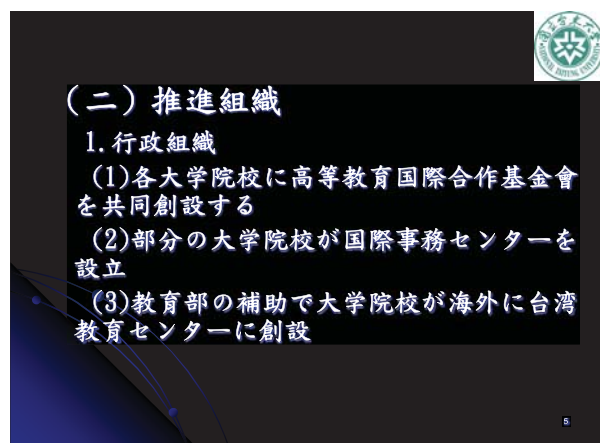
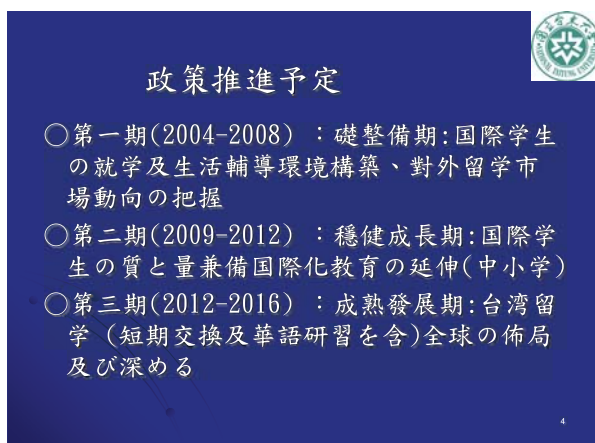
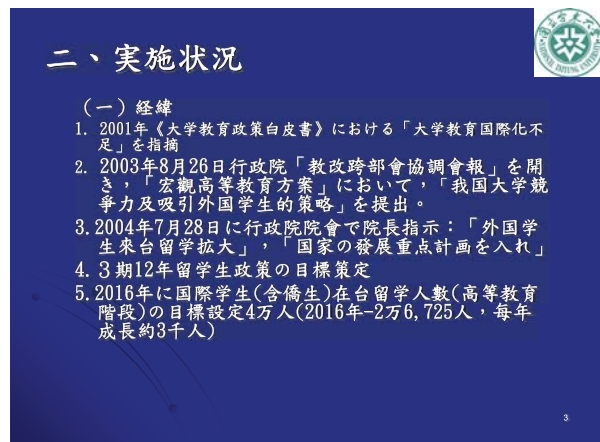
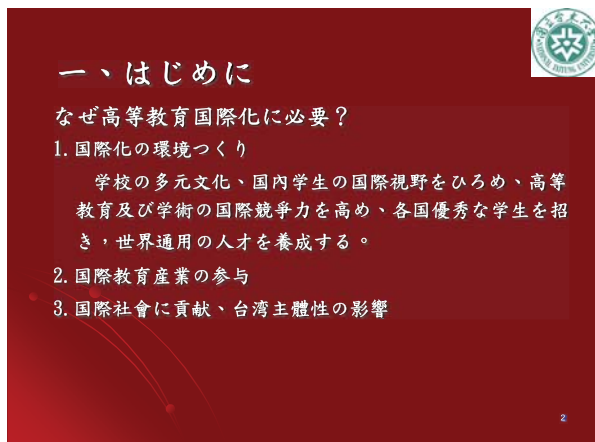
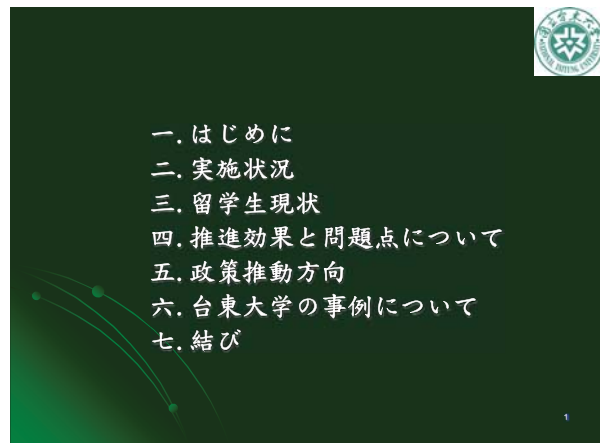
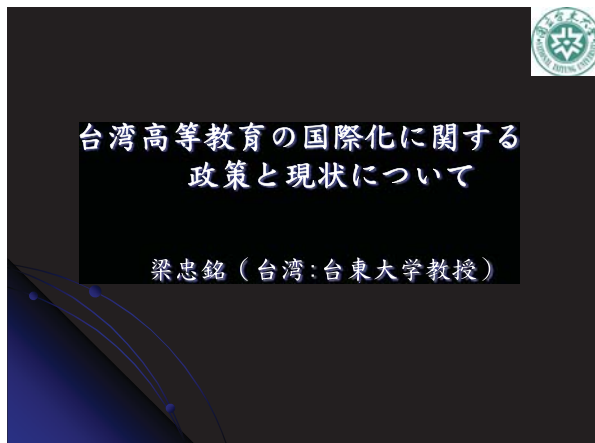
## 4. 支援システムの充実

- 学費の免除・奨学金の拡大
- アルバイト体制の重点的充実
- 留学生のための宿舎の確保

Page • 17

ご清聴をありがとうございました





2. 具体政策

(1) さまざまな国際課程を設置

- 雙聯学位
- 国際課程コース
- 英語課程コース
- 海外課程コース

(2) 海外台湾教育センター拠点及び運営機構

- ベトナム-河内(文藻外語学院)、  
胡志明市(国立暨南国際大学)
- タイ-曼谷(国立台湾師範大学)
- 清邁(国立中興大学)
- マレーシア-吉隆坡(国立彰化師範大学)
- インド- 新德里(崑山科技大学)
- インドネシア-雅加達(国立暨南国際大学)
- カンコク-首爾(銘傳大学)
- モンゴル-烏蘭巴托(銘傳大学)

(3) 関係法規の整備

- \*.外国学生來台就学辦法
- \*.台湾奨学金作業要点
- \*.外国学生奨学金核撥作業要点

(4) 補助制度:

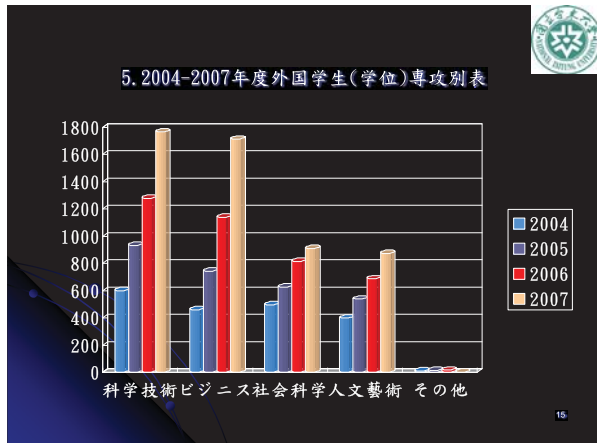
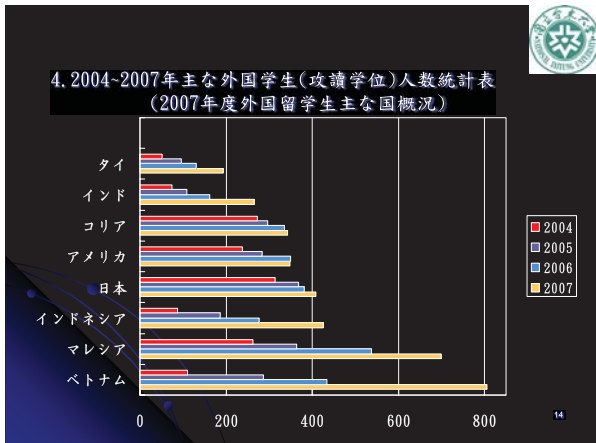
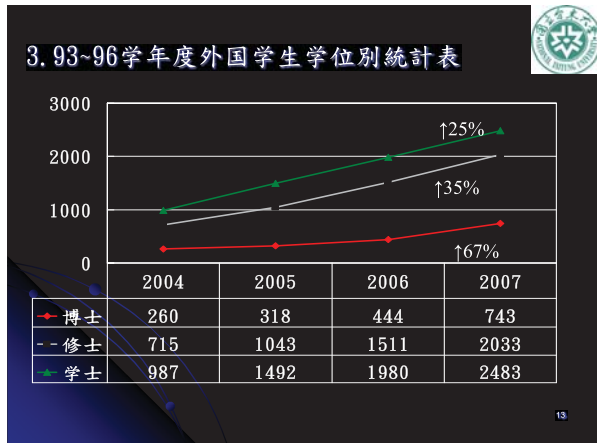
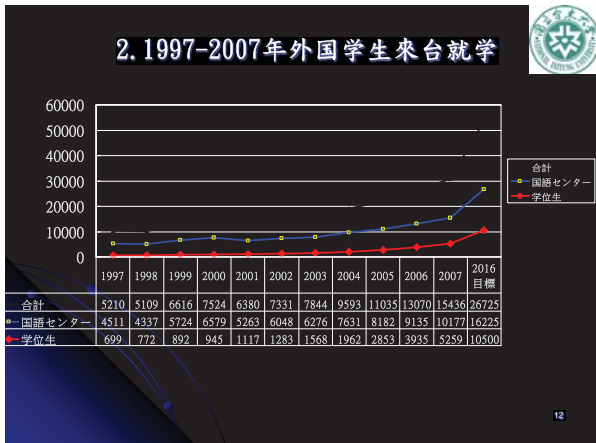
- \*.教育部から大專院校及び附設華語教育センターの設置を補助
- \*.教育部から大学校院擴大招收外国学生補助計畫を奨励
- \*.大学院校外国学生のため産業研究發展修士コースを設置する推進実施要点

(5) その他

- 海外教育博覧会海出展
- 外国学生の援助
- 中国語の学習施設を整備
- いろいろな外国学生奨学金を設置



資料 2-7



### 6. 2007年度主な国家留学生就学領域人数

番号	国別	科学技術	社会科学	人文藝術	ビジネス	その他	合計
1	ベトナム	249	104	44	409	-	806
2	マレーシア	178	277	160	85	-	700
3	インドネシ	201	72	50	102	-	425
4	日本	55	127	162	65	-	409
5	アメリカ	89	80	64	114	1	348
6	韓国	30	133	104	75	-	342
7	シンド	198	11	4	52	-	265
8	タイ	73	45	24	52	-	194
合計		1073	849	612	954		

### 四. 推進効果と問題点について

(一) 現状

- 外国学生は約有24%台湾政府奨学金で学位取得
- 約2.6%語学研修のため来台
- 外国学生学位を取得人数大幅で上昇, 言語研習及び交換生人数にも成長している。
- 外国学生は主なアジア国家であり; アメリカ及び欧州地域には短期交換及び言語習得を中心とする。
- 国別数は2002年60国, 61校。2007年100国を超え109校); 主な留学生国別: ベトナム、マレーシア、インドネシア
- 外国留学生専攻領域は科学技術及びビジネス分野。
- 外国留学生留学目的成長比率: 博士67%、修士35%、学士20%(2006/2007学年度比較)。

## (二) 総体効果

- 量的目標を達成しつつある
- 関係部会の統合、留学生受け入れ環境を整備しつつある：台湾奨学金計画(外交部/行政院科学委員会/經濟部/教育部)、外国学生留学期間実習及び卒業就業に関する法規の改定(勞委會)、外国学生入境簽證及居留(外交部/内政部移民署)
- 招收外国学生奨補助機制建立：外国学生奨学金制度、大学校院招收外国学生補助奨励、技專校院國際交流計畫補助
- 大学校院國際化校園環境：國際課程、雙聯學制、英語課程、境外專班、海外教育展、設置外国学生奨学金、外籍学生進路指導、華語研習
- 高等教育輸出全球佈局：財團法人高等教育國際合作基金會を成立、成立海外台湾教育中心の企画



18

## (三) 問題点

- 外国学生の人数的に目標、質的目標が欠如。
- 校側が普遍的な外国学生募集及び就学進路に関する国際事務人才の欠如、尚且つ担当者交替頻繁。
- 各大学の国際学生に関する政策は統一されず。



19

## 五、政策推動方策



20

### 1. 補助制度の整備

- 各校目標及推進方案の策定：各大学校の交換生、華語生及び実習生の募集に関する具体方策の策定。
- 各大学の国際教育に関する受け入れ制度にたいして、その内部及び外部評価の制度を
- 実績に対する評価の奨励制度の確立する。例えば、補助金及び「台湾留学」推薦校(系所)リストの作成。



21

かつ教育部2005-2008 國際化教育重点：

- (1) 全英語教育授業の開設を奨励。
- (2) 外国大学學術交流を強化する。
- (3) 大学雙語教育環境の整備。
- (4) 雙聯學制の課程と教師及び学生の交換。
- (5) 世界級的研究と授業を開設、大学資源統合と連携。
- (6) 國際一流大学の重点補助、競争力ある学科及び学際的研究センターを設立。
- (8) 將增加台灣奨学金の増加。
- (9) 外国学生奨学金設置を奨励、留學人數十年十倍に促進。
- (10) 外国留學を奨励、積極的「公費留學」、「自費留學」、「留學ロン」及選選「外国政府及び機構奨学金の整備」など措施、國內学生外國に留學を奨励。



22

### 2. 「台湾留学」に関する広報方法の検討

- 高等教育國際合作基金會 ( FICHET ) の役割。
- 國內外國國際学生募集の企画及び宣伝。
- 國際教育博覽会の企画及び参加。
- 海外台湾教育展覧会の開催、募集宣傳。
- 台湾國際教育に関するホームページの整備。
- 國際教育に関する政策及び諸制度の統合。



23

### 3. 国際学生管理及び指導方法の整備

- 外国学生に関する相談口の設立
- 外国学生に関するデータの。
- 帰国する留学生情報の提供制度
- 外国学生学習経歴及び連絡先データの把握
- 国際学生援助制度及びシステムの整備



24

### 4. 国際優秀青年の来訪及び研修制度の創設

- 大学と産業との連携制度で国際優秀青年の来訪及び研修制度の整備。
- さまざまな優遇措置を講じ、国際競争を有するカリキュラム、短期研習課程の提供及び解説。



25

### 5. 海外台湾教育センターの統合及び運用

- (1) 諸海外台湾教育センターの連携と協力
- (2) 各大学との連携、共同プログラムの開設
- (3) 台湾高等教育及び華語研習の輸出に関する方策の検討
- (4) 海外(或地区)と台湾発展国際交流の基盤整備及び趨勢の把握



26

### 6. 学生の国際経験と視野を広げ

- 国外青年の來台交流活動の実行
- 国内学生海外に研習/実習の参加
- ホームステイ-国際学生に受け入れする家庭の制度の構築、海外留学生に接する能力を高める。
- 小中学校及び高等学校との連携、国際教に関するカリキュラムの開発。



27

### 7. 外国学生授業料及び諸費用制度の検討

- 外国学生授業料の計算(各大学に決め)
- 留学生国内に就職に関する協力と制度の検討




28

### 六、台東大学の事例について

- 台東大学は台湾東にあり、台東県唯一の大学、前身は台東師範学院で、2003年台東大学となり、師範学部(教育学系(所)、社会科教育学系、幼儿教育学系(所)、特殊教育学系、体育学系、数位媒体与文教产业学系。)、理工学部(资讯工程学系、资讯管理学系、数学学系、应用科学系、生命科学系、生命科学研究所)、人文学部(華語文学系、美術产业学系、音樂学系、英美語文学系、身心整合與運動休閒产业学系、公共與文化事務学系、南島文化研究所、兒童文学研究所、區域政策與發展研究所)三つの学部構成され、学生人数は約4000名、院生約1000名です。このほか、附属幼稚園、附属小学校、附属体育高等学校(6年一貫)、附属養護学校(建設中)があり、台湾唯一なすべて学校を完備な大学。



29



- 台東大学は国際化の趣旨をそって、2012年3月まで、8ヶ国と学術交流が締結され、16海外の大学と交流している(表1)。
- 2000年以後中国との交流が進んで、現在と中国の23校の大学と学術交流している。その中に、日本と実質的な交流が最も進んでいる。

30

表1 台東大学と外国交流締結校一覧表

Country	Sister schools	Sister schools
USA 美国	California State University, Fullerton 加州州立大学Fullerton分校	University of Hawaii at Mānoa 夏威夷大学
	University of the West 西來大学	California State University, Long Beach 加州州立大学長堤分校
	Wheelock College 威拉克学院	
JAPAN 日本	Graduate School of Education, Tohoku University 東北大学大学院教育学研究科	Sendai University 仙台大学
	Binako Seiket Sport College 日本琵琶湖成蹊体育運動大学	
KOREA 韓国	Sunchon National University 順天大学	Silla University 新羅大学
UK 英国	The Institute of Education, University of London, UK 倫敦大学教育學院	
INDONESIA 印尼	Udayana University 巴厘島Udayana大学	
TURKEY 土耳其	Ataturk University 阿塔圖克大学	
VIETNAM 越南	The University of Social Science & Humanities- Vietnam National University in HCMC 胡志明國家大学人文社會大学	College of Foreign Language- University of Da Nang 岷港大学外語學院
MALAYSIA 馬來西亞	Universiti Tunku Abdul Rahman (UTAR) 拉曼大学	

出典：台東大学 研究發展処国際事務センター（2012年03/13）

31

表2 台東大学と中華人民共和國大学との学術締結校

中文校名(英文)	中文校名(英文)
北京師範大学Beijing Normal University	西南大学Southwest University
東北師範大学Northeast Normal University	首都師範大学Capital Normal University
瀋陽師範大学ShenYang Normal University	鄭州大学ZhengZhou University
廣州大学Guang Zhou University	河南大学Henan University
浙江師範大学ZheJiang Normal University	蘭州大学Lanzhou University
上海師範大学ShangHai Normal University	蘭州理工大學Lanzhou University of Technolog
雲南大学Yunnan University	昆明学院KunMing University
雲南師範大学Yunnan Normal University	海南師範大学HaiNan Normal University
廣西民族大学Guangxi University for Nationalities	河南科技大学Henan University of Science and Technology
大理学院Dali University	中国音樂學院China Conservatory
廣西師範大学Guangxi Normal University	華中師範大学HuaZhong Normal University
陝西師範大学Shaanxi Normal University	

出典：台東大学 研究發展処国際事務センター（2012年03/13）

32

## 台東大学国際教育に関する 奨励措置

- 一、行政担当：2011年に国際交流事務センターを  
二、関係法規
- (1) 国立台東大学学生出国進修奨学金辦法
  - (2) 国立台東大学学生申請出国進修奨助學金外國語能力最低標準
  - (3) 国立台東大学外国学生奨助學金實施要點
  - (4) 国立台東大学前往国外交換學生作業要點
  - (5) 国立台東大学奨励學術研究活動實施辦法
- 33


## 七、結び

- 国際学生の質を高め、国際学生に対する社会的印象を高め。
  - 教育内容と方法の開発、国際学生との交流機会。
  - 国際教育に関する諸制度の検討
  - 国際学術交流に専門担当者の育成
  - 学産官に関する連携体制の構築
- 34

どうぞご指導



## 台湾における高等教育の国際化 —私立淡江大学の国際化戦略



台湾・私立淡江大学 副教授  
閻百華 (CHUEH PAI-HUA)

## 私の略歴

- ▶ 1996年4月、日本・交流協会奨学金留学生として東北大学大学院教育学研究科博士後期課程に転入学。
- ▶ 2000年3月、教育学博士号を取得し、帰国。同年8月に台湾・中国文化大学日本語学科に助理教授として着任。
- ▶ 2001年8月、淡江大学日本語学科兼日本研究所に転職。2007年2月、副教授に昇進。
- ▶ 2011年度から、淡江大学日本語学科修士課程にて「日本社会文化論」、「現代日本の教育改革」の2科目を担当

## 淡江大学 (Tam Kang University) とは

- ▶ 1950年、淡江英語専科学校として創立され、その後文理学院を経て、1980年に淡江大学となった。
- ▶ 現在、三つのキャンパス、9学部、博士課程17研究科、修士課程51研究科、52学科、総学生数2万8千人、教職員2200名余、卒業生の数は23万余。
- ▶ 台湾で最も古く最大規模の私立総合大学。(総学生数は台湾大学に次いで台湾第2位)

## 淡江人




父母覺得淡大是這樣    社會覺得淡大是這樣    學校覺得淡大是這樣  
朋友覺得淡大是這樣    我本來覺得淡大是這樣    實際上淡大是這樣

## 台湾における高等教育の国際化政策

- ▶ 重点支援大学の選定  
(「5年500億計画」、台湾版COE)
- ▶ 大学の質的保証  
(「教学卓越計画」、台湾版GP)
- ▶ 留学生政策  
中国大陸留学生の來台就学開放

## 「5年500億計画」(台湾版COE)



The diagram illustrates the '5-year 500 billion plan' (台湾版COE) with four main pillars:

- 教學卓越 (Teaching Excellence):** Includes '教學卓越教師學會', '數位學習平台使用', '推動英語授課', '教學專業能力發展', '加強基礎教育', and '提升教學品質'.
- 國際交流 (International Exchange):** Includes '國際產學合作', '國際交流與觀摩', '舉辦短期研討會、短期教學交換', '雙聯學制', '招收外籍學生、雙學位或學校', '實踐訓練、參與研發與師生交流', and '多語化呈現'.
- 研究創新 (Research Innovation):** Includes '豐富圖書與網路資源', '積極與國內外知名大學建立伙伴关系、透過各項配套措施、增進師數', '研究創新資源整合', '加強數位學習', and '形成專業教學社群'.
- 基礎建設 (Basic Construction):** Includes '行政精進、學校發展', '加強學生輔導及生活教育', '加強國際競爭力、培養我國未來跨領域優秀領導菁英人才', and '完善基本教學設備與學習空間'.

### 淡大の「教学卓越計画」(台湾版GP)

**・教師**  
精進教師能力、實踐樂活教學。

**・課程**  
掌握社會脈動、貫徹課程品質。

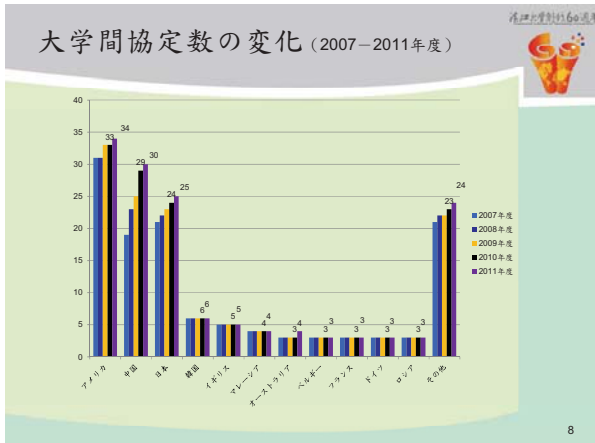
**・学生**  
學習增能、能力加質、適性揚才。

**・特色**  
整合資源、善用學習環境特色。

**深化全面品質教學・廣育心靈卓越人才**

### 淡大の国際化戦略

- 姉妹校締結・学术交流協定
- 英語の重視・遠隔教育の実施
- 淡江に対する認証・評価



### ダブルディグリー締結校

- パリ第4大学、リヨン第3大学(仏)
- ミシガン大学フリン校、テンプル大学(米)
- キーンズランド大学  
キーンズランド工科大学(豪)
- 長崎外国語大学、麗澤大学(日)
- 韓新伝播学院、新紀元学院  
韓江学院、英豪多媒体傳播学院(馬)

### 全学部学生の学位取得要件としての英語検定レベル

全民英検 GEPT	TOEIC トイック	TOEFL			IELTS アイエルトス	CEF ヨーロッパ 共通参照枠	
		CBT	iBT	PBT			
中級	初試	450	114	37	424	3.5級 以上	B1

### 6言語学習サイトの開発

6言語学習サイトの開発

English, Français, Español, Português, 日本語, Deutsch

東外大との共同授業 (2010年)

<p><b>中国語・日本語</b> 11/11(木) 11:10~12:10                  淡江大学日本語専攻学生と                  東外大中国語専攻学生による                  Skypeによる日語中文通訳ディベート大会                  「クローン生物の是と否」について、日台3                  チームが、互いの学習言語でネットを介し                  てディベートを行う。</p>	<p><b>フランス語</b> 11/11(木) 16:30~18:10                  淡江大学フランス語専攻学生と                  東外大フランス語専攻学生による                  自分のフランスの生活・大学紹介                  教員のPPTによる活動内容を紹介した後、                  フランス語でディスカッションを行う</p>
<p><b>英語</b> 11/12(金) 12:20~13:00                  淡江大学英語専攻学生と                  東外大英語学習支援センター学生による                  Style, Brands, Fast Fashion                  日本人英語学習者と台湾英語学習者との                  ジョイント形式でのスピーキング・セッション                  を開く</p>	<p><b>スペイン語</b> 11/12(金) 14:15~16:15                  淡江大学スペイン語専攻学生と                  東外大スペイン語専攻学生による                  文化紹介と討論会                  スペイン語による自己紹介とお互いの地                  域、文化紹介と討論会</p>

2010年11月、本学は東京外国語大学と共同で「インターネット環境における言語の教育・研究の可能性について—多言語の視点から—」シンポジウムを開催。  
[www.tufs.ac.jp/insidetufs/event/doc/10110401.pdf](http://www.tufs.ac.jp/insidetufs/event/doc/10110401.pdf)より引用改変

国際認証の取得

- 2006年、本学情報工学科はワシントン協定(工学教育プログラムの認定に關係)により認定。
- 2008年、WHO世界保健機関の「国際セーフティスクール」の認証を取得(世界初)
- 2009年、ISO20000情報サービスマネジメントシステム(ITSM)の国際認証を取得
- 2010年1月、商学部で事務局を設立し、AACSB認証(マネジメント教育に關係)取得に着手。

2012世界大学ネットランキング

Rank	UNIVERSITY	WORLD RANK	ASIA RANK	SCHOLAR
43	National Taiwan University (國立台灣大學)	71	204	41
44	National Tsinghua University (清華大學)	24	107	56
45	National Sun Yat-Sen University (國立中央大學)	295	142	251
46	National Central University (國立中央大學)	47	207	144
47	National Sun Yat-Sen University (國立中央大學)	347	176	351
48	National Chung Hsing University (國立中興大學)	64	436	252
49	National Sun Yat-Sen University (國立中央大學)	8	483	354
50	National Chung Hsing University (國立中興大學)	19	456	103
51	National Tsinghua Normal University (清華師範大學)	1288	428	148
52	Tsinghua University (清華大學)	136	687	136
53	National Tsinghua University of Science & Technology	236	928	406

世界で309位、アジアで43位、  
 台湾で10位、連続私立大学の第1位。

台湾大企業1000社人材戦略・大学生評価

12年	11年	10年	09年	08年	07年	06年	05年	04年	03年	02年
1	成功大学	2	2	2	2	2	3	1	1	1
2	台湾大学	1	1	1	1	1	2	2	2	2
3	交通大学	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	清華大學	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	政治大學	5	5	5	5	5	6	5	5	6
6	台灣科大	6	6	7	8	6	6	6	7	6
7	淡江大學	8	8	8	7	7	8	8	10	8
8	台北科大	7	9	9	6	9	7	7	7	6
9	逢甲大學	9	10	10	10	12	11	10	11	10
10	中山大學	10	7	6	9	8	9	13	8	11
11	中央大學	11	11	11	13	10	12	12	9	14
12	中原大學	12	12	12	11	11	10	9	13	9
13	輔仁大學	13	13	13	14	13	13	11	-	12
14	高雄應用	20	21	-	-	-	-	-	-	-
15	台北大學	17	15	15	-	-	-	15	-	-
16	東海大學	14	14	14	-	15	15	-	14	15
17	五專大學	15	17	-	-	12	13	14	-	-
18	嘉應學院	16	16	-	-	-	-	-	-	-

15年連続私学トップ1

2012大学ブランド力調査

企業最愛ブランド大学

排名	学校名称	就業力	競争力	學務力	環境力	得点合計
1	臺灣大學	5.4	8.4	12.0	6.0	31.8
2	成功大學	6.0	8.7	9.9	5.2	29.8
3	清華大學	3.2	6.3	10	5.0	24.7
4	交通大學	3.8	6.0	6.9	4.0	20.7
5	政治大學	1.6	3.0	7.2	2.0	13.8
6	淡江大學	4.2	6.0	2.7	0.0	12.9
7	輔仁大學	3.2	3.3	3.9	0.0	10.4
8	臺灣科技大學	2.2	3.0	1.2	0.4	6.8
9	中山大學	0.0	0.0	3.3	2.8	6.1
10	中央大學	0.0	0.0	3.6	2.4	6.0

大学ブランド力は全国で6位、私立大学第1位。  
 就業力は成功大学・台湾大学に次いで、全国第3位。

東北大学の国際交流について

- 留学生向け生活支援体制の整備
- 草の根の国際交流の大切さ
- 国際交流は「方法」と「過程」であって、「目的」ではない

## 淡江大学交換留学生の声



中国語の会話の授業



中国語のクラスで昼食



発表の様子



中国語の授業で陽明山へ



『台湾文化』の先生



『台湾文化』のクラスメート



マスコム学科の『広告学』 葉園葉先生



ラジオの様子



創立から使われている教室



マスコム学科のスタジオ

資料 郁典(龍野大学)「淡江大学交換留學生体験談」www.fedu.uec.ac.jp/studyabroad/2010/02/09/8\_saimura.pdf より転用

### 台湾の民主化繰るブログが中国で人気の中国人留学生・蔡博芸さん

1月14日公開された台湾総統選と立法委員(国会議員)選は、中国でも中国語ツイッター・微博(ウェイボ)に状況が随々と転載され、高い関心を博した。

その情報源の一つとして台湾で「陸生(レノンマン=大陸留學生の略)」と呼ばれる中国大陸からの留學生たちの存在がある。台湾の私立大である淡江大学1年生として昨秋から留学し、昨年11月から留学体験を中国の人人前に書き綴った日記「台湾でのわが青春(我在台湾找青春)」が一人人気のおとなり、日数万アクセスとなっている。

台湾総統選挙の中継から総統に向かう時期と重なっただけに、台湾へ旅行目的で来る中国人観光客と違い、政治経済や文化、生活の違いなどを深く切り込み、しかも「他人を誹謗する資格も無い」との理由で2008年(1990年代以降に生まれた世代)の種々しい感性が中国大陸で高い評価を受けている。

馬英九政権が対中融和策として三通(中台間の通信、通商、通航の直接往来)を解禁させると同時に推進している交換留学が拡大することで、昨年は中国大陸学生の台湾留学元年とも呼ばれ、中国大陸の学生975人が台湾各地の高校、大学に留学、蔡さんもその一人だ。

「同じ普通話(標準中国語)でも細かい表現が違い、最初は戸惑った」「中国の物価は意外と高い」と生活観を表し、「台湾と大陸は地理的距離は遠くはないが心理的距離が遠いのだ。時間差ではなく、時代差がある」とも、台湾の同級生と交流して分かったことは台湾が民主化が加速していること「大多数が統一を望まず、現状維持を望んでいる」「台湾のメディアは偏見を付けすぎている」「民主政治でも、とても良いとは言えない(最もではない)」。

ブログに「09年秋は台湾の選挙を経験して大陸に帰る人もレノンマン(略)に記し、台湾の出版界が作家デビューを打診、好意をつかみつつある。中国・甘肅省生まれ、浙江省湖州で育った19歳。

2012年1月28日記(開)開治

19

## ご清聴ありがとうございました。

ご意見・ご指摘ありましたら、お願いします。

## 長所を活かす高等教育の 国際化を目指して

—日本の東北大学と中国の内蒙古師範大学の  
実態を手がかりに—

内蒙古師範大学 宝力朝魯

## はじめに

- 自己紹介
- 題目の説明と目的

## 1 東北大学の国際化

- 昔
- 今

## 2 内蒙古師範大学の国際化

- 内蒙古師範大学の概況
- 科学技術史研究院
- 教育科学学院
- 社会学と民俗学学院
- 体育学院
- 蒙古学学院
- 蒙古学国際研究センター
- 国際交流学院

## 2 内蒙古師範大学の国際化

- 外国語学院
  - 歴史文化学院
  - 物理と電子情報学院(アムステルダム大学との交流)
  - 地理科学学院
  - その他
- ↓
- 社会科学が活発で、自然科学が比較的鈍い  
民族と地域の特徴を生かすような国際交流

## 3 学生は大学の長所を求める

- 私は東北大学の博士課程に進学する時
- 東北大学の長所(ランキング評価も)
- 東北大学の優れた学術環境
- 内蒙古師範大学の長所
  - 民族的優勢条件
  - 地理的優勢条件
  - モンゴル語も中国語も勉強できる

#### 4 短所の補足

- 早稲田大学の国際交流
- 東北地方は国際交流が比較的少ない(九州に比べれば)
- ドクター・ヘリーの話
- 東北大学は対外学術支援による影響力の更なる拡大を考えて良いかもしれない
- 長所は短所

6

#### 4 短所の補足

- 内蒙古師範大学の弱いところ
  - ↓
  - 先富起来 → 先動起来  
(積極的に他大学に学ぶ)
  - ↓
  - 国際化の推進
- 短所は長所(「貧乏は良い学校」)

7

#### 5 共同学位開発プロジェクトの実施に当たって

- 奨学金の授与
- 授業料の免除
- 東北大学の学籍を持ちながら外の国々で勉強する

8

#### おわりに

- 長所を生かして国境を越える国際化
- 長所を生かして学校に迎え入れる国際化
- 短所補足の国際化
- 短所補足後、国境を越える国際化
  - ↓
  - 更に長所を生かす高等教育の国際化へ

9

## 慶熙大学の新たな挑戦と世界市民教育

### はじめに

1. 概要
2. 国際交流を中心に
3. 交換学生と短期留学制度
4. 国際交流院
5. 世界平和への活動
6. マニタスカレッジ (Humanitas College)
7. 地球共同体のための活動

1

### はじめに

- 学問的な優秀性とグローバルな尊敬が調和した教育を通じ、“創造的人類愛”を体得したグローバルな人材を養成し、融合教育を実施。
- 生命と宇宙、人間と歴史文明の総合的な省察を土台にした基礎教養教育、学問と学問、学問と現実が互いに交流し、コミュニケーションする教育・研究の世界的な協力ネットワークの構築。
- 慶熙大学校の歴史と伝統を継承した特性教育を通じ、“普遍的人間愛を創造的に実践している未来の世界、未来の慶熙”を養成。これをもとに、“和合と創造の未来社会”を実現するグローバル実践に捧げる。そのため全世界が疎通する社会貢献の国際ハブを造成。
- 世界の市民社会と国際機関、政府、財界、言論界、学界の多国間及びグローバルな調和を手配し、人類の福利の増進に寄与する社会貢献の新しいパラダイムを創造。

2

## 1 概要

### 創学精神と教育理念：文化世界の創造

- 競争・国・民族・宗教・理念・階級の専有権を越えて人類が平和に共存・公営の地域共同社会。
- 精神的に美しく、物質的に豊かで、人間的に価値がある社会。
- 人間の努力によって、すべての対立的なものが葛藤を解消し、お互いに調和を成すの世界。
- 教訓：学園の民主化、思想の民主化、生活の民主化。

3

## 2 国際交流を中心に

### 2-1 Global Collaborativeve

- 21世紀の多文化の時代を迎え、教育・研究・実践が調和した大学教育の新しいパラダイムを年始するのためのもの。
- 教育・研究・実践の次元で境界を超えた相互交流・協力プログラムを確立して文化的多様性を志向し、人類の共同の価値と普遍的な知識を模索する前向き試み。
- ペンシルベニア大学の交流協力から出発したGlobal Collaborativeは、2008年に中国の北京大学、日本の立命館大学、ロシアのモスクワ国立大学、国連の経済社会局、世界NGO協働体であるCoNGOが新たに参加して拡大改編された。

4

### 2-2 Global Studio Network (GSN)

- 未来の調査と産業、そして文明の総合的理解をもとに交流し調和して作成する実践的な知識人を養成が目的。
- 世界の教育、研究、文化と文明をリードする中核都市にスタジオを設置し、現地の有識者の講義や特別講義、重要な学術会議をオンラインで中継することにより、全世界の学者や学生、市民が最高レベルの研究・教育・実践の最新動向をリアルタイムに共有できるようにするシステム。
- GSNは、2010年にニューヨークと北京にスタジオを開設し、2012年までに順次、海外のスタジオを設置する計画。2015年頃であれば、国内外の大学や関連機関が自発的に参加する安定した段階で定着させ、長期的には正規学期に発展させて参加し、大学間の交流協力関係を拡大する計画。

5

## 3. 交換学生や短期留学制度

### 3-1 交換学生制度

- 世界65カ国380校と姉妹提携を結び、毎学期へ交換留学生を派遣し、様々な形の奨学金を支援し、期間は1学期または1年の期間で専攻別の交換
- UMAP、INU、ISEP、SAFなど世界有数の大学のネットワークを活用することで、韓国・日本・中国・ヨーロッパ・アメリカ地域の大学で自由に単位を取得することができる豊富な機会を提供
- 毎年3月と9月ごろの2回、本学のホームページや国際交流処ホームページ (<http://oia.khu.ac.kr>) 掲示板で発表し、毎年500人余りを選抜派遣します。英語圏交換学生の場合、クラブ (<http://club.khu.ac.kr/goabroad>) を運営して姉妹、学校別の情報を提供

6

### 3-2 特別交換留学生派遣制度 (Study Abroad)

- 学術交流及び協定により学生たちが自費でスハウへ単位を認められる制度。学生たちに、より多くの海外留学の機会を提供するために用意。派遣学生は、交換学生と同等の地位を持ち、1学期または1年間の正規課程を受講。

### 3-3 海外短期研修

- 休みを利用した2ヶ月未満の海外短期研修制度。専攻研修、語学研修、体育研修、文化研修、インターン研修など。

### 3. 交換学生や短期留学制度

#### 3-1 交換学生制度

- 世界65カ国380校と姉妹提携を結び、毎学期へ交換留学生を派遣し、様々な形の奨学金を支援し、期間は1学期または1年の期間で専攻別の交換

UMAP、INU、ISEP、SAFなど世界有数の大学のネットワークを活用することで、韓国・日本・中国・ヨーロッパ・アメリカ地域の大学で自由に単位を取得することができる豊富な機会を提供

- 毎年3月と9月ごろの2回、本学のホームページや国際交流処ホームページ (<http://oiak.khu.ac.kr>) 掲示板で発表し、毎年500人余りを選抜派遣します。英語圏交換学生の場合、クラブ (<http://club.khu.ac.kr/goabroad>) を運営して姉妹、学校別の情報を提供

### 3-4 複学位制度 (Dual Degree) と単位交流

- 複学位協定を締結した大学と慶熙大学校共同名義で2つの学位をそれぞれ授与する制度。
- 2002年、米国のセントラルコネチカット州立大学 (CCSU) と協定を締結した以来、フランスのエコールポリテク、日本の立命館アジア太平洋大学 (APU) など世界の著名大学で協定を拡大し、学生たちの国際化能力を向上させている。
- 共同学位制度 (Joint Degree) で、両大学人で一つの学位を授与するプログラムも実施しており、今後さらに拡大していく計画。
- 4年以内に慶熙大学校と外国の大学の学位を同時に取得。複数の学位を取得するために、外国の大学で数学の学生は、在学期間中の本学学生としての学籍を保有。

### 3-5 韓日政府の共同国費奨学生日本の工科大学のプログラム

- 日本の工科大学に派遣される韓日、政府の共同国費奨学生の予備教育コース。
- 修了後、東京大学・京大など日本の23の大手工科大学に入学し大学生活をする。国際教育院では、正規の教育課程のほか、日本現地の理解と適応を支援するため、日本文化院訪問、日本の学生との懇談会と合宿教育を実施

### 3-6 文化・スポーツ交流

- 韓国文化の優秀性を知らせるために、海外の姉妹大学との姉妹機関に文化・スポーツチームを派遣して支援するプログラムです。サークルやスポーツチームの相互派遣し、両国の学生たちは文化・スポーツ交流を通じて友情を築き、相互理解を広げる。

## 4 国際教育院

### 4-1 国際教育院の概要

- 韓国語教育課程は、1993年に開始し、大韓民国政府との主要な機関の韓国語と文化の研修を委託し、実施している専門機関。
- 1993年“大韓民国政府招請の外国人奨学生韓国語プログラム”委託教育機関として選定され、毎年、世界80カ国6,000人余りの在在外同胞と外国人学生たちに韓国語と韓国文化を教育する。
- 中国北京大学に無試験で進学できる過程を運営。

### 4-2 外国人のための韓国語教育プログラム

- 韓国語教員資格を所持している専門講師陣が、外国人を対象に韓国語を教える。
- 担任制度と共に生活・進学相談プログラムを運営。
- 特に大学(院)生、1:1で接続されている“韓国語ヘルパー制度”は、外国人学生たちが韓国の生活によく適応して韓国語と韓国文化に親しむことができる重要な役割。

### 4-3 外国人学生のためのサポートセンター (CISS)

- 純粋な外国人の入学生と交換学生、政府招請奨学生の学校生活に必要な全般的な情報と支援を与えるために、外国人支援センター (Center for International Students & Scholars : CISS) を運営



## 4-4 留学生教育支援チーム（1）

- グローバル時代の慶熙大の社会的役割を忠実に、留学生の学業優秀性を高めるために2010年韓国の大学では最初に設立。
- 教育サポートの専門教授が学術に関する体系的な相談を介して慶熙大のコースワークに軟着陸できる代案を提示
- 留学生対象の教育情報や学習状況に関する情報を蓄積し、教養課程以降学部で活用できる情報を構築。
- 留学生専用科目を開発して、留学生が効率的に受講することができる基盤を用意してフマナスカレッジの中心科目、配分履修に留学生専用の科目を開設。

13

## 4-4 留学生教育支援チーム（2）

- 留学生たちがオフラインの講義受講時の不完全な講義の理解を補完するための適切な教科の韓国語と外国語バイリンガルebookと重要な部分を映像で撮影してバイリンガル字幕をサポートしている映像サービスを実施。
- これにより、留学生たちは、時間と空間に拘らず、オフライン講義を補完することができる機会を持つようにする。
- 留学生の学業能力を養うための様々な小グループ活動を実施。
- 現在の小グループ活動には、専攻領域別専門用語、中韓メディアの監視、HWP実習、韓国文化ドキュメンタリー録音と字幕制作などが運営。
- 学習能力が劣っていたり、補完が必要な留学生を対象に自費負担の原則から、放課後学習を実施。このコースでは、大学の講義受講のための様々な実用的な戦略とテクニックを学習して、最終的に学習能力を育成。

14

## 5. 世界平和への活動

## 5-1 Global Service Corps発足

- “学園と平和”の伝統を継承し、21C、大学の新たな社会貢献活動を展開しようとしてGlobal Service Corpsが2010年5月に発足。
- グローバル共有と貢献のためのGlobal Praxis、地域社会と一線にするCommunity Partnerships、医療を通じた分かち合いの実践Medical Service Program、時間と空間を超越したOn-line Service Programで構成。

## 5-2 国連世界平和の日の制定を提案

- 1981年のコスタリカのサンホセで、世界大学校長会（IAUP）第6回総会が開かれ、会長を務めていた創設者ジョウンシク博士は、平和の守護のために国連が世界平和の日と年を制定するようにしようという“コスタリカ決議文”を提案し、全会一致で可決した。

国連は157カ国の全会一致の賛成で1986年を“世界平和の年”で、毎年9月第3火曜日を“世界平和の日”と宣言した。

15

## 5-3世界平和の日30周年記念UNAI-慶熙国際会議

- 世界平和の日30周年を迎え慶熙大学校は(2011.9.15)、UN傘下の高等教育機関（UN AcademicImpact、UNAI）と共同で国際会議を開催。テーマは“平和の未来大学の未来（Give Peace Another Chance）”

## 5-4世界の平和名管理事委嘱

- 学校法人慶学園はハビエル・ペレスにケサル（Javier Perez de Cuellar）とブトロス・ブトロス・ガリ（Boutros Boutros-Ghali）前国連事務総長を法人理事会、世界平和の名管理事（永久）に委嘱。

## 5-5 Global Initiative 100 for Neo-Renaissance

- “Global Initiative 100”は、ネオ・ルネッサンスをサポートしている認識共同体である。ソルミハイルゴルバチョフ（Mikhail S. Gorbachev）、ブトロス・ブトロス・ガリ（Boutros Boutros-Ghali）などの国際社会をリードする政治指導者、宗教指導者、ノーベル賞受賞者、学者、ジャーナリスト、市民運動家100人が参加。

16

## 5-9 ユネスコ平和教育賞受賞

- ユネスコ（UNESCO）は、1993年に慶熙大学がこれまでに展開してきた人類の平和運動を高く評価して、“ユネスコ平和教育賞”を発表。韓国でユネスコ平和教育賞を受けたのは、慶熙大学校（平和福祉大学院）が初め。

## 5-10 ネオ・ルネッサンス運動を展開

- ネオ・ルネッサンス運動の思想的ルーツは、＜文化世界の創造＞を授業で慶熙大学校を設立して以来、1960年代には農村啓蒙とジャルサルキ運動を、1970年代には明るい社会運動を展開。
- 1980年代には冷戦の危機状況では、世界の平和運動に重点をおき、1990年代には、全人類が平和共栄する社会を構築するためのネオ・ルネッサンス運動を発足させた。

17

## 5-11 1999ソウルNGO世界大会の開催

- 21世紀の市民社会を迎え、市民団体の役割と重要性を認識し、1999ソウルNGO世界大会を開催。
- この大会は、21世紀のNGOの役割”をテーマに、人類社会が抱えている問題を総合的に診断し、解決策と、新しい千年のビジョンを模索した。
- NGOが自発的に主導した世界初の大会で108カ国で1万3000人余りが参加

18

### 5-12世界の平和公園(GNC)

- 1999ソウルNGO世界大会のフォローアップ事業としてブトロス・ブトロス・ガリ前国連事務総長とコフィ・アナン前国連事務総長の認可の下、2004年に国連平和公園とGlobal NGO Complex (GNC)の建設に着手。
- GNCは、平和公園内にあり、国連の平和公園には、国際キャンパス内の10万坪規模で建設される予定。
- 方向

世界市民社会の交流・協力、連帯活動の基盤  
国連、国際機関、政府、NGO、企業、学界、市民等の多国間対話と  
疎通、連帯の場

NGO相互の連携と結束を強化するための情報、資料の提供  
市民社会、文化芸術、企業など社会の各部門と研究協力関係の構築  
国際NGOネットワークづくり

人間中心のグローバル・ガバナンスを構築

国・民族・理念・宗教などを超越した対話と協力の場を提供  
地球共同社会 (Global Common Society) の実装

19

### 5-13 Peace BAR Festival

- 現代社会に蔓延した葛藤と対立の壁を越えて平和と共栄の普遍的価値を志向する人類和合の祭り。Global NGO Complex建設記念式典が開催された2004年から開始。
- BARは慶熙大学校が過去60年間追求してきたspiritually Beautiful、materially Affluent、humanly Rewardingの略字。
- Peace BAR Festivalは開かれ、文化芸術祭、社会貢献活動、青年フォーラムなど、さまざまなプログラムを使用し、学界、国連、NGO、Business Partnership、一般市民の参加と交流・協力を導いて平和共栄の人類普遍の価値に基づいた人類コミュニティを指向。

### 5-14平和ワークショップ"を開催

- 1981年第36回国連総会で制定された"国連世界平和の日"を記念して毎年、平和会議を開催。1982年9月に第1回会合を開いた後、2009年には"第28周年"国連世界平和の日"記念慶平和ワークショップ"を開催

20

### 5-15 世界の市民フォーラム (World Civic Forum)

- "学問と平和"の伝統を築いてきた慶熙大学の歴史は、開校60周年を迎え、世界の市民フォーラム (World Civic Forum : WCF) の創設につながった

### 5-16 未来文明院の発足

- 未来文明院は平和会議のほか、人間と文明、人類の歴史に対する省察をもとに、"人間と社会の新たな企画と人類社会の普遍的価値の確立"のための学術会議を定期的に開催。
- 現代の生活と文明現象の政治・経済・社会・文化・科学など学際的間の研究を介して汎地球的交流・協力の場を設けることで、オルタナティブな文明の言説形成を促進。

21

## 6. マニタスカレッジ (Humanitas College)

### 6-1設立の背景

- 2011年度から大学教育の本質の目的を取り戻し、学部教養教育の面目を一新するため、教養教育プログラムを全面的に改編してフマニタスカレッジを立ち上げた。
- このプログラムは、大学内外の時代的に抑圧され、深刻な歪みや変質を余儀なくされている大学教育の基本的な役割と目的を再確認し、教養教育の品格を回復し、その教育の水準を高めるために発足。
- 2011年度入学生から必須科目の"中核教科"2科目を新設、1学期には"人間の価値探索"、2学期には"私たちが住む世界"、社会活動を中心にする"市民教育"が、それぞれ3時間3単位の授業で開設。

22

### 6-2フマニタスカレッジ教養教育の志向点

- 人間、社会、自然、歴史の多角的理解の方法を幅広く接することができ、批判的であり、好奇心にあふれる研究。
- 合理的説明、関連した主張は、説得力のある解釈を追求する能力を育て、科学的思考習慣を涵養する教育の志向
- 自分の住む社会の民主的原則を守って発展させる市民の力を信じるようにする教育。
- 国際社会と協力し、世界の政治的、社会的、文化的多様性と歴史的経験についての理解を広げ人類共通の関心事を認識するとともに、地球社会の共通の問題を解いていく、世界市民の力を育つ。
- 芸術的な創造性を尊重する能力、記憶を覚えて、社会の歴史的経験を共有することで、良い話の社会的流通を促進するコミュニケーション、伝達、表現の能力、新しい技術のメディアを有効にする文化的能力を高める。

23

### 6-3 市民教育

#### <市民教育が志向する市民>

- 自由民主主義を支える民主主義社会を発展させる能力を持った合理的な批判的民主市民。
- 共同体生活を維持するために必要な信頼性、善意、共感、思いやり、奉仕、結束の徳目の豊かな隣人。
- 一国の市民であると同時に、地球社会を考える世界市民。

#### <現場活動>

- 私たちの周りの生活の中で行われるすべてのボランティア活動。3-4人のグループの活動。
- 批判的に国家権力を監視する活動や権利擁護活動、社会福祉活動、オルタナティブな経済活動、地域社会活動、教育活動、文化芸術活動、人類の平和と地球の生態系保全活動、平和活動等

24

#### 6-4 地球社会奉仕団 (GSC) の発足

- 地球社会共同体は、(Global Service Corps) は、大学の社会的責任とグローバルな尊厳を高めるためのグローバルなサービスネットワーク。

#### 6-5 Global Praxis Academy

- 大学の教育と実践が融合した正規のプログラムでフマニタスカレッジ (Humanitas College) の市民教育と社会奉仕を連携した教養大学プログラム。
- 現行サービス単位制度を改善し、GSCの実践プログラムを有効にし、在学生の世界的な実践活動を振興させることが目的。

#### 6-6イスタンブール(多文化理解)プロジェクト

- いくつかの文明/文化を理解するのに役立つ地域を直接訪問して、私たちが住んでいる世界についての理解の幅を広げようとするプログラムイム。1年生を対象に選抜

25

## 7 地球共同体ための実践活動

### 7-1 将来の文明のための地球規模の学術コミュニティのGlobal Research Network

様々な機関との協力を通じた専門的研究に、より良い人間社会を実現するための実践的学術・研究ネットワーク。

### 7-2 人間社会を直すGlobal Medical Service Corps

- 慶熙医療院、慶熙大学校、医学、漢方医学、歯学、薬学、看護学などの医科学系の幅広い疎通と協力を通じ、大学、医療、社会貢献

26

### 7-3 地球規模の開かれたコミュニティOn-Line Service Program

- 空間と時間を超越したオンラインエリア、大学の教育、研究、医療分譲の社会貢献ビジョンと有機的な結合を介し、地域や国際社会が疎通して和合。
- 質の高い教育コンテンツを様々なチャネル(地上波TV、オンライン、IPTV、モバイル機器)を介して提供。  
Global Studio Networkとギョソフサイポ大学との連携事業の推進  
●市民人文学講座のオンラインサービス。

### 7-4 国連/国際機関のインターンシッププログラム

- 在校生たちが国際化マインドを育て、国際社会のリーダーに成長できるように体験の機会を提供するプログラム。慶熙大と国連の長年の交流協力の歴史をもとに開設され、学部生も参加可能。
- 2006年にプログラムが始まって以来、現在までに約40人の学生がインターンシップを行った。その中の2人の学生は、国連の正式職員として採用されて働いた。

27

### 7-5海外奉仕団

- 学生支援先で主管して、休みを活用した短期集中海外ボランティアプログラム。これまで、ベトナム・中国・マレーシア・ウズベキスタン・インドなどの国に定期的に海外奉仕団を派遣した。毎年参加人数と派遣地域が増える傾向。

### 7-6 ユネスコとのウォークキャンプ

- 言語と宗教、人種の違いを超えて地域社会の変化と環境問題の解決を模索する国際的なボランティアプログラム。
- ユネスコ韓国委員会の協力を得て、未来文明院が主催し、参加学生には、ネオ・ルネサンス奨学ボランティア奨学金が支払われる。

28

### 7-7 グローバルNGO探訪

- 在校生たちが夏季と冬季休暇を活用し、世界NGOを探訪して活動状況を把握して報告書を作成する短期集中プログラム。学生たちは、人類社会に貢献する世界公共機関とNGOの活動状況を詳細に探求

### 7-8内外の医療サービス

- 慶熙医療院と東西新医学病院の医療スタッフと従業員、学生で構成され、医療奉仕団の活動は疎外された地域、疎外された層、そして医薬品や医療の手助けが切実な海外の多くの国で行われている。

29















## あとがき

### 国際シンポジウム「東アジアにおける高等教育の国際化」を終えて

東北大学 清水 禎文

ここに上梓する冊子は、2012年3月28日、29日の両日、東北大学大学院教育学研究科において行われた国際シンポジウム「東アジアにおける高等教育の国際化」の記録です。

東北大学大学院教育学研究科では、平成23年度より平成27年度までの5年間、「アジア共同学位開発プロジェクト」に取り組むことになりました。このプロジェクトの目的は、東アジアの諸大学と連携し、修士レベルでの共同教育プログラムを創り上げることにより、新たな知の創造に取り組み、長期的にはアジアにおける教育上の諸問題に挑戦する志の高い人材を育成することにあります。

プロジェクトが発足する1ヶ月前、東日本大震災が起きました。地震、津波、そして原発事故と一連の災害が東北地方を襲いました。東北大学も大きな被害を受けました。その後の政府の対応を見ていて、いわゆる日本のエリートたちに共通して認められるいくつかの傾向があるように思われます。大きな問題を小さな、個別専門的な問題に分解し、その小さな枠組みの中で「問題」の技術的な解決を試みる。技術的なテクノクラートのような思考形式です。彼らがいずれも優秀な人材であることは誰も否定できないでしょう。彼らは、おそらく例外なく、日本の学校教育システムの中で成功を収め、入職後も確実に成果を上げてきた人たちであるに違いありません。しかし、彼らの枠組みを超える「想定外」の出来事に対しては十分な対応はできませんでした。

その理由や背景は多々考えられますが、それはこのあとがきの課題ではありません。ただ1点だけ指摘しておきたいと思います。それは知識を生成する環境の閉塞性です。分断化された環境の中で（セクショナリズム）、実務に携わる中でしか経験できない実践の技巧や感覚の軽視、言語化されない暗黙知に対する過小評価、問題を位置づけるフレームの狭隘化などが、「想定外」の事態への対応を困難にしてきたのです。私たちが地震後のさまざまな経験から学びえたことは、現実の問題に正対し、問題を複眼的に捉え、所与の状況から新たな知識が生成・発展させることが重要であり、そのためには現場の経験から生まれる実践の知（暗黙知）と理論的な知識（形式知）との絶えざる往還を自分自身の思考形式として内在化し、時には所属する組織を越えたオープンな関係やネットワーク（知の多様性）の中で自分自身を相対化するといった習慣形成が必要であることでした。

こうした批判の刃は、じつは今日の大学にそのまま返ってきます。大学における研究と教育の使命は、研究室の中に閉じこもり、知識を伝授していく密教的な営みにはありません。国境を越え、世界に開かれたネットワークの中で、また知の多様性の中で、新たな知識を生成する

ことが求められています。また同時に知識は何のためにあるのか、それをいかに活用すべきか。倫理観や価値観、実践的なスキルの育成も必要とされています。

東北大学大学院教育学研究科では、「アジア共同学位開発プロジェクト」を通じて、東アジアを中心とする有力大学と研究・教育上の広範なネットワークを形成し、教員および大学院生の交流を促進し、共同教育プログラムの開発に着手しました。このプログラムの目的の形式的な側面は、共同教育プログラム（ジョイント・ディグリー）という制度の創設です。その一方で、実質的・本質的な内容を整えなければなりません。それは、知識に加えて、倫理観や価値観、実践的なスキルを備え、多様性の中で普遍的な価値を追求し、実現していく人材の育成です。新たな酒は新たな革袋に入れなければなりません。現在、私たちは、この困難な課題に向かい試行錯誤を繰り返しています。

さて、今回のシンポジウムでは、東北大学大学院教育学研究科を修了し、現在、中国、韓国、台湾の大学で活躍している9名の卒業生を招き、それぞれの国や地域、また勤務先の大学における国際化の現状と課題について報告していただきました。

報告および討議を通して確認できたことは、中国、韓国、台湾いずれにおいても、国際化の動きは怒濤のように推し進められている事実です。お隣の韓国では大学の評価基準の1つに「国際化」という項目が掲げられています。また中国では、「985」「211」などの拠点大学に集中的に資金を投入し、国際的な大学を育成しようとしています。台湾でも同様な政策がとられています。いずれにも国においても、国を挙げて国際化への取り組みが行われています。

その国際化への取り組みですが、9つの報告に垣間見られる教育プログラムの内容から判断すると、いくつかの類型があります。

- ① 国際的卓越性を目的とするプログラム（研究中心プログラム）
- ② 相互の長所と短所を認識した上での共同教育（互惠的共同教育プログラム）
- ③ 開発支援型プログラム
- ④ ビジネス性の高い教育プログラム
- ⑤ 価値観を明確に打ち出したプログラム

これらの類型は截然と分離できるものではありません。むしろ相互に重複している場合も少なくありません。

次に、さまざまな形実施されている共同教育プログラムの教育方法ですが、これは多様です。学部段階の教育になりますが、制度的には「3+1」ないし「2+2」による複数学位、また短期、長期の語学研修を含むプログラム、これに加えて海外インターンシップ、さらには遠隔教育（サイバーキャンパス）なども導入されています。ジョイント・ディグリーについては法的整備が遅れているため、まだ件数は多くありません。じっさい、今回、お招きした9大学にはジョイント・ディグリーはありませんでした。しかし、実施可能な資源を最大限に利用し、また弾力的に組み合わせて、多様な形で国境を越えた教育プログラムを実施していることがわかりました。

こうした教育プログラムの成果については、報告の中であまり言及されていませんでした。

知識を中心とした学習結果（Learning Outputs）ばかりではなく、知識に加え、価値観、態度、スキルなどの幅広い学習成果（Learning Outcomes）をいかに評価し、測定するのか。ラーニング・アウトカム測定・評価は、今日の世界的な潮流となっています。しかし、それはまだ技術的に確立されていません。その測定・評価が理論的にも裏付けられ、社会的にも評価されるようになれば、国境を越える共同教育プログラムはいっそう促進されることになるでしょう。

一つ具体的な例を挙げておきましょう。アジア共同学位開発プロジェクトの発足記念シンポジウムが、2011年7月に行われました。このシンポジウムの中で、本学理学研究科の山口教授は、同じ知識を学ぶにしても、学ぶ場や環境が変わることによって、その同一の知識に対する見方、考え方が変わってくる、との発言をなされています。国境を越える教育プログラムは、学習者にフレームの転換をもたらし、それが知識に深みを与えるきっかけとなりうるのです。まして社会的・文化的な影響を強く受けている社会科学の場合、学びの場を変えることにより、知識は確実に深まるでしょうし、また学習者に批判的思考、複眼的思考、コミュニケーション能力など多様な資質能力の形成が促進されることが期待できます。こうした知識の量ではなく知識の質をいかに測定・評価していくべきか。これは、われわれのプロジェクトの研究課題の一つです。ちなみに、次回の国際シンポジウムでは、このテーマで意見交換を行う予定です。

このシンポジウムで提起された現実的かつ重要な問題の1つは、学生に対する生活面でのサポートです。多くの報告者が、留学時代をふり返り、研究室での人間関係に支えられたことに触れています。安心して研究に取り組むためには、教員や研究室の同僚との人間関係、さらには留学生同士の人間関係なども重要です。

新たに国際的共同教育プログラムを開発し、実施する上では、プログラムの教育目的・目標、授業科目の設定、教育方法の開発、そして適切な評価方法はとても重要です。そして教員の関心は、こうした表のカリキュラムに集中しがちです。しかし、質の高い教育を実現し、望ましい教育成果を達成するためには、表のカリキュラムだけでは不十分です。表のカリキュラムを活かすさまざまな仕組みが必要となります。それは、奨学金や補助金など経済的な支援、宿泊施設の確保と充実、健康保険、さらには心理相談所などであり、しかもこれらのサポート・システムが有効に組み合わせられていなければなりません。これらは一大学の中だけでは十分に対応できないもの、準備できないものも含まれます。地域社会の資源を発見し、活用する必要があります。

国際的な教育プログラムにつきまとう本質的な問題、その功罪についても触れておきましょう。報告の中では、ベトナムやインドネシアからの留学生受け入れを行っている事例もありました。国際的な教育プログラムでは、しばしば学生の動きは一方的になりがちです。多くの場合、学生は「周辺」から「中心」——相対的に学術的なレベルが高いとされている国々、高等教育制度が充実している国々——へと移動し、逆の流れは限定的です。たとえば、欧州においては、学生はアフリカなどの開発途上国から欧州へと流れ込み、また欧州域内においては東や南から西や北への動きが強く認められます。アジアにおいても、この傾向は顕著です。その結果、「中心」では優秀な頭脳を獲得することができますが、反対に「周辺」では頭脳を流出す

ることになります。「周辺」から見ると、国際的流動性の高まりは、たしかに優れた高等教育機関の有する知的・人的ネットワークの中により多くの学生を送り込むことが可能となる一方で、人材流出が加速化し、新たな従属的關係を作り出すことにもなりかねません。バランスの取れた人材の交流が必要になります。

東北大学のプログラムでは、学生と教員との相互交流を目指しています。その流れが一方的にならないように計画を進めています。

最後に、プログラムの魅力についても言及しておきます。韓国の大学では、創設者の思想と教育理念に基づき、平和学を中心とするプログラムを展開しています。周知のように、朝鮮半島の百年の歴史は大変複雑です。現在も分断された国家であり、軍事的緊張感も存在しています。こうした歴史的・地政学な背景から、平和学のコースが誕生してきました。国際的共同教育プログラムを組むとき、そのビジョンは大切です。明確な価値観に基づいたプログラムであれば、プログラムの魅力は高まるでしょう。大学の有する歴史的・文化的背景について再検討し、自己の資源を再発見する必要があります。

今回のシンポジウムでは、2日目の討議の中で率直な意見交換をすることができました。その中には「もう議論するのはやめて、実際にやってみたらどうか」との意見もありました。じつは、このシンポジウムの行われた前の週に、本郷研究科長、工藤教授、朴助教らとスペイン北部の小都市ビルバオにあるデウスト大学を訪問しました。デウスト大学は、ロンドン大学教育研究院、デンマークのオールフス大学と連携し、ヨーロッパ生涯学習修士課程（EMLLL）を運営しています。このプログラムは、EUによって支援されているエラスムス・ムンドゥスに採択された唯一の教育学系のプログラムです。デウスト大学では、この EMLLL 担当教授、他のエラスムス・ムンドゥスの担当教授、さらには副学長にも面会しました。彼らからは共通して「まず、やってみなさい。その中で沢山のことを学ぶことができますよ」と励まされて帰ってきました。個人的には、1週間前の励ましの言葉と、シンポジウムでの助言とが符合したものですから、とても印象に残りました。

新たなプログラムを立ち上げるにあたり、十分な準備をすることはたしかに必要です。しかし、実際にコースを始めてみなければ、じつは何が本当の問題なのかさえも理解できません。良いプログラムを練り上げていくためには、失敗を恐れず、試行錯誤を繰り返しながら改善を重ねていくしかないので。実際にチャレンジしなければ、世界は変わりません。

末尾となりましたが、今回、東アジアのさまざまな国や地域からお集まりいただきました参加者の各位には、改めて心より御礼申し上げます。

編集者

上埜 高志 東北大学大学院教育学研究科副研究科長  
アジア共同学位開発プロジェクト・リーダー  
清水 禎文 アジア共同学位開発プロジェクト・サブリーダー  
朴 賢淑 アジア共同学位開発プロジェクト・専任教員  
田中 光晴 アジア共同学位開発プロジェクト・専任教員  
朴 仙子 アジア共同学位開発プロジェクト・教育研究支援者

アジア共同学位開発プロジェクトシンポジウム報告集Ⅲ

『東アジアにおける高等教育の国際化』

発行日 2012年10月12日  
発行者 東北大学大学院教育学研究科  
東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター  
代表者 上埜 高志  
住所 仙台市青葉区川内 27-1  
Tel/Fax 022-795-3756  
E-mail [ajp@sed.tohoku.ac.jp](mailto:ajp@sed.tohoku.ac.jp)  
印刷 北日本印刷株式会社

